

# 日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書

1984

滋賀県教育委員会

八日市市教育委員会

滋賀県文化財保護協会

# 日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書

1984

滋賀県教育委員会  
八日市市教育委員会  
財團法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県下の県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大に伴い、その件数も年々増加し、本年度は8遺跡が対象となりました。

今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました7遺跡を4分冊に分けて刊行するものです。

ここに、この報告書により、広く埋蔵文化財に関する理解と文化財愛護普及の一助にしたいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行にご協力をいただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和59年9月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

## 例　　言

1. 本書は、滋賀県農林部耕地建設課の実施する吉住池浚渫工事に伴う、日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、滋賀県農林部の依頼により、第一次調査を八日市市教育委員会が、第二、三次調査を滋賀県教育委員会が調査主体となり、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。本書は一、二、三次(昭和57~59年度)にわたる調査の報告である。
3. 調査は、第一次調査を八日市市教育委員会社会教育課技師石原道洋、第二、三次調査を滋賀県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係長丸山竜平を担当者として実施したものであり、現地調査にあたっては、第一次調査においては、大谷祐次、菊井美和、神田淳子、灰谷昌美の、また、第二次調査に際しては大谷巖、図師利兵衛両氏の協力を得た。なお、調査に際しては南菊枝、故田中一雄、県議員北川弥助、八日市市史編纂室中島伸男各氏に格別のご協力をいただいた。
4. 遺物整理、原稿作成にあたっては、丸山、石原のほかに岡本隆子、喜多貞裕、濱修(以上(財)滋賀県文化財保護協会嘱託)、古川登、渡辺泰子が担当し、丸山がとりまとめた。整理には平井美典、竹谷鈴代、長尾ひとみ、寺井弘子、立入和子、福知義久、水谷哲郎、加野喜代子、大塚敬子の各氏のほか多数の人々の協力を得た。
5. 古文書の調査と報告には長谷川淑子、民俗については三露俊男(八日市郷土文化研究会)の両氏の協力を得た。
6. 写真撮影は、現地では担当者と寿福滋が行い、遺物撮影は寿福が行った。
7. 現地作業員として特にご協力いただいた方々は以下のとおりである。  
大谷長兵衛、大谷朝子、北川かず、大谷輝子、大谷寿美枝、大谷くに、久保川貴彦、山口哲造、南くり、南菊枝、上田きし

# 目 次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第2章 第1次調査 .....	3
(1) 調査の概要 .....	3
(2) 調査の内容 .....	7
1. 遺構 .....	7
2. 遺物 .....	7
3. 小結 .....	11
表 .....	15
第3章 第2、3次調査 .....	18
(1) 調査の概要 .....	18
(2) 調査の内容 .....	19
1. 基本土層 .....	19
2. 遺構 .....	20
3. 遺物 .....	20
(1) 土器 .....	21
(2) 瓦 .....	26
(3) 土錐 .....	29
(4) 石器 .....	30
(5) 銅錢 .....	31
4. 小結 .....	31
表 .....	33
第4章 古文書から見た吉住池 .....	59
(1) 江戸時代までの吉住池 .....	59
(2) 近代以降の吉住池 .....	60
(3) 史料 .....	62
(1) 元禄五年 (史料1) .....	62
(2) 元禄十二年 (史料2) .....	63
(3) 明治七年 (史料3) .....	63
(4) 明治六年 (史料4) .....	64
(5) 明治九年一月 (史料5) .....	64

(6) 明治九年三月（史料6）	65
(7) 明治十二年（史料7）	66
第5章 吉住池にかかる民俗	68
第6章 結び—吉住池に関する一試考—	72

# 図 版 目 次

- 図版1 遺跡（上）吉住池全景（東から）  
（下）吉住池全景（南東から）
- 図版2 遺跡（上）吉住池第2、3次調査前（北から）  
（下）吉住池第2、3次調査前（東から）
- 図版3 遺跡（上）吉住池第1次調査後近景（南から）  
（下）吉住池第1次調査後近景（北から）
- 図版4 遺跡 第1次調査 （上）吉住池全景（南から）  
（下）吉住池全景（西から）
- 図版5 遺跡 第1次調査 （上）第1トレンチ水路2南部（南から）  
（下）第1トレンチ水路2南部（北から）
- 図版6 遺跡 第1次調査 （上）第7トレンチ水路2（南から）  
（下）第7トレンチ水路2（南から）
- 図版7 遺跡 第1次調査 （上）第8トレンチ（北から）  
（下）第8トレンチ（南から）
- 図版8 遺跡 第1次調査 （上）湧水土塙II（西から）  
（下）湧水土塙II（西から）
- 図版9 遺跡 第1次調査 （上）湧水土塙II（北から）  
（下）湧水土塙II（東から）
- 図版10 遺跡 第1次調査 （上）湧水土塙I（西から）  
（下）湧水土塙I（南から）
- 図版11 遺跡 第1次調査 （上）第4トレンチ池床起伏状況（南から）  
（下）水路2遺物出土状況（南から）
- 図版12 遺跡 第2、3次調査（上）完掘後全景（西から）  
（下）完掘後近景（北から）
- 図版13 遺跡 第2、3次調査（上）完掘後近景（南から）  
（下）完掘後近景（南東から）
- 図版14 遺跡 第2、3次調査（上）敷石遺構全景（南から）  
（下）敷石遺構近景（南から）
- 図版15 遺跡 第2、3次調査（上）敷石遺構近景（北から）  
（下）敷石遺構近景（南から）

- 図版16 遺跡 第2、3次調査（上）第1トレンチSD-1（南から）  
（下）第1トレンチSD-1（北から）
- 図版17 遺跡 第2、3次調査（上）第2トレンチSD-1（南東から）  
（下）第2トレンチSD-1（南西から）
- 図版18 遺跡 第2、3次調査（上）第2トレンチSD-1遺物出土状況（南から）  
（下）第2トレンチSD-1遺物出土状況（南東から）
- 図版19 遺跡 第2、3次調査（上）第3トレンチ（東から）  
（下）第3トレンチ（西から）
- 図版20 遺跡 第2、3次調査（上）第3トレンチ（東から）  
（下）第3トレンチ大井（西から）
- 図版21 遺跡 第2、3次調査（上）第3トレンチ大井（西から）  
（下）第3トレンチ軒丸瓦出土状況（南東から）
- 図版22 遺跡 第2、3次調査（上）第4トレンチ石垣（南から）  
（下）第4トレンチ石垣、敷石遺構（北から）
- 図版23 遺跡 第2、3次調査（上）第4トレンチ石垣（南西から）  
（下）第4トレンチ石垣断面状況（南東から）
- 図版24 遺跡 第2、3次調査（上）第5トレンチ弁天島（東から）  
（下）第5トレンチ弁天島（西から）
- 図版25 遺跡 第2、3次調査（上）第5-1トレンチ（東から）  
（下）第5-1トレンチ（西から）
- 図版26 遺跡 第2、3次調査（上）第5-1トレンチ（東から）  
（下）第5-1トレンチ（西から）
- 図版27 遺跡 第2、3次調査（上）第5-1トレンチ断面状況（西から）  
（下）第5-1トレンチ断面状況・弁天島（北から）
- 図版28 遺跡 第2、3次調査（上）第5-2トレンチ（西から）  
（下）第5-2トレンチ（東から）
- 図版29 遺跡 第2、3次調査（上）第5-2トレンチ断面状況（西から）  
（下）第5-2トレンチ断面状況（東から）
- 図版30 遺跡 第2、3次調査（上）第6トレンチ石垣、敷石遺構（西から）  
（下）第6トレンチ敷石遺構（東から）
- 図版31 遺跡 第2、3次調査（上）第7トレンチSD-2（西から）  
（下）第7トレンチSD-2（南から）
- 図版32 遺跡 第2、3次調査（上）第7トレンチSD-2（北西から）  
（下）第7トレンチSD-2（南西から）

- 図版33 遺跡 第2、3次調査（上）第8トレンチ（北から）  
（下）第8トレンチ（南から）
- 図版34 遺物 第1次調査 須恵器
- 図版35 遺物 第1次調査 （上）須恵器（表）  
（下）須恵器（裏）
- 図版36 遺物 第1次調査 須恵器、土師器
- 図版37 遺物 第1次調査 （上）弥生式土器、土師器（表）  
（下）弥生式土器、土師器（裏）
- 図版38 遺物 第1次調査 土師器、石製品
- 図版39 遺物 第2、3次調査 土師器
- 図版40 遺物 第2、3次調査 須恵器、染付
- 図版41 遺物 第2、3次調査（上）縄文式土器、土師器（表）  
（下）縄文式土器、土師器（裏）
- 図版42 遺物 第2、3次調査（上）弥生式土器、土師器（表）  
（下）弥生式土器、土師器（裏）
- 図版43 遺物 第2、3次調査（上）土師器（表）  
（下）土師器（裏）
- 図版44 遺物 第2、3次調査（上）土師器、黒色土器（表）  
（下）土師器、黒色土器（裏）
- 図版45 遺物 第2、3次調査（上）黒色土器、瓦器、瓦質土器（表）  
（下）黒色土器、瓦器、瓦質土器（裏）
- 図版46 遺物 第2、3次調査（上）染付（表）  
（下）染付（裏）
- 図版47 遺物 第2、3次調査（上）染付（表）  
（下）染付（裏）
- 図版48 遺物 第2、3次調査（上）染付（表）  
（下）染付（裏）
- 図版49 遺物 第2、3次調査（上）染付（表）  
（下）染付（裏）
- 図版50 遺物 第2、3次調査（上）染付（表）  
（下）染付（裏）
- 図版51 遺物 第2、3次調査（上）染付、磁器、陶器（表）  
（下）染付、磁器、陶器（裏）
- 図版52 遺物 第2、3次調査（上）陶器（表）

(下) 陶器(裏)

図版53 遺物 第2、3次調査 (上) 陶器(表)

(下) 陶器(裏)

図版44 遺物 第2、3次調査 (上) 陶器(表)

(下) 陶器(裏)

図版55 遺物 第2、3次調査 (上) 陶器(表)

(下) 陶器(裏)

図版56 遺物 第2、3次調査 (上) 陶器(表)

(下) 陶器(裏)

図版57 遺物 第2、3次調査 軒丸瓦、軒平瓦、隅平瓦

図版58 遺物 第2、3次調査 (上) 丸瓦(表)、平瓦(表)

(下) 丸瓦(裏)、平瓦(裏)

図版59 遺物 第2、3次調査 (上) 平瓦(表)

(下) 平瓦(裏)

図版60 遺物 第2、3次調査 (上) 平瓦(表)

(下) 平瓦(裏)

図版61 遺物 第2、3次調査 (上) 平瓦(表)

(下) 平瓦(裏)

図版62 遺物 第2、3次調査 土鍤

図版63 遺物 第2、3次調査 石製品、銅錢

図版64 位置図 (5万分の1)

図版65 位置図 (2万5千分の1)

図版66 第1次調査前地形図・トレンチ配置図

図版67 第2、3次調査前地形図・トレンチ配置図

図版68 第2、3次調査後地形図・トレンチ配置図、遺構図

図版69 第2、3次調査断面図 (第1トレンチ)

図版70 第2、3次調査断面図 (第2、3、8-2トレンチ)

図版71 第2、3次調査断面図 (A、Bセクション・第7、8-1トレンチ)

図版72 第2、3次調査断面図 (第4、5トレンチ)

図版73 第2、3次調査 弥生式土器、土師器、須恵器

図版74 第2、3次調査 織文式土器、土師器

図版75 第2、3次調査 土師器、須恵器

図版76 第2、3次調査 土師器、黒色土器

図版77 第2、3次調査 須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、銅錢

- 図版78 第2、3次調査 軒丸瓦、軒平瓦、隅平瓦
- 図版79 第2、3次調査 丸瓦、平瓦
- 図版80 第2、3次調査 丸瓦、平瓦
- 図版81 第2、3次調査 平瓦
- 図版82 第2、3次調査 土鍤
- 図版83 第2、3次調査 土鍤
- 図版84 第2、3次調査 石製品

## 挿 図 目 次

挿図1. 日吉・吉住池遺跡周辺遺跡分布図	2
挿図2. 日吉・吉住池遺跡位置図	4
挿図3. 第一次調査遺構平面図	5
挿図4. 第一次調査トレンチ配置概略図	6
挿図5. 第一次調査遺構平面図	7
挿図6. 断面実測図	8
挿図7. 断面実測図	8
挿図8. 遺物出土状況平面図	10
挿図9. 出土遺物実測図	13
挿図10. 出土遺物実測図	14
挿図11. 湖東平野の等高線	72
挿図12. 吉住池周辺地図	74
挿図13. 湖東平野の水系図(明治25年調査5万分の1地形図による)	81

## 表 目 次

表1 第一次調査土器観察表	15
表2 軒丸瓦計測表	27
表3 第二、三次調査土器観察表	33
表4 陶磁器観察表	43
表5 瓦観察表	52
表6 土鍤観察表	56

## 第1章 遺跡の位置と環境

八日市市域は鈴鹿山脈に端を発する県下第三位の大河川である愛知川によって形成された扇状地である。この愛知川は八日市市の南方の布引山丘陵に平行して流れたあと、美作山に流れを阻まれるように北へ流れを変える。この流れも古くは箕作山と瓶剣山との間を通過し、西の湖や大中の湖に流入していたようだ。

扇状地の扇央地帯は地表水が地下水となり水田開発が非常に困難となる。その為現在でも布引山丘陵の山麓や、愛知川右岸の愛東町には数多くの溜池が存在する。また扇状地で伏流水となった湧水帯は、海拔100~110mの八日市市中羽田町から愛知川町豊満を結ぶ線で示される。この伏流水の一部は箕作山山塊に流れを阻止され、海拔119mの吉住池において湧水している。この湧水は開発困難な扇状地にあっても、特別有利な条件を古代より与えていたものと思われる。

今回調査した吉住池は、現在も池の東に県道八日市・五箇荘線や近江鉄道が通り、近世にも吉住池の東西を伊勢詣りに向う古道として利用していた。古来より交通の要衝として重要な位置を占めていたといえる。

吉住池周辺の遺跡では、吉住池の南に1979年の発掘調査で縄文時代晚期の竪棺墓と弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡、方形周溝墓、7世紀前半から奈良時代にかけての住居跡群が検出された。また箕作山山麓の瓦屋寺カマエ遺跡では縄文時代から奈良時代の遺物が発見されている。更に箕作山東斜面には古墳時代後期の瓦屋寺山古墳群が57基以上存在し、白鳳時代の瓦窯である時雨谷遺跡と崩ヶ谷遺跡がある。また、聖徳太子創建伝承をもつ瓦屋寺がある。

八日市市は愛知川の扇状地として、平安時代以降開発が進んだと考えられていたが、先の、日吉遺跡や、雪野山山麓の下羽田遺跡や内堀遺跡の弥生時代の遺構が発見されたことで、住民の定着は大きく溯ることとなった。

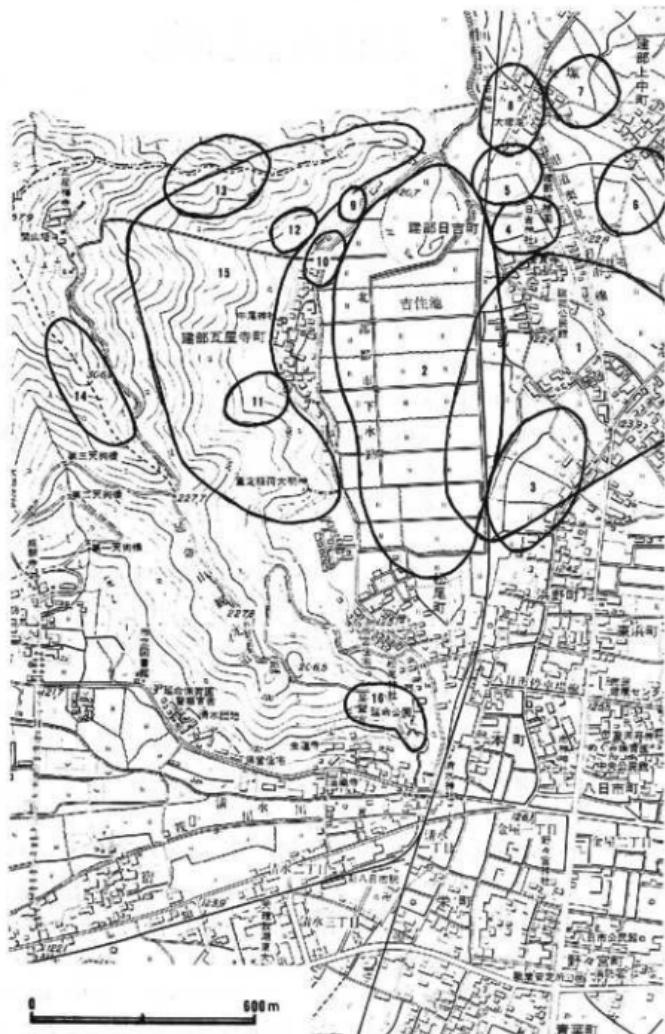
また、吉住池周辺や布施溜池、羽田地区などで奈良時代以前の古条里の存在が確認されている。神崎郡では奈良時代以降の条里が北-33°-東であるが、吉住池周辺の古条里ではほぼ北を示している。この事実は吉住池周辺が奈良時代以前にすでに開発され、中央の支配領域でもあった事を示している。

平安時代になると吉住池も荘園領主によって支配された地域になる。吉住池を中心とした地域は日吉社領の建部荘として存在し、また近江一の宮の建部神社の故地とも言われている。

近世になってからは池の支配をめぐって、日吉村と池の下流の伊野部村・平坂村・木流村・下野村四ヶ村との争論が記録されている。また、たびたび池床の浚渫作業も行われている。更に、豊富な淡水魚は地元住民の重要なタンパク源として利用されていた。

これら吉住池をめぐる地理と歴史は地元や下流の人々の生活に深く根ざしている。

(石原道洋)



挿図1 日吉・吉住池遺跡周辺道路分布図

- |           |          |            |            |
|-----------|----------|------------|------------|
| 1. 上日吉遺跡  | 5. 中宮寺遺跡 | 9. 瓦屋寺北山遺跡 | 13. 地蔵谷遺跡  |
| 2. 日吉遺跡   | 6. 浅前遺跡  | 10. 瓦屋寺遺跡  | 14. 東山遺跡   |
| 3. 上日吉南遺跡 | 7. 建部城遺跡 | 11. 扇ヶ谷遺跡  | 15. 瓦屋寺山遺跡 |
| 4. 馬場遺跡   | 8. 大塚遺跡  | 12. 時雨谷遺跡  | 16. 延命山遺跡  |

## 第2章 第1次調査

### 1) 調査の概要

八日市市建部日吉町地先に所在する吉住池は日吉の溜とも呼ばれ、愛知川の伏流水が湧水となって常に清水を溝々とたたえた溜であった。この溜は下流の五個荘町伊野部方面にかけて田養水を供給してきたが、近年愛知川ダムの建設等の関係で湧水も減り、年々ヘドロの堆積が著しく進行している。

このため滋賀県農林部耕地建設課、八日市土木事務所耕地建設課は、昭和57～59年度の3ヶ年にわたり池底の浚渫工事を実施することになった。

しかし、この吉住池の周辺では、昭和54年度には場整備事業に先立ち発掘調査が実施され、織文時代から奈良時代にわたる複合遺跡である日吉遺跡が確認された。当地はこの日吉遺跡の北側に隣接するため、遺跡が北へ広がる可能性も強く、今回、浚渫工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

調査は1983年1月27日から同2月8日まで現地調査にあたり、以後整理作業を行った。

現在吉住池は挿図3の如く南部に湧水土抜が數ヵ所掘られ、ここから湧き出た水が集まって流路をつくり、北部へ流れている(水路1)。また、西南部中央付近に別の水路(水路2)があり、北へ流れ水路1に合流している。

今回の浚渫工事では、西半分が掘削土の仮置場となり掘削がおこなわれないため、水路2より東の部分の発掘調査となった。トレンチの設定は次のとおりである。

▶幅約2mの第1トレンチを西南から北東に向かって設定し、これに直角方向に東南から北西へ第2トレンチを設定した。

▶第1トレンチ西南端で水路2が検出されたため、この輪郭を追うべく、第4・6・7トレンチを設定した。

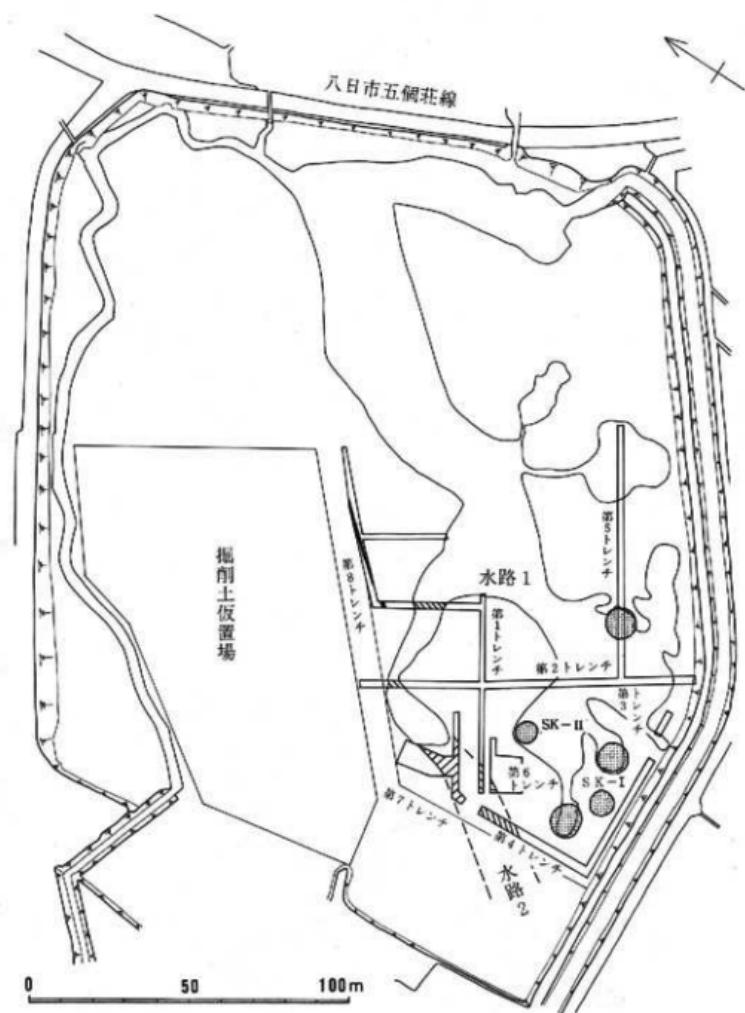
▶日吉遺跡との接点を探るべく、第3トレンチを設定し、第4トレンチを東へ延長した。

▶さらに、掘削土仮置場との境界に沿って第8トレンチを設定し、これから東南へ向かって2本トレンチを伸ばした。

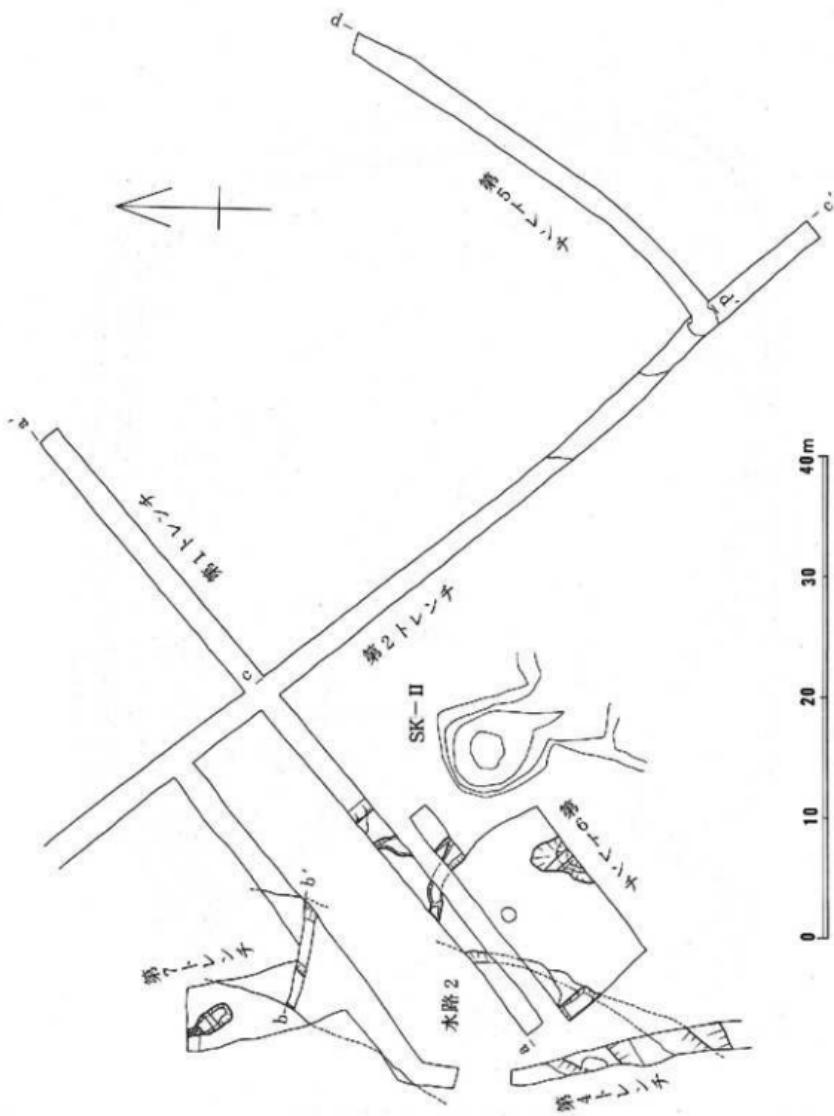
基本土層は、表土が暗茶黒色腐植土で、平均して約20cmの深さがあり、全体を覆っている。次に灰褐色、茶褐色系の砂礫層が何層か堆積しており、さらにその下に褐色系の砂礫層が堆積する。これがベースで、各トレンチの最下層にこの層が広がっている。



挿図2 日吉・吉住池遺跡位置図



挿図3 第1次調査トレンチ配置概略図



補図4 第一次調査遺構平面図

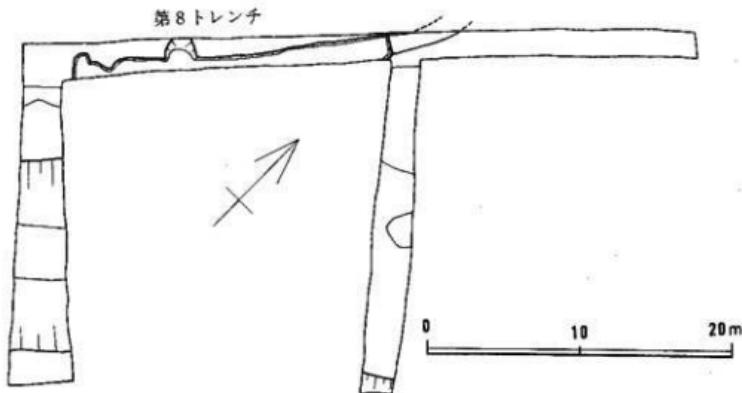
## 2) 調査の内容

### 1. 遺構

水路1……第2トレンチで断ち割ったが、ベースがゆるやかに下がり、その上に腐植土がやや厚目に堆積している。遺物は当トレンチからは出土していない。

水路2……第1・2・4・6・7トレンチおよび第8トレンチで確認した。とくに第1・7トレンチで土師・須恵器片等の出土が多い。水路幅は10~12mで、第2トレンチの部分で幅約4mと細くなり東方に流路を変えている。肩部はゆるやかで、最深部で肩部から約40cmしか比高差はない。埋土は暗茶黒色粘質土で表土（腐植土）と基本的にはよく似ているが、腐植土でない点で異なる。

SD-1・2……第1トレンチで浅い溝状遺構が検出されたため、第6トレンチを若干延長した。SD-1は幅約1m、深さは2~10cmしかない。SD-2についてはほとんど消えかかっており、第6トレンチに向かって伸びるが、第6トレンチでは消滅している。



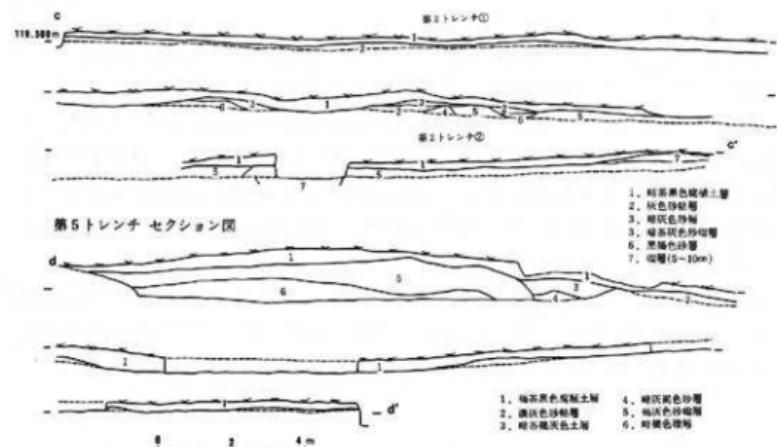
挿図5 第一次調査遺構平面図

SK-I……湧水土塙を断ち割ってみた。直径約10mで、表土の落ち込みは約60cmある。中央部では茶黒色粘質土が厚さ40cmほど堆積している。ベースは褐色砂礫層である。

### 2. 遺物

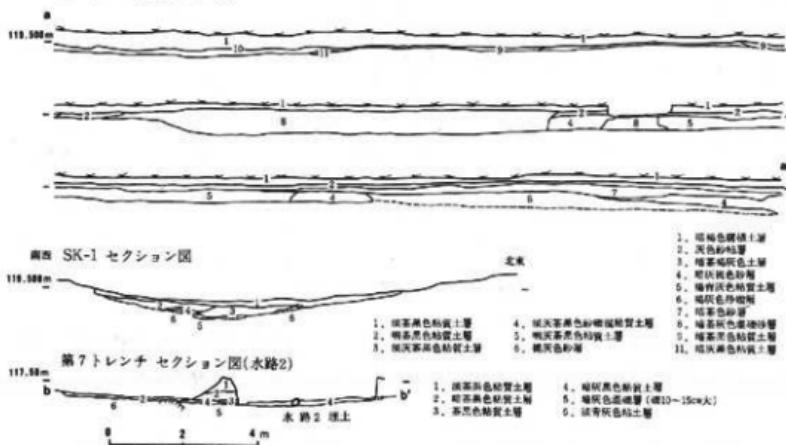
当跡から弥生式土器・土師器（H-1~16）、須恵器（S-1~26）および石製品（Z-1）等が出土しているが、大半が水路2の埋土中のもので、そのほか湧水土塙（SK-I）から若干の土師器が出土したのみである。水路2出土の土師器壺や須恵器の甕・杯蓋・杯身等

第2トレンチ セクション図



挿図6 断面実測図

第1トレンチセクション図



挿図7 断面実測図

は7世紀初頭から前半にかけての時期を示している。

また、SK-I出土の灯明皿（H-16）は近世以降の遺物と思われる。

#### 第1 トレンチ

甕（H-1）……弥生時代末期の台付甕の脚部である。胸部外面は荒いハケ目調整を行うが、脚部は内外面ともにヨコナデ調整である。脚部の内端部が少し肥厚する。

塊（H-2～5）……底部が丸やかで、体部～口縁部も内湾している。口縁端部は内傾する端面を成す。体部から底部内面は丁寧なヘラナデ調整、体部外面はヘラ削りしている。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行う。H-2・3の内面には放射状暗文が施される。

塊（H-6）……明瞭な底部を有し、口縁部も直立する。口縁端部は外上方につまれ、内傾する端面を成す。体部から底部内面は丁寧なナデの後、下からラセン状暗文、放射状暗文の順に施文する。外面は指ナデ調整で接合部を消している。口縁部外面はヨコナデ調整を行う。

塊（H-7）……H-2～6に比して小型の椀で、器壁も薄い。

鍋（H-8）……内湾する半球形の体部を有し、外上方に口縁部が伸びる。口縁端部は垂直な端面を成す。体部内面は目のつまつたヨコハケ目調整、外面は斜方ヘラ削り調整である。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を行う。

長甕把手（H-9）……長甕の最大腹部に上そりで平面三角形の把手が付けられる。胴部内外面ともに斜方ハケ目調整を行う。

平瓶（S-1）……最大腹部は中央位よりやや上にある。天井部に円形浮文が1個貼付される。胴部成形後に天井部をヘラでくり抜いて口縁部を装着する。底部外面はヘラ削りしている。

▶甕（S-2）……頸部は丸く屈曲して口縁部が外上方に開く。口縁端部は外面に肥厚する。口頭部内外面ともにヨコナデ調整を行う。肩部内面は同心円文叩き目、外面は平行叩き目調整である。

▶壺（S-3）……少し肩の張る胴部を有し、口縁部は外開きしながら立ち上がる。胴下半部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。

▶坏蓋（S-4～6）……かえりをもたず、口縁部が外面に稜を成して外反する形態のもので、天井部はやや丸い。天井部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整である。

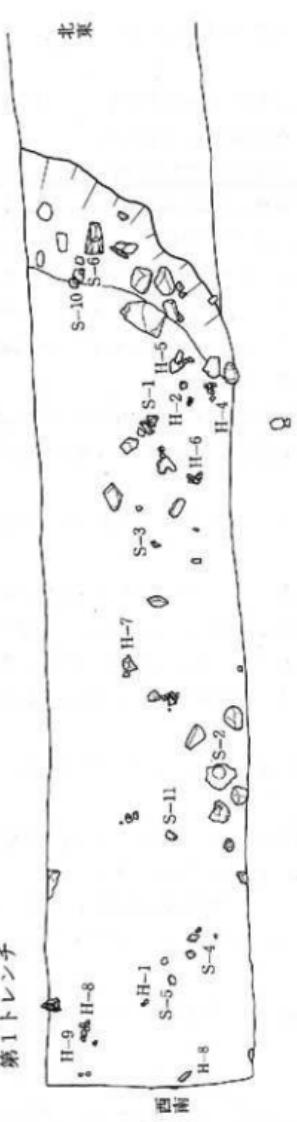
▶坏身（S-7～14）……全般的に立ち上がりが短く、底部の不安定な坏身である。その中で比較的立ち上がりのしっかりしたS-7～9と小さいS-10～14にタイプが分かれる。底部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整である。

▶紡錘車（Z-1）……滑石製の紡錘車で、斜面はかなり摩耗し盛んでいる。斜面には斜方には條痕が廻る。

#### 第4 トレンチ

▶壺（H-10）……弥生後期の壺肩部で頸部屈曲部外面に突帯が貼付される。突帯はさらに棒状工具により刺突される。肩部外面には櫛描平行線文が廻る。内面はハケ調整のようである。

第1トレンチ



第4トレンチ

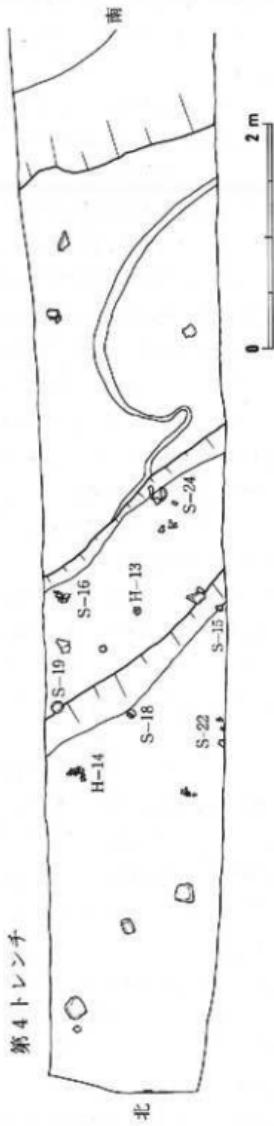


図8 遺物出土状況平面図

- ▶ 裂（H-11・12）……弥生時代末期の近江型裂の口縁部である。H-11はH-12に比して口縁部の直立度が強く、外面に2個一単位の沈線が2条廻る（板状工具）。H-12は口縁部内外面ともにヨコナナデ調整を行う。
- ▶ 高坏（H-13）……中空の脚部を有する高坏で、脚部の裾部で外反度が大きくなる。内外面ともに指ナナデ調整である。接合部外面に沈線が2条廻るが、全体に荒いつくりである。
- ▶ 裂（H-14）……ほぼ球形の胴部を有する。口縁部は端部で内外から強くつまれる。口縁部内外面ともにヨコナナデ調整を行う。胴部外面には煤が付着する。
- ▶ 高坏（S-15）……透しではなく、脚裾部の外反が大きい。脚部外面に沈線が一条廻る。
- ▶ 裂（S-16・17）……S-16は口縁端部が内外に肥厚し、S-17は内側に肥厚して内傾する端面を成す。胴部内面は同心円文叩き目、外面は平行叩き目による調整である。
- ▶ 坏蓋（S-18・21）……S-18・19はかえりをもたず、天井部と体部が明瞭な棱で画される。口縁端部は丸い。S-20は口縁部で一旦外反しさらに下方へ垂下する。調整は、天井部を板で叩く（S-18）か、ヘラ削りする（S-19・20）ほかはヨコナナデ調整である。S-21は本体よりも長いかえりを有し、天井部外面に宝珠つまみを付ける。天井部外面のみヘラ削りし、そのほかはヨコナナデ調整である。
- ▶ 坏身（S-22・25）……立ち上がりの短い环身であるが、S-22・23の立ち上がりは内湾して内上方に伸び、S-24・25のそれは太短くまっすぐに伸びる。底部外面をヘラ削りするほかはヨコナナデ調整である。

#### 第6 トレンチ

- ▶ 高坏（H-15）……中実ぎみの脚部を有する高杯で、裾部に至って外方に開く。端部は丸い。調整は内外面とともに指ナナデ調整であるが、外面にはハケ目状の擦痕が残る。

#### 第7 トレンチ

- ▶ 坏身（S-26）……本体口縁部と立ち上がりがほぼ水平の位置にある。調整は内外面とともにヨコナナデ調整である。

#### S K - 1

- ▶ 皿（H-16）……ほとんど底部はなく丸やかである。口縁部が外反し、端部は外上方に尖る。全体に指ナナデ調整を行う。口縁部には煤が付着する（灯明皿）。

### 3. 小 結

(註1)

昭和54年度に発掘調査が実施された日吉遺跡では、吉住池に最も近づく第1トレンチにおいて（距離約100m）、縄文時代晩期の複数墓のはか、7世紀前半（SB-4～6）と7世紀後半から8世紀前半（SB-1）の時期の竪穴式住居跡群などの遺構が検出されている。

また、同遺跡第2～4トレンチからは、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡群および方形周溝墓群が微高地にかけて存し、7世紀後半から奈良時代に亘って建て替えをしながら存続した掘立柱建物跡群（官衙あるいは豪族の館跡）も検出されている。

そして、第1・第2トレンチの西方部は沼沢地を形成している。

第1トレンチ検出の堅穴式住居跡のうち、7世紀前半のものは沼沢地に近い地点で営まれ、7世紀後半から8世紀前半のものはトレンチ東端で1基だけ検出された。後者の時期の集落は、このSB-1を西限として東方の現建部日吉町集落付近にひろがるようである。

今回の吉住池遺跡の発掘調査で検出された水路2は、日吉遺跡第1・2トレンチの沼沢地から流れ出た自然水路であると思われる。埋土中の出土遺物は7世紀前半のものがほとんどであり、新しいものはみられない。

水路2出土遺物と日吉遺跡第1トレンチ沼沢地付近の住居跡群（SB-4~6）の出土遺物がほぼ同時期であることから、SB-4~6の住人が遺棄した遺物が水路2へ流れ込んだと理解される。また、水路2の出土遺物に新しい要素が含まれないということから、7世紀後半のSB-1が営まれた時期には水路2は埋まっていたか、遺物の流入しえない状況であったと思われ、同時に日吉遺跡第1トレンチの沼沢地もその様相が失なわれていたことが伺える。

のことと、日吉遺跡第1トレンチの住居跡群が7世紀前半から後半以降の時期に西から東へ、つまり低地から高所へと移る事実とを併せて考えると、7世紀後半以降、日吉遺跡北西部から現在の吉住池までの間の低湿地が水田化し、集落自体は微高地へと移動していったことが推定されるのである。

近年ヘドロが堆積するまでの吉住池は、きれいな清水の湧き出る湧水地であり、五個荘町伊野部への貴重な水源であった。当遺跡で検出された数基の湧水土塙は、水の乏しい時期に水源を確保するために人为的に掘削されたものである。SK-1からは樋口などの遺構は検出されなかったが、これらいくつかの土塙から水路で導かれた水が集まって水路1を形成し、水路2と合流して池の北西部へ流れている。

この湧水土塙がはじめて掘削された時期は定かでないが、旧来建部日吉町と建部瓦屋寺町との間には、何カ所かの湧水地が存したらしく、当地がその最下流部に該当する。吉住池以南が完全に埋め立てられて水田化し、吉住池が現在の規模に縮少された後にこれら湧水土塙が掘削されたと考えられる。それ以前は数カ所の湧水地から湧き出た水が箕作山から張り出した尾根の突端に妨げられ、北へ一気に流れず池を形成したのであろう。

今回の発掘調査は吉住池の南半分のみの調査であったため、日吉遺跡と接する南端部分を中心に調査したが、水路2以外は主な遺構は得られず、日吉遺跡の北限が明らかとなった。

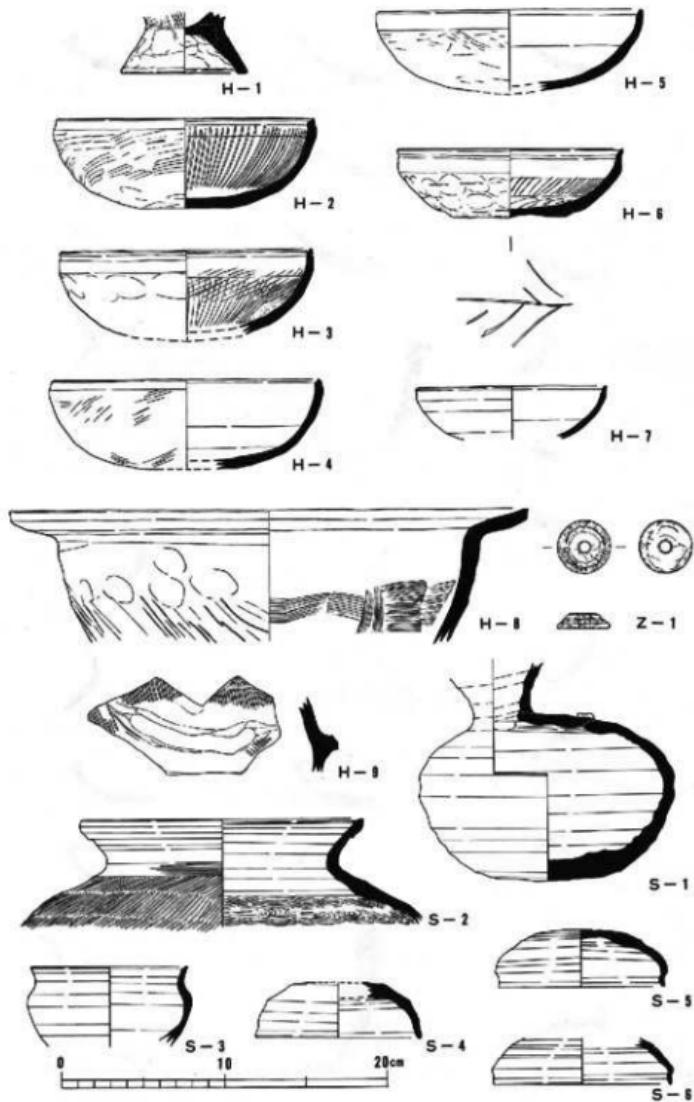
しかし、昭和58年度の北半分の発掘調査（第2次調査）により、五個荘町へ水を落とす取水口付近から堤防状遺構が検出されており、吉住池からの放流がここで調節されていたことが明らかとなつた。

（石原道洋）

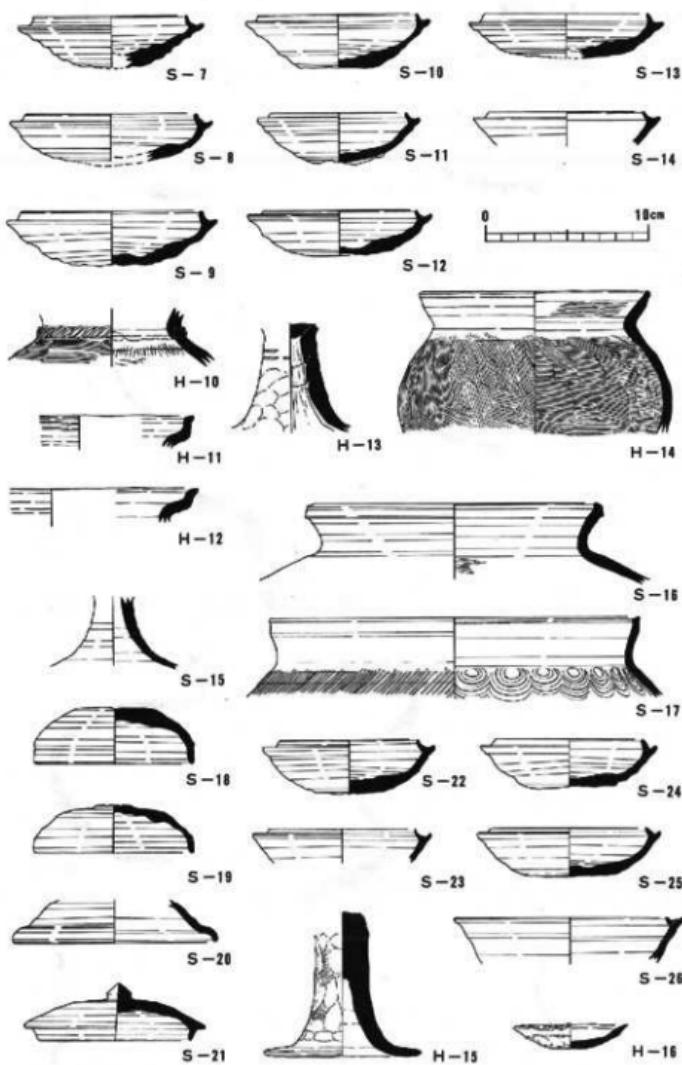
註1 「八日市市上日吉遺跡」『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-2』滋賀県教育委員会、

（財）滋賀県文化財保護協会（1979）

\* 当時は上日吉遺跡と呼んでいたが、上日吉古墳群とまぎらわしいため日吉遺跡と改称した。



插図9 出土遺物実測図 S-7~14: 第1トレンチ水路2出土、S-26: 第7トレンチ水路2出土  
 H-10~14、S-15~25: 第4トレンチ水路2出土、H-16: SK-1堆  
 土出土、H-15: 第6トレンチ水路2出土



挿図10 出土遺物実測図

H-1、S-1~6、Z-1:第1トレンチ水路2出土

表1 土器観察表

器形	番号	法量(cm)	色調	胎土	備考
弥生式土器	縹脚部 H-1	脚径 7.8	淡褐色	0.5~1、3~5mm大の砂粒を含む	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-2	口径 16.2 器高 5.5	淡褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-3	口径 15.6	明灰褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-4	口径 16.2	淡褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-5	口径 16.1	淡褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-6	口径 13.8 器高 4.2 底径 7.0	灰褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	塊 H-7	口径 11.4	淡赤褐色	精 良	第1トレンチ 水路2出土
	鍋 H-8	口径 32.0	灰褐色	0.5~1mm大の砂粒(石英、長石、雲母)を多く含む	第1トレンチ 水路2出土 頭部以下外面に煤が付着する。
	長縹把手 H-9	—	淡褐色	0.5~1mm大の砂粒(石英、長石)を含む	第1トレンチ 水路2出土
	縹頭部 H-10	頭径 16.5	灰褐色	0.5mm内外の砂粒(石英、チャート)を含む	第4トレンチ 水路2出土
師器	縹 H-11	—	灰褐色	0.5~2mm大の砂粒(石英、チャート、長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土
	縹 H-12	—	灰褐色	1~3mm大の砂粒(石英、長石、チャート)を含む	第4トレンチ 水路2出土 焼成やや甘し
	高杯 H-13	—	淡赤褐色	精 良	第4トレンチ 水路2出土
	縹 H-14	口径 13.8	灰褐色	0.5~1mm大の砂粒(石英)を含む	第4トレンチ 水路2出土
皿	高杯 H-15	脚径 9.8	淡灰褐色	0.5~1mm大の砂粒(石英、雲母)を含む	第6トレンチ 水路2出土
	H-16	口径 6.9 器高 1.6 底径 2.4	淡褐色	精 良	S K-1 墓土中出土

	器形	番号	法量(cm)	色調	胎土	備考
須恵器	平瓶	S-1	最大幅径 15.7	灰色 内面光沢あり 外面一部に 灰がかかる	1.0mm大の砂粒(石英、 長石)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ左回転
	甕	S-2	口径 17.4	暗灰色	0.5~2.0mm大の砂粒(石英・長石)を多く含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転 口縁部内面、肩部外面に自然地かかる
	無蓋壺	S-3	口径 9.7	暗灰色 (表面黒ずむ)	0.5mm内外の砂粒(チャート・石英)を多く含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋	S-4	口径 10.1	暗灰色	0.5~1.0mm大の砂粒(石英・長石・チャート)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋	S-5	口径 10.2 器高 3.5	淡灰色	0.1~0.3mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ左回転
	坏蓋	S-6	口径 10.8	淡褐色	0.2~0.5mm大の砂粒を含む	第1トレーナー 水路2出土
	坏身	S-7	口径 9.2	灰色	精 良	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ左回転
	坏身	S-8	口径 10.4	淡灰色 (外面暗い)	0.5mm内外の砂粒(石英・チャート)を含む	第1トレーナー 水路2出土
	坏身	S-9	口径 11.0 器高 3.4 底径 4.2	外面 暗褐色 内面 淡褐色	0.5~1.5mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S-10	口径 9.4 器高 3.3 底径 5.4	灰色	0.1~0.5mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S-11	口径 8.4 器高 3.0	暗灰色	精 良	第1トレーナー 水路2出土 底面ヘラ削りの上に粘土が付着。 ロクロ右回転
	坏身	S-12	口径 9.4 器高 2.7 底径 6.0	褐色	0.1~0.5mm大の砂粒(長石)を含む	第1トレーナー 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S-13	口径 10.0	淡灰色	精 良	第1トレーナー 水路2出土

器形	番号	法量(cm)	色調	胎土	備考
須 恵 器	坏身 S-14	口径 9.5 器高 3.4	淡灰褐色	0.2~0.5mm大の砂粒を含む	第1トレンチ 水路2下(砂)層出土
	高坏 S-15	-----	暗灰色	0.5mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土
	壞 S-16	口径 17.3	淡灰色	0.3~0.7mm大の砂粒(石英)を含む	第4トレンチ 水路2出土
	壞 S-17	口径 22.8	淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転 焼成不十分
	坏蓋 S-18	口径 9.8 器高 3.4	灰色	0.5~3.0mm大の砂粒(石英・長石)を少し含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋 S-19	口径 9.8 器高 3.0	灰色	0.5~1.5mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋 S-20	口径 12.3	淡褐灰色	0.2mm大の砂粒(長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土
器 他	坏身 S-21	口径 9.5	暗灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身 S-22	口径 8.5 器高 3.3 底径 5.4	内面 暗灰色 外面 淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	杯身 S-23	口径 9.2	灰色	0.2~0.5mm大の砂粒(長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身 S-24	口径 9.0 器高 2.9 底径 5.8	褐灰色	0.3~1.0mm大の砂粒(長石)を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
その 他	坏身 S-25	口径 9.6 器高 3.0 底径 4.6	淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身 S-26	口径 12.0	暗灰色	0.5~1.0mm大の砂粒(石英・長石)を含む	第7トレンチ 水路2出土
筋鉢車	Z-1	直徑 3.2 孔徑 0.7	暗綠灰色	滑石製	第1トレンチ 水路2下(砂)層出土 重さ 14.9g

## 第3章 第2、3次調査

### 1) 調査の概要

二次、三次調査は滋賀県教育委員会が調査主体となり、(財)滋賀県文化財保護協会が実施機関として行った。期間は二次調査が1983年11月28日から1984年3月末日、三次調査が1984年4月2日から9月30日までである。三次調査は二次調査で検出した敷石遺構の範囲確認のために実施したため、今回の報告では同時調査の扱いとして一括してとりまとめた。

調査範囲は池の南半を一次調査で八日市市教育委員会が実施したため、池の北半を調査した。(図版68)

調査は調査区の中央に南北2本のAセクション、Bセクションを壁面観察用に残し、バックホールにより表土の除去を行った。表土はヘドロ状の濃茶褐色腐植土層と暗緑灰色腐植土層を基本とした堆積を示していた。この暗緑灰色腐植土層は遺物の包含層である。この結果調査区の北側面で池の土手に平行して、南北北向に大溝SD-1を検出した。この溝は北流し北辺の樋門に集中していたと思われる。また、調査区の中央部分でSD-1に直交するように北東に向う大溝SD-2を検出した。更にSD-1の部分を覆う敷石遺構を検出した。この敷石は溝の東肩部から池の中央部分にかけて現われ、Aセクションと第3トレンチで最大幅を計り、Bセクションで最小幅となるS字状の石敷である。

表土の除去は図版68の網目部分については実施できなかった。特に第2トレンチ南側部分からは旧日本軍のものと思われる機関砲実弾10発・小銃実弾2発・焼夷弾・銃剣などが発見されたことから、遺構の検出は不可能であった。

溝SD-1、SD-2・敷石遺構確認のため次のようにトレンチを設定した(図版68)。AトレンチはSD-1の東肩・敷石の範囲確認のために設定した。第2トレンチはSD-1の西肩と敷石確認のために、池の東岸から中央に向けて設定した。第3トレンチは人井の取水口から西に設定し、敷石遺構とSD-1の検出を行った。第4トレンチは北岸堤の敷石確認のために設定した。第5トレンチも敷石確認のために設定した。第5トレンチは中央のセクションより東半部を第5-1トレンチ、西半部分を第5-2トレンチとした。第6トレンチは第1トレンチの中央付近で東側堤に向けてトレンチを拡張して敷石の確認を行った。

第7・8トレンチは南西から北東に向う大溝SD-2の範囲確認のために設定した。

各トレンチの掘り下げは入力によって行い、遺構の発掘と層位の観察を行った。

## 2) 調査の内容

### 1. 基本土層

本調査区における基本土層は、湧水や水路の堆積、近世以降の浚渫のため全調査区を統一した土層で表示せず、包含層と、第1~8トレントの遺物の出土層をI~IV層で示した。

池床を構成する土層は上層より濃茶褐色腐植土層、暗緑灰色腐植土層で、この層を除去すると愛知川の沖積作用によって地盤したと思われる砂礫層が遺構ベース面を形成していた。この暗緑灰色腐植土層は第1・3・7トレントの暗緑灰色微砂混り腐植土層と同類土層である。この層を包含層の2層として扱い、出土する遺物も近世の染付等が多く含まれていた。

第1トレントでは溝SD-1の溝底まで検出した。トレント南端についての遺物包含層の基本土層を示す。上層より黒褐色有機質土上層をI層、黒褐色有機質土下層をII層、黒褐色有機質混り灰褐色細砂層をIII層、暗緑灰色粘土混りの鉄分を帯びた細砂層をIV層とした。I・II層の黒褐色有機質土層はSD-1、SD-2の基本土層として、溝の上層に堆積していた。また、SD-1の黒褐色有機質土上層の上面には敷石IIが人為的に敷設されていた。しかし、敷石Iがどの層と対応するかは池岸を縦に掘り下げていないため判然としない。

第2トレントでは上層より敷石II、黒褐色有機質土層をI層、暗灰褐色有機質混り砂礫層をII層、暗青灰色砂礫層をIII層とした。特にI層からは土師器の杯が一括出土している。

第3トレントの基本層位は池床のヘドロ状の腐植土層、敷石II、黒褐色有機土層をI層、薄い落ち込み状の明青灰色粘土層をII層とした。軒丸瓦はII層の直上でI層の最下部にあたる溝底部分より出土した。

第4トレントは明青灰色粘土混りスクモ層より遺物が出土し、これをI層とした。トレントの北端は池堤部分で道路に向って上方に傾斜している。その部分に敷石が施され、更に堀の石垣に連続している。

第5トレントでは敷石IIが見られ、黒褐色有機質土層に遺物が出土しこれをI層とした。また、下層の円礫及び角礫混りスクモ層には1m前後の自然木2本が埋没していた。また円礫・角礫はそれぞれ15cmと20~30cm大で、人為的に投入されたものと思われる。

第6トレントは暗灰褐色砂礫層をI層とした。このトレントには杭が1本見られたほか、I層の上面には瓦と、敷石II内(併しこの地点の敷石はIとIIが重なり、IIが薄くなる所であるため、厳密には銅鏡は敷石Iに伴うと考えられる)より「和同開珎」の銅鏡が2点重なり合った状態で出土した。

第7トレントでは黒褐色有機質土層より遺物が出土しこれをI層とした。SD-2の覆土は上層より黒褐色有機質土層、スクモ層、灰褐色有機質土層の順である。

8トレントでは遺物の出土はなかったが、SD-2の覆土は第8-1トレントにおいて、黒褐色有機質土層、スクモ層、灰褐色有機質混り砂礫層、暗緑灰色粘土層であった。

## 2. 遺構

検出された遺構には、溝SD-1・SD-2、敷石I・II・IIIがある。また、その検出された遺構と関連し、今日なお機能しているものとして大塚井・大井・伊野部井と呼ばれている取水口・排水口がある。なお、池の北西隅には地元の人々が弁天塚あるいは龍神塚と呼ぶ塚状遺構がある。

### SD-1

SD-1は、ほぼ南北方向にのびる溝である。この溝は南から北にむかって流下しており、溝の規模は、南北150m、東西13.2~16.8mを測り、深さは約1.4mを測る事が出来る。SD-1は池中央部でSD-2と合流したあと、大きな広がりをみせ、それは扇のごとき形状を呈する。

### SD-2

SD-2は、池の中央を東西方向にのびる溝であり、西から東にむかって流下し、SD-1に合流している。規模は東西60m・南北8~15mを測る。機能および機能していた時期はSD-1と同じである。

### 敷石I

敷石Iは、1トレンチの一部において確認されたものである。遺構はSD-1にある程度腐植土層が堆積後敷かれたらしく、II層よりも礫石は大きく、岸壁では敷石I、II層も接して重なっている。その機能は護岸のためであろう。

### 敷石II

敷石IIは、敷石I同様SD-1・SD-2が機能を失った後に施されたもので5~15cmの円礫からなっている。その機能は、溝が埋まった後の腐植土層の池底をおおいかくし清めるために施されたものと考えられる。その造成時期は、敷石上の遺物が江戸前期とみられる陶磁器類であるから、それ以前の時期と考えられよう。

### 敷石III

敷石IIIは、堤の法側面の裾よりやや上方にみられるものである。護岸の機能を持ったものであり、その形成された時期は近代であろう。

### 塚状遺構

塚状遺構は、弁天塚あるいは龍神塚と呼ばれるものであるが、現在それは規格性あるマウンドを示すものではない。未調査区域となったためその実体は詳らかにすることはできなかった。

(古川 登、丸山竜平)

## 3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は土器、陶磁器、土錘、瓦、石器、銅錢などである。遺物は主として池床に堆積した暗緑灰色微砂混り腐植土層と、その下層より検出した溝SD-1・2の覆土より出土した。

以下、土器、陶磁器、瓦、土錐、石器、銅錢の主な遺物について報告する。

(1) 土 器

土器は縄文時代後期から、近世の陶磁器まで幅広く出土した。これを溝SD-1、SD-2および包含層、表採別に遺物の特徴とその観察表を記す。また、器種分類は実測したもので、出土点数の多い土師器、須恵器、黒色土器について行った。なお、陶磁器については表2でとりまとめた。第2、3次調査の図版土器番号に付したアルファベットは以下の記号である。

A：縄文式土器、B：弥生式土器、C：土師器、D：須恵器、E：黒色土器、F：瓦質土器、G：瓦器、T：陶磁器。

土師器

〈壺〉

a類一二重口縁のもの。

b類一短頸のもの。

〈杯〉

a類一高台の付かないもの。

a<sub>1</sub>：外間に3段の横なでを行い、底部との境に指圧痕をもつ。

a<sub>2</sub>：a<sub>1</sub>のもので内面に沈線を持つ。

a<sub>3</sub>：2段の横なでを行い、底部は未調整。

a<sub>4</sub>：5段の横なでを行い、赤橙色である。

b類一高台の付くもの。

〈皿〉

a類一外間に2段の横なでを行う。

b類一「て」字状のもの。

c類一1段横なもの。

c<sub>1</sub>：口縁部が外反する。

c<sub>2</sub>：端部を丸くおさめる。

c<sub>3</sub>：端部をつまみ上げ、横にならせる。

c<sub>4</sub>：端部が面をなす。

d類一口縁部が肥厚し、外反する。

〈塊〉

a類一高台の付かないもので、内・外間にへら磨きを施す。

b類一高台の付くもの。

須恵器

〈杯身〉

a類一受部をもつもの。

- b類一口縁部が外反するもの。
- c類一口縁部が上方に伸びるもの。

#### 黒色土器

- a類一内面だけ炭素を吸着させたもの。

a<sub>1</sub>:へら磨きを施す。

a<sub>2</sub>:暗文を施す。

- b類一内外面に炭素を吸着させたもの。

#### SD-1の出土土器

清SD-01には5本のトレンチを設定し、各トレンチの基本土層を上層より順にI~IV層に区分した。

##### 第1トレンチ(図版73・74)

###### <I 層>

###### 土師器

壺(C4・C5)の2点が出土した。共にやや高めの高台を持ち、赤橙色の良質な胎土を持った官衙系の土器である。(C4)は内面にへら磨きを施してある。近江国衙に同種類の土器が出土<sup>註(1)</sup>している。皿は(C1~3)の3点で、(C1)はC<sub>1</sub>類で強い指おさえで口縁部がやや肥厚している。(C2・C3)はC<sub>2</sub>類で外反する口縁部を持ち、(C3)は口径13.4cmで中皿である。他に壊片、甕片など約80点が出土した。

###### 須恵器

壺身の口縁片(D6)が1点出土した。器壁は薄く、口径は12.0cmである。

他に黒色土器塊、繩文式土器片各2点が出土した。

###### <II 層>

###### 土師器

壺(C7・C8)の2点が出土している。口径は10.9cmと11.0cmで、共に外面に埴土を用いて朱色に仕上げている。内面は細い縦の暗文を旋し、外面は(C7)がやや幅の広いへら磨きを行い、(C8)もへら磨きの痕跡がうかがわれる。共に7世紀中葉と考えられる。皿(C10)はC<sub>1</sub>類で外反する口縁部を持ち、(C9)はC<sub>2</sub>類でなでが3方向で施されている。その他甕の体部片60点と器種不明片60点余りが出土している。

その他の区分では繩文式土器片2点、須恵器片、灰釉陶器片、黒色土器片が各1点出土している。

###### <III 層>

###### 弥生式土器

(B12)の受け口状の口縁部を持った甕が1点のみ出土している。内・外面共に磨滅して手法

の特徴は不明である。

#### 須恵器

环身(D11)が1点出土しているが、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさまり、底部はやや丸底ぎみである。

その他、土師器片13点が出土している。

#### 〈IV 層〉

##### 縄文式土器

6点出土したが(A19~21)の3点が実測できた。深鉢(A20)は波状口縁で、へら状工具又は貝殻による沈線文を3条施す。後期末のものと考える。深鉢(A21)は口縁部外面にややゆがんだ、指圧痕も不明瞭な突帯が付く。浅鉢(A19)は内面をへらで磨き、外面は口縁部が左に体部は右下にへら削りしてある。共に縄文晚期のものである。

##### 弥生式土器

(B14・B15)は共に甕の底部であるが、(B15)はやや上げ度で厚く、(B14)は刷毛目を施し、底部も薄い。後期のものである。他に細片が200点余り出土した。

##### 土師器

二重口縁をもつ古式土器が3点(C16~18)出土したが、(C16・17)は同一個体と思われる。口径は共に26.4cmとやや大型である。古墳時代前期のものと考える。短頸壺(C13)は外面に朱を塗り、口縁部に横、体部に縱のへら磨きを行い、内面には刷毛目を施す。出土例は少ないが、古墳時代前半のものと思われる。他に土師器片は細片が約500点が出土している。

#### 第2トレンチ(図版75)

第2トレンチは土器の出土層が上層より、黒褐色有機質土層、黒褐色有機質土混り砂砾層、暗青灰色細砂層となり、順にI~III層とした。

#### 〈I 層〉

##### 土師器

甕(C22)は口径26.0cmで内側する口縁部を持ち、端部外面に一条の沈線を巡らして上方に引き出している。内・外面共に刷毛目を縱・横・斜に施し、外面頭部は横なでを施している。いわゆる「近江型」の長甕で、8世紀前半のものである。环は(C23~30)が西肩部分より一括出土し、共に外面に3段の横なでを行い、底部との境に指圧痕が目立つ。色調は淡い灰白色が多い。(C29・C30)は内面に横なでに伴う沈線をもつ。(C31)は溝の東肩部分より出土している。いずれも10世紀末から11世紀にかけての平安中期の土器である。土師器片は小皿が3点、一括出土の环片が約140点出土している。

##### 須恵器

高台付きの环身底部(D32)と、壺の底部(D33)の2点が出土している。

## 〈II 層〉

須恵器の壺蓋(D34)が1点と弥生式土器の少片が数点出土しているだけである。壺蓋はほぼ水平の体部をもち、ゆるやかな弧をえがいて端部にいたる。体部の半分にへら削りが見られる。平安時代のものと考える。

## 〈III 層〉

この層からは縄文時代晩期の浅鉢片3点と土師器片が少々出土しているが、実測可能なものは見られない。

### 第3トレンチ(図版75)

第3トレンチは厚い黒褐色有機質土層(I層)と明青灰色粘土層(II層)より遺物が出土した。

## 〈I 層〉

### 土師器

土師皿(C35・C36)の2点が出土し、口径は13.2~13.4cmと中型で、外面の横なでも幅広く、親指でいきになでたものと思われる。C<sub>2</sub>類ではあるが、平安後期のものと思われる。

他に土師器の壺、甕小片と鍛冶炉の炉壁片が出土している。

### 第4トレンチ(図版75)

明青灰色粘土混リスクモ層(I層)から土師皿と壺底部片2点が出土した。

### 土師器

小皿(C37)はc類で外面の横なでが強く、底部との境に段をもち、底部には粘土紐巻き上げ痕が残る。体部にはX印を線刻する。(C38)は「て」字型の小皿で口径8.2cmでb類である。

### 第5トレンチ(図版76)

第5トレンチでは黒褐色有機質土層(I層)より土師器皿(C39~42)、皿小片3点、甕小片2点、須恵器壺片、甕片各1点が出土した。

### 土師器

小皿(C41)はb類の「て」字状で器壁は薄い、(C39・C40)はC<sub>1</sub>類で外反する口縁部を持つ。(C39)は底部に十字の線刻が見られる。(C42)はd類で口縁部が肥厚し、底部は上げ底となる。SD-1ではもっとも新しい土器である。

### SD-2の出土土器

溝SD-2では2本のトレンチを設定したが、遺物が出土したのは7トレンチだけであった。

## 第7トレンチ（図版76）

### 〈I 層〉

I層の黒褐色有機質土層より土師器が2点出土した。

#### 土師器

皿(C44)は大皿a類で口径16.8cmで今回出土した皿では最大径をはかる。2段の横なでを施し、口縁部は大きく外反する。小皿(C43)はb類で「て」字状口縁をもつ。

## 包含層の出土土器(図版76、77)

包含層は池床の全面を覆う暗緑灰色微砂混り腐植土層である。

#### 土師器

壺(C65)は2段の横なでを行い、底部は粘土ひも巻き上げ痕が残る。内面の1/3と外面の口縁部に少々黒斑が付着する。壺の底部と見られる(C63・C64)はやや荒い砂粒を含む。皿は(C45～62)である。a類には(C57)があり、2段の横なでを施し、下段は凹線ぎみになる。C<sub>2</sub>類には(C45～50・C62)があり、(C62)はやや口径は大きいが、他は8.0～8.9cmの小皿である。(C62)は内面に横なでによる沈線が見られ、(C50)は口縁部がやや肥厚する。(C52・C53)はC<sub>3</sub>類である。(C53)は口縁部の内・外面にススが付着していることから灯明皿として使用されていたものと思われる。(C54～56・C59)はC<sub>4</sub>類であり、(C54)は赤橙色で内面は水びきの平滑な面をもつ。他は端面に浅い凹線をなす。(C58・C60・C61)はd類である。共に口縁部が肥厚し、底部との境で屈曲する。

#### 黒色土器

壺の底部(E66～68)は(E68)が内・外面共に炭素を吸着させて外面にはへら磨きが施されている。(E66)の底部には十字の織刻が見られる。(E69～72)は底部を欠損している。(E69)は横なでを行う。(E70)はラセン状の暗文が内面に見られ外面にはヘラによる磨きがみうけられる。(E71・E72)はラセン状の暗文で外面の磨きは見られない。(E72)は内面の沈線もごく浅くなっている。(E69・E70)は10～11世紀、(E71・E72)は12～13世紀のものと考えられる。

#### 瓦器

G(73)の塊片が1点のみ出土した。内面の口縁部には沈線を持ち、横の磨きと斜めのこまか磨きが見られる。

#### 瓦質土器

鉢の小片(F74)は端部上方に面を持ち、内寄する口縁部を持つ。(F75)は羽釜の脚で面取りをしている。

池床の包含層からは他に陶器・磁器などが出土し、その内容については表(2)に示した。

### 表 採(図版77)

表採の土器は3点あるが、(D77・D78)は第一次調査時の採集土器である。

#### 須恵器

壺身(D77)は受部がやや上方に伸び、立ち上がりは内側上方に伸びる。底部にはかき目が見られる。(D78)の壺身は短かく内傾するかえりと、小さな受け部をもつ。底部の3分の1にはへら削りが見られる。共に6世紀初頭のものと考える。

#### 瓦質土器

(F76)は口縁部を欠くが短頭の壺と思われる。底部は厚く丸底ぎみである。壺の内・外面には漆が付着している。

(漢 修)

#### (2) 瓦(図版78~81)

第2~5トレンチ、包含層から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅平瓦などの破片97点が出土した。時代は、白鳳から中世のものまで含まれており、中でも平安時代の平瓦片が大半を占める。今回出土したこれらの瓦片はきわめて小さく、観察項目をかろうじてうめられる程度のものである。ここでは比較的残存状況のよいものをとりあげ、説明を加えることにする。なお、観察表においては、分類項目をもうけ、記号化した。

第2トレンチからは、黒褐色有機質土層(Ⅰ層)より、平安時代の平瓦片(1)が1点のみ出土した。狭端面の一部を残す破片で、凹面側に一回面取りを施している。厚みは比較的薄く、現存厚1.3cmを測る。凹面の布目压痕は、部分的にハケ目ですり消されているが、1cmあたり(7×7)本の布目である。凸面の織目叩きは、縦方向のハケ目によってすり消されているが、一部に残る繩目より、3cmに11条を数えるやや細やなものである。

第3トレンチからは、黒褐色有機質土層(Ⅰ層)より、白鳳~奈良時代の軒丸瓦(2)1点、丸瓦片(3・4)2点、平瓦片(5~8)4点、平安時代の丸瓦片(10~13)4点、平瓦片(14~31)18点、隅平瓦片(32)1点、中世の平瓦片(33)1点、また、明青灰色粘土層(Ⅱ層)より、白鳳~奈良時代の平瓦片(9)1点、計33点の出土をみた。

#### 単弁蓮華文軒丸瓦(2)

外区周縁、内区花弁の一部を欠失した単弁蓮華文軒丸瓦の瓦当面左半部の残存したものである。内区において、中房には半球形を呈した蓮子が中央に1個、その周りに6個一重にめぐるものであるが、そのうち1個欠失している。花弁は、弁中に子葉1個を配した単弁をあらわし、弁數は本来12葉であるが、欠損して現存するのは8葉である。弁端はやや角ばった形をしている。外区外縁は、傾斜縁で内斜面の一部に細い線鋸歯文が認められる。色調は明灰白色、胎土は細かく、焼成は軟かい。なお、額面部には、左から右へ6本の衝目でやや粗雑に波状文をえがいており、他に類例をみない興味深いものである。

表2 軒丸瓦計測表

直径	瓦 当 面				瓦 外 面			
	内 区				外 区			
中房径	施子数	弁 幅	弁 数	外区広	外区幅	外区高	文様	
14.2 (16.8)	4.9	1+5(6)	2.7	8(12)	2.2	1.8	1.3 縫鋸歯文	

単位はcm、( )は復元値

次に、破損面における粘土の重なり合いの観察によって製作技法を復元してみると、以下の順序である。

- ① 瓦当面に外区の粘土を入れる。
- ② 内区のうちの中房に、まず粘土をいれる。
- ③ その上へ重ねるように内区全体に入れる。
- ④ 瓦当全体に粘土を補充する。
- ⑤ 丸瓦を接合するための溝をつける。
- ⑥ 丸瓦をさしこむ。
- ⑦ 瓦当、丸瓦接合部の補強のため、内面接合粘土、外面接合粘土をあてる。

瓦当裏面はヘラで成形したのち、さらに指で整形しており、瓦当裏面上部には明瞭な指頭圧痕がみられる。

### 丸瓦(3)

側面の一部を残す破片である。凹面には、粘土板糸切り痕が斜めに走っており、それを覆うように布目圧痕が広がっている。1cmにつき(11×10)本の細かい布目である。側縁に平行して一例、布筒端部の重ね合せ部分の縫目が認められる。やく0.5cmの縫目である。そのよこV字形にういてみえるのは、糸紐の圧痕であろうか。縫目とは異なるものである。凸面においては、叩き目の痕跡は全く認められず、縦方向のケズりですり削され、さらに縱ナナドで仕上げられている。側縁に平行してヘラ痕を残す。半載以前の分割載線のヘラじるしであったものか。

### 隅平瓦(32)

広端部の左側隅を生乾きの段階で、斜めに切断し、のちに焼成した隅平瓦の破片である。わずかに残る切断面を延長して復元してみると、側縁に対する切断部分の角度は、45度くらいであったと思われる。凸面においては、3cm幅で10条の縫目痕をとどめる。凹面には1cmに(10×8)本の布目圧痕を残し、狭縫縁、側縁に浅い面取りをしている。

第4トレンチからは、明青灰色粘土混リスクモ層(I層)から白鳳~奈良時代の丸瓦片(34)1点、平瓦片(35・38)2点、平安時代の丸瓦片(36)1点、平瓦片(37,39~55)18点、計22点の出土をみた。

第5トレンチからは、黒褐色有機質土層（I層）より、白鳳～奈良時代の軒平瓦片（57）1点、丸瓦片（56）1点、平瓦片（58～64）7点、平安時代の丸瓦片（65）1点、平瓦片（66～86、88～90）、また、明青灰色粘土層（II層）から平安時代の平瓦片（87）1点、計35点の出土をみた。

#### 軒平瓦（57）

重弧文軒平瓦の頸部だけが剥落して残ったものである。頸部中央から端部にかけてやく1／2が現存する。瓦当部の重弧文を描く手法は、砂粒子の移動が認められることから、ヘラで行ったものと推察される。弧の断面形状は、〔形を呈し、三～四重弧であったものと思われる。縁締は消失。段頸形式のもので、頸部幅6.8cm、深さ1.8cm（文様の深さ0.5cm）を測り、幅の割には段が低い浅頸になる。なお、頸面部底面は、横ナデ調整が施され、また数ヶ所に明瞭な指頭圧痕が残る。破損面には、粘土板製作時の糸切り痕をとどめる。これは、平瓦との接合面であり、粘土板を縫ぎたして頸部をつくりあげる製作技法によって生じたものである。

包含層（2層）暗緑灰色微砂混り腐植土層より、白鳳～奈良時代の丸瓦片（60）1点、平瓦片（92、93）2点、平安時代の平瓦片（90）1点、中世の丸瓦片（91）1点、平瓦片（96、97）2点、計7点の出土をみた。

#### まとめ

昭和58・59年度にまたがる吉住池発掘調査においては、総数97点にのぼる瓦片の出土をみた。当初、吉住池に近接する瓦屋寺古窯址群の存在から、まずそれとの関連を想定した。しかし、出土瓦は瓦窯址に最も近い西寄りからは全く出土をみず、また吉住池全域にわたって点在することもなく、トレンチ3～5に集中して出土している。その層序においても下層から上層にかけて大きくは層序順の出土状況を示すものである。このトレンチ3～5は吉住池の北端、角部に位置し、また吉住池から流れる唯一の排水口でもある。

出土瓦には、ひずみのあるもの、焼成不良の生施けのもの、あるいは窯に用いたスサ混りの粘土の付着するものなど、明らかに窯跡からの出土と確定づけるものは現在のところ見受けられない。またこれらの出土瓦の観察により、時代は白鳳から奈良、平安、中世に及ぶものまで含まれている。

以上のことからも、これらの瓦が窯跡に関連するものではなく、この付近に建立された何らかの建物に伴うものと推定できる。出土の瓦量は、一般的な寺院を想定するには、あまりにも出土量が乏しいこと、また、唯一の軒丸瓦は類例に比べてやや小規模であること、隅切瓦の出土をみるとことなどから、推定にはせると、吉住池の排水口である北端角にこの池水の信仰にかかる小堂などが建立されていたのではないだろうか。

なお、この唯一の軒丸瓦は吉住池から流れる用水の水系下流にあたる五箇荘町金堂及び、能登川町法童寺で類例がみうけられることから、いずれもが吉住池を中心とする同一水系に同一

文化圏が発達していたものと考えられないであろうか。

(岡本隆子)

### (3) 土錐 (図版82、83)

本遺跡出土の土錐は、総数41点を数える。SD-1(I層・II層・包含層(2層))からの出土が大多数を占め、数点の表採品が挙げられる。

出土した土錐は、すべて土師質で身の長軸方向に貫通孔があるものである。以下、形態によって分類する。

#### Aタイプ (1・2・14・15・18・19・40)

中央で脹らみのもつ管形で、本遺跡から出土した土錐の中で最も小型で軽量のものである。7点出土した。完形品(3点)からみた法量の平均値は、長さ2.63cm、最大径0.65cm、孔径0.33cm、重量1.60gとなる。孔口は不整形であるのが通常である。貫通孔は焼成後に貫孔するのではなく、むしろ丸棒状のものを芯軸として軸に粘土を均一に巻いて(板状の粘土を巻いたのか)貫通孔を生じだしている。焼成によって生じる黒斑は、19で両端にみられるだけである。また19は、焼成後両端に穿孔を試みているが、貫通までは至っていない。

#### Bタイプ (5・13・28~30・32・34・35・39)

円柱形のものである。9点出土した。大多数の端部に欠損がみられるが完形に近いものである。法量は、長さ5.05~3.8cm、最大径1.9~1.3cm、孔径0.8~0.6cm、重量13.68~7.08gを測る。孔径はAタイプよりやや大きい程度のものである。孔口は横ナデあるいはへら状工具のナデにより面をなしている。貫通孔はAタイプと同様、芯軸に粘土を巻いて貫通孔を生じだしている。黒斑は、表面の磨滅が著しいものが多くわかりにくいが、片端の一ヶ所に黒斑がつくもの(5)もある。

#### Cタイプ

紡錘形を呈する。以下、法量の差により3タイプに分類できる。

##### C<sub>1</sub>タイプ (3・4・12・16・20・31・41)

小型で紡錘形を呈する。7点出土した。完形品(3点)からみた法量の平均値は、長さ3.13cm、最大径1.38cm、孔径0.5cm、重量5.80gとなる。孔口は面をなしている。孔径、重量ともにAタイプとBタイプの中間的な様相を示している。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じ、また、両端を指オサエすることにより突出させるものもみられる。黒斑はつくものとつかないものがあり、つき方は一様でない。

##### C<sub>2</sub>タイプ (6・11・17・21・26・27・33・36・37)

中型で紡錘形を呈する。9点出土した。完形品(3点)からみた法量の平均値は、長さ5.33cm、最大径1.93cm、孔径0.83cm、重量17.22gとなる。孔口は横ナデにより面をなしているのが通常である。孔径は、Bタイプに近いが重量はBタイプよりもやや重い傾向にある。貫通孔は、芯軸に粘土を紡錘形に積み出して生じ、また両端あるいは片端を指オサエる。31・37の

ように端部に粘土の合せ目が長軸に平行して見られることから板状の粘土を巻き合せて製作されたものと考えられる。黒斑は、つくものとつかないものがあり、つき方が一様でない。

#### C<sub>3</sub> タイプ (39)

大型で紡錘形を呈し、本遺跡出土の土錐の中で最も大型で重量のあるものである。両端の一部に欠損がみられる。法量は、長さ 8.1cm、最大径 3.3cm、孔径 1.1cm、重量 57.36 g を測る。径孔は、出土した土錐の中で最も大きく、特に重量は他のと比較すると抜きんでている。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じ、また、両端を強く指でオサエすることにより突出させる。黒斑は、片端の一ヶ所に認められる。

#### D タイプ (7・8・22・24)

俵形を呈する。4点出土した。完形品(2点)からみた法量の平均値は、長さ 3.75cm、最大径 2.1cm、孔径 0.95cm、重量 13.57 g となる。孔口は、面をなしへラ状工具でナデているのが通常で、また、両端から最大径付近に向ってヘラ状工具でナデしているもの(8)もみられる。孔径は、他と比べて大きいが、24の様に小さいものもみうけられた。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じる。黒斑は、残存の少ない1点を除き、外面に1ヶ所認められる。

#### E タイプ (9・10・23・25)

樽形を呈する。4点出土した。完形品(3点)からみた法量の平均値は、長さ 3.87cm、最大径 2.8cm、孔径 1.27cm、重量 31.42 g となる。孔口は、へら状工具でナデ、巾の広い面をなしでいる。また、長軸に直交する方向で横ナデが施され、両端付近は強く施されている。端部には、粘土の合せ目が認められ、これが両端に対応して認められることから、芯軸に細長い板状の粘土を巻き合させた成形法で製作されたものである。

(喜多貞裕)

#### (4) 石 器 (図版84)

1は包含層より出土した磨製石器の破片である。現存長 10cm、現存幅 8.5cm、最大厚 0.55cm を測る。石材は黒色の頁岩を使用しており、両面とも横方向の細かな研磨により仕上げられている。背部にも荒い研磨が施されている。大型の石庖丁の破片であろうか。重量 55.4 g。

2は第1トレントの暗緑灰色粘土混り鉄分帶細砂層(IV層)より出土した石器の破片で、現存長 5.6cm、現存幅 3.3cm、最大厚 2.6cm を測る。平面形は梢円形を呈するものであろう。片面にごく浅い凹部がある。石材は白色のアブライトである。重量は 68.7 g を量る。

3は包含層より出土している。刃部を欠損した石斧で、断面は梢円形を呈する。基部の先端には敲打痕が認められる。現存長 9.9cm、最大幅 4.8cm、最大厚 3.3cm を測る。石材は珍岩である。重量 234.6 g。

4は表面採集した砥石で、長さ 20.3cm を測り、断面は方形を呈する。二面を砥面としている。使用痕は顕著であり、とくに A 面下方窪み中央縦方向 2ヶ所に整様金属工具の側面のあたりが明瞭に認められる。また、B 面右下方には砥面以前の自然面が残る。石材は、きめの荒い

花崗岩質のアブライトであり、荒砥石として使用したものであろう。重量は 1,325.0 g あり、置き据えて使ったと考えられる。

(渡辺泰子、岡本隆子)

#### (5) 銅 錢 (図版77)

1は第6トレンチ石敷内より出土した「和同開珎」であり、たて径2.38cm、よこ径2.40cm、厚み0.14cm、重さ2.00 g を測る。2は第2層(包含層)より出土した寛永通宝であり、たて径2.44cm、よこ径2.45cm、厚み0.13cm、重さ3.12 g を測る。また、3は第2層(包含層)より出土した文久永宝であり、たて径2.64cm、よこ径2.64cm、厚み 0.9cm、重さ2.74 g を測る。和銅開珎は、この吉住池の築造年代の下限を暗示しており、また、2、3の銅錢についても敷石IIの下限を示すものである。なお、銅錢1に伴出しもう1点の破損した「和同開珎」の出土を見る。

(丸山竜平)

#### 4. 小 結

昭和54年度に発掘調査された上日吉遺跡(のち日吉遺跡に改称)は吉住池に南接して、縄文時代晩期の窓構墓・弥生時代末から古墳時代の竪穴式住居跡・方形周溝墓、7世紀前半から8世紀前半の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡群が検出されている。

また、吉住池の第一次調査では池の南半分について行ったが、7世紀後半には機能を停止した水路や、江戸時代まで確実に溝のある湧水土塹が検出されている。

今回の調査で検出されて溝SD-1は吉住池の機能を解明する糸口を提供してくれた。

SD-1の出土遺物は溝の底より縄文時代後期の深鉢や弥生時代終末~古墳時代前期の土器が出土し、埋土の上層では中世末の土師皿が出土している。出土量のもっとも多い遺物は平安時代のものと江戸時代のものである。

これらから、SD-1について4回の画期を考えたい。第1回は1トレンチ第IV層出土遺物に見られる、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期である。日吉遺跡の第2~4トレンチでは弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡や方形周溝墓が微高地に存在している。この地方は古代より愛知川の扇状地で水稻耕作に適した地とされてきたが、吉住池周辺には愛知川の伏流水が筭作山にさえぎられ湧水となっていた。吉住池を中心とする低湿地帯は弥生時代の農耕民にとって貴重な生産活動の場であったと思われる。微高地に生活する人々は、低湿地を利用して水稻耕作を営んでいたであろう。

第二の画期は土師碗(C7・C8)に代表される7世紀中葉の時期である。この時期、吉住池に南接する日吉遺跡の第1トレンチでは、西の沼沢地に近接して7世紀前半の竪穴式住居跡が検出されており、また吉住池南半分の調査でも、7世紀前半の遺物を多く含む水路を検出している。<sup>(註2)</sup>吉住池周辺には白鳳期までさかのほる古地割が認められる。周辺地域の経済的発展は用水確保に伴う地割を発達せしめたと思われる。そのためにも溝の機能は重要な政治的・経済的役割を持っていた。

(註3)

第3の画期は平安時代中期で、今回図示した土器の3割がこの時代であり、平安時代後期の遺物も加えると6割を数える。

平安時代になると日吉社が莊園領主として吉住池周辺の建部莊を支配した。<sup>(註4)</sup> 建部莊の初見は文治2年(1186)であるが、それ以前から中世的開発を受けていた。建部莊は神崎郡の新堂・三股・山本・野・奥・木流・平坂・中・南・北・上日吉・瓦屋寺・浜野・堺・八日市場などに該当すると思われる(『近江輿地志略』)。新堂～平坂の各集落はいずれも吉住池の湧水の下流域であり、流域農民にとっては貴重な水源であったろう。集中的に多量の用水を必要とする水稻耕作にあたって、恒常に供給される吉住池の湧水は農民にとって信仰の対象ともなったであろう。時として、水不足による飢饉や、村落共同体間での水争いも発生したであろう。

2トレンチのI層で池中央寄りの溝肩部分で一括出土した土師器の杯は、祭祀や官衙的性格の強い遺跡での出土が多いものである。池の湧水は周辺農民や下流農民にとって貴重な水源であったことから、一括遺物は池の靈・水の靈に対する民衆の祭祀的性格を強く示すといえる。

第4の画期はこの溝の機能が長年の濁土の堆積で停止し、溝の全面に敷石が施された。中世末から近世初頭にかけてである。

現在も吉住池には伊野部井、大井、大塚井などの桶門があり、下流の集落に用水を供給しつづけてきた。今回の調査で、吉住池は水稻耕作の伝わった弥生時代よりこの方、水源地としてその機能を保ちつづけてきたものとみてよかろう。

(濱 修)

註1. 近藤滋作『ほ地整備関係遺跡発掘調査報告書』第1-2、「上日吉遺跡」は「日吉遺跡として変更されたため、以下それに例う。

註2. 丸山竜平『八日市市史』第1巻第2章第2節

註3. 丸山竜平『八日市市史』第1巻第5章第4節

註4. 岡田精司『八日市市史』第1巻第3章第2節

表3 土器観察表

SD-1

器種	器形	土器 器 No.	法 規 寸 寸	ト レ ン チ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	C <sub>3</sub>	1	口径 9.8		I	体部は内壁して立ち上がり口縁部は肥厚しながら外反する。端部はつまみあげたあと、横なでを施す。	内、外面の口縁部を横なでする。口縁部及び底部に指おさえを施す。	灰褐色	良好	良好	
	C <sub>1</sub>	2	口径 9.1		I	体部は内壁して立ち上がり口縁部はやや外反し、端部はやや上に面をもつ。丸底である。	内面と外面口縁部は、横なでを行い、外面底部は指でおさえる。	暗灰褐色	良好	良好	
	C <sub>1</sub>	3	口径 13.4		I	体部は内壁して立ち上がり口縁部は外反し、端部内側に面をなす。外面口縁部に沈線をもつ。	内面及び、外面体部に横なでを施す。	灰褐色	良好	良好	
器坏	b	4	口径 16.8		I	体部は内壁し端部はやや面をもっておさまる。外面底部の境には段をもつ。底部には断面方形の外方へ聞く高い貼り付け高台をもつ。	内面体部は2条の磨きがある。外面は横なでを行い底部は、なで調整を施す。	赤橙色	良好	やや軟	
		5	底径 8.6		I	体部は内壁して立ち上がり底部には断面・方形の外方の聞く高めの貼り付け台をもつ。	内面は、横なでの後、右上リの斜めのなでを施す。外面及び高台内外面には横なでを施す。	赤橙色	良好	やや軟	
須恵器	环身	c	口径 12.0		I	口縁部は、内壁して立ち上がり、端部は丸くおさまる。	内・外面共に横なでを施す。	灰青色	2mm前後の砂粒を含む。	堅緻	
土師器	壞	7	口径 10.9		I	体部は内壁して立ち上がり口縁部で外反する。端部は外方へつまみあげられている。	内面はヘラ磨きを施し、平滑であり、外面も太いヘラ磨きを行う。	灰褐色	良好	良好	
		8	口径 11.0		II	内部は内壁して立ち上がり口縁部ではさらに内壁する。端部は上方につま	内面はヘラ磨きを施し、外面口縁部は横なでを行う。	褐灰色	良好	良好	

器種	器形	土器 No.	法縁 何	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿	C <sub>2</sub> 9	口径 8.6	1	II	みあげる。底部は丸底と思われる。					
						体部は内側して口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさまる。底部は丸底と思われる。	外面口縁部は、なでが左上方に。又内面は右上方に施し更に横方向になっている。底部との境は内外面より指おさえを行い底部は未調整である。	灰褐色	1~前 後の砂 粒を含 む	良好	
須恵器	環 身	C <sub>1</sub> 10	口径 9.2	1	II	体部は内側して立ち上がる。口縁部で外反し、端部内側に面をなす。	内外面口縁部に横なでを施し、底部に指おさえする。		良好	良好	
						体部はほぼ直立に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面底部には、段をもち底部は丸底である。	内、外面はロクロなでをし、外面底部はヘラ削り。	暗灰青 色	1~2 mmの砂 粒を含 む	堅緻	
弥生式土器	腰	12	口径 16.8	1	III	受け口状の口縁部をもち、端部は外方にのび、丸くおさまる。	全体に磨滅している。	灰褐色 灰黒色	砂粒	やや軟	
土師器	壺	b 13	口径 14.8	1	IV	体部は丸く内側し、やや「く」の字状に屈曲した口縁部は又内側する。端部は内面につまみ出す。外面に丹を施す。	外面、口縁部は磨きの後横なでを行う。体部は縦の磨きを施す。内面口縁部は横なでを行ない、体部は横なで後刷毛目調整を行う。	(内) 灰白色 (外) 褐褐色	精良	良好	
弥生式土器	腰	14	底径 5.0	1	IV	体部は内側して立ち上がり底部は厚くあげ底となっている。	全体に磨滅している。	(内) 茶褐色 (外) 赤褐色	砂粒	良好	
						体部は外側して立ち上がる。底部は扁平である。内面は、剥離している。	外面体部に縦、横にこまかい刷毛目を施す。	赤褐色 黒褐色	砂粒	もろい	
土師器	壺	a 16	口径 26.4	1	IV	外反して伸び、口縁端部で更にやや外反する。端部は丸くおさまる。	内、外面とも横なでを施す。	灰褐色	砂粒	良好	

器種	器形	土器 No.	法量 トレンチ No.	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	粘土	焼成	備考
土器	壺	17		I N	屈曲部分に突帯状の縁を持ち、体部は強く外反する。	外面は横なでを施す。	灰褐色	砂粒	良好	19と同一個体
師器	壺	18	口径 26.4	I N	外反して立ち上がったあと、屈曲してやや直立したあと再び外反する。口縁部で端部は丸くおさまる。屈曲部外面に突帯状の縁をもつ。	内、外面共に横なでを行い、体部に指おさえを行う。	灰褐色 スヌ付着	砂粒	良好	
縄文式	浅鉢	19		I N	体部から口縁部にかけ内脣して立ち上り端部は丸くおさまる。	外面は左方向と右方向へのけずりがある。体部下は横なでを行う内面は壓きを施し、端部は、丸くなる。	(内) 黒褐色 (外) 暗黄褐色	砂粒		スヌ付着
土器	深鉢	20		I N	波状口縁をもち、外面には3条の沈線文を施す。端部は、丸い。	貝殻又はヘラ状工具によるナデを施す。	褐色	砂粒	良好	スヌ付着
土器	深鉢	21		I N	口縁部に突帯をめぐらし、胡目を入れる。口縁端部は外擣する。	内面口縁部は、横なでを行い体部には貝がら条痕文をもつ。端部は、なでを施し、突帯は横から指おさえをし体部はヘラ削りを施す。	(内) 暗黄褐色 (外) 灰褐色	砂粒	良好	スヌ付着
上	壺	22	口径 26.0	II I	頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は内脣しながら立ち上がり端部外面に一条の沈線をめぐらす。	外面体部に右下りの刷毛目と指おさえを行う。内面体部は擬横の刷毛目口縁部には横に刷毛目を施す。	暗黄褐色	2~3 mmの砂粒を含む	良好	
師器	壺	23	口径 13.4 器高 3.8	II	口縁部はやや内脣しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は3段のなでを認める。底部は扁平である。	内面及び平面の口縁部は、横なでを行なう。内外面共に底部との境に指圧痕を施す。底部は未調査である。	褐灰色	良好	良好	
		24	口径 13.6 器高 3.4	II	端部は丸くおさまる。口縁部はやや内脣し、3段の横	内面、外面ともに横なでを行なう。内外面の底部の境には	淡茶灰色	良好	良好	

器種	器形	土器No.	法量 mm	トレンチ 寸	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	壺					なでを施す。	指圧痕をもつ。				
		25	口径 13.4 器高 3.7	2	I	口縁部は内側して立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。体部は3段の横なでを施す。	内外面共に横なでを行なう底部は未調整である。内外面の底部の境には指圧痕をもつ。	褐灰色	良好	良好	
		26	口径 13.4	2	I	口縁部はやや内側し、端部は丸くおさまる。	内部の口縁端部下にはやや擦いなでが見られる。内外面共に横なでを施す。	褐灰色	良好	良好	
		27	口径 12.6 器高 3.7	2	I	口縁部はやや外反して端部は面をもつ。体部には3段の横なでを施す。	内外面共に横なでを施すが内面はやや深い底部との境に内外面共指おさえを行う。底部は未調整である。	褐灰色	良好	良好	
		28	口径 12.8 器高 3.7	2	I	口縁部は内側して立ち上がり端部は丸くおさまる。外面体部には3段のなであとがある。底部は扁平である。	内面、外面共に横なでを行なう外面底部との境には、強い指おさえをもつ。	褐灰色	良好	良好	
	壺身	29	口径 13.8 器高 3.8	2	I	口縁部はやや外側し端部は丸くおさまる。体部には3段の横なでを施す。底部は平らで中央でややあげ底となる。	内・外面共に荒い横なでを行なう、内面の口縁部に一条の沈線がみられる。外面底部の境は強い指圧痕があり底部は未調整である。	褐灰色	良好	良好	
		30	口径 13.2 器高 3.6	2	I	口縁部は、やや内側して立ち上がり端部は丸くおさまる。体部には3段のなでがある。底部はややくぼみをもつ。	内面の口縁部は2条の沈線をもち、内・外面共に横なでを施す。内・外面底部境には指圧痕があり底部は未調整である。	褐灰色 赤褐色	良好	良好	
		31	口径 14.0 器高 4.0	2	I	体部は内側して立ち上がり口縁部はやや外反し端部は上方に面をなす。体部外面には5段の横なでを施す。底部は平底である。	内外面共に横なでを施し底部は未調整である。全体に磨滅している。	赤橙色 黄褐色	1~2 mmの砂 粒を含む	やや軟	
		32	底径 8.6	2	I	底部には外方へ開く断面方形の高台	内面底部はロクロなでを行なう外面は	灰褐色	2~3 mmの砂	良好	

器種	器形	土器No.	法量回	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
須恵器						がつき、高台の内側で拔地する。	ヘラ削りを行う。	粒を含む。			
須恵器	盞	33	底径 8.6	2	I	底部は平底で体部は、内脣しながら立ち上がる。内面に段を持つ。	内面はロクロなでを施す。	灰青色	2~3 mmの砂粒を含む	堅緻	
須恵器	盞	34	口径 22.0	2	II	体部はほぼ水平にのびて口縁部にいたり、口縁部はゆるい弧状を呈し先端にいたる。端部内面には凹部をつくる。	外部は体部にヘラ削りを行い端部では横なでを施す。内面は横なでを行い、中央に仕上げなでをする。	暗灰青色	2~5 mmの砂粒を含む	堅緻	
上師器	C <sub>2</sub>	35	口径 13.2	3	I	体部は内脣して立ち上がる。内面口縁部に段をもち、外面底部との境に段をもつ。端部は丸くおさまる。	内面は荒い横なでを行い、外面口縁部まで横なでを施す。底部は指おさえを行なう。	暗青灰色	精良	良好	
師器	C <sub>1</sub>	36	口径 13.4	3	I	口縁部は内脣して立ち上がり、端部は丸くおさまる。	内面は荒い横なでを行い外面は口縁部に横なでを行い底部は、指でおさえる。	黄灰色	良好	良好	
土師器	C <sub>1</sub>	37	口径 10.8 2.8	4	I	体部は、内脣して口縁部でやや外反する。端部は上に曲をなす。底部は丸底である。	外面口縁部は横なでで体部との境に段をもつ。底部は未調整で内面は横なしでし、外面体部に「X」を刻む。	暗黄灰色	良好	良好	
土師器	b	38	口径 8.2	4	I	口縁部は外脣し、端部は内に屈曲し丸くおさまる。	底部未調整、内面外面、口縁は横なでを行なう。	灰褐色	やや疵い	良好	
土師器	C <sub>1</sub>	39	口径 9.6 器高 2.3	5	I	体部は内脣して立ち上がり、口縁部はやや外反する。端部は、上に面をなす。底部は、丸くなる。	外面内縁部と内面体部に横なでを施す。外面体部に指おさえ、底部は未調整。	暗青灰好	良好	良好	
土師器		40	口径 10.5	5	I	口縁部は外脣ぎみに立ち上がり端部は上に面をもつ。外面端部との境に段をもつ。	内面及び外面口縁部には、横なでを施す。	暗灰褐色	良好	良好	

器種	器形	土器No.	法量 ㎤	トレンチ 層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土 師 器	b	41	口徑 11.0	5 I	口縁部は屈曲して外脣し端部はさら に内に屈曲して丸くおさまる。	外面口縁部と内面 は軽い横なでを行なう。外面底部は未調整である。	灰褐色	良好	良好	
	d	42	口徑 10.2	5 I	口縁部はやや外脣 して肥厚する。端部は丸くおさまる。	内・外間に横なで を行なう。	茶灰色	良好	良好	全体に磨滅し ている。

SD-2

器種	器形	土器No.	法量 ㎤	トレンチ 層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土 師 器	b	43	口徑 9.4	7 I	口縁部は屈曲して外脣し端部はさら に屈曲して立ち上がる。先端部は外 に面をもつ。	外面底部は指おさ え、口縁部は横な でを行なう。	灰褐色 (茶褐色)	良好	良好	
	a	44	口徑 16.8	7 I	体部は内脣しながら立ちあがり口縁 部でやや外反して端部は面をなす。 2段の横なでを行 なう。	内面は端部で右上 りになでた後、 中央は横になで、最 後で右にあがる。外 面は横になでる。外 部に指おさえ。	褐灰色	良好	良好	

包含層

器種	器形	土器No.	法量 ㎤	トレンチ 層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土 師 器	C	45	口徑 8.9	2	口縁部は内脣し端 部は丸くおさまる。 底部は平底でやや あげ底となる。	内面と外面口縁部 は横なでを行なう。 外面底部は指おさ えされる。	灰白色	良好	やや軟	
		46	口徑 8.6	2	口縁部は内脣して 立ち上がり、端部は 丸くおさまる。	内面及び外面口縁 部は横なでを行なう。 底部は指おさえを行 なう。	灰褐色	良好	良好	
	C <sub>2</sub>	47	口徑 8.4	2	口縁部は内脣して 立ち上がり端部は 丸くおさまる。底 部は丸底である。	内面及び外面口縁 部は横なでを行なう。 外面底部は指おさ えをする。	灰白色	良好	良好	
		48	口徑 8.0	2	口縁部は内脣して 立ち上がり端部は 丸くおさまる。丸 底である。	内面と外面口縁部 は横なでを行なう。 外面底部は指おさえ を行なう。内面に仕 上げなでを行なう。	灰白色	良好	やや軟	

器種	器形	土器 No.	法量 ㎤	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土	49	口径 8.4	2			体部は内側し口縁部はさらにやや内側する。端部は丸くおさまる。底部はあげ底となる。	内面及び外面口縁部は横なでを施す。底部は未調整である。	灰褐色	良好	良好	
	50	口径 8.8	2			体部は内側して口縁部でやや肥厚する。端部は丸くおさまる。	内面に横なでを施す。外面は未調整。底部に指おさえする。	濃灰褐色	良好	やや軟	
	51	口径 9.0	2			口縁部は内側して立ち上がり、端部はつまみ上げた後、外面は横なでを施す。	内面及び外面口縁部は横なでを施す。	灰褐色	良好	やや軟	
陶皿	C <sub>3</sub>	52	口径 8.4	2		体部は内側し口縁部で、さらにやや内側する。端部はつまみあげる。丸底である。	内面と外面口縁部は横なでで、底部は指おさえである。	灰白色	精良	良好	
	53	口径 7.6	2			体部は直線的に外方に伸び口縁部で肥厚する端部はつまみあげた後、横なでを施す。	体部に指圧痕をもつ。	濃灰褐色	良好	良好	口縁部にスス付着
	54	口径 7.8	2			口縁部は内側し端部はつまみあげる。底部は扁平でややあげ底となると思われる。	内面は水びきの平滑なでで調整する。	赤橙色	精良	良好	
器	C <sub>4</sub>	55	口径 7.8	2		口縁部は、内側して立ち上がり端部は外側に面をなす。	内・外とも横なでを行なう。	茶黄色	2mmの石英を含む。	良好	
	56	口径 8.0	2			口縁部は屈曲ぎみに内側し、端部外側に面をなし凹線が入る。	内面及び外面口縁部を横なでし、口縁部を指おさえする。	灰褐色	良好	良好	
	57	口径 8.5	2			体部は内側して立ち上がり、口縁部で、やや外反し、又内側する。端部は丸くおさまる。丸底である。	内面・外面口縁部は横なでし口縁部下に2つの段をもつ。底部は指おさえをする。	灰白色	良好	良好	
	d	58		2		体部は、内側し段	内面口縁部を横な	灰褐色	2mm前	良好	

器種	器形	土器No.	法量 mm	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土	C <sub>4</sub>	58	口径 11.4		2	をもって外方に屈曲し、口縁部は内脣して端部は丸くおさまる。	です。口縁部及び底部に指おさえを施す。		後砂粒を含む。		
		59	口径 11.0		2	体部から口縁部は内脣し端部は外側に面をもじ浅い凹線が入る。内側はやや丸みをもつ。	外面口縁部は横なでを施し、内面には横なでの後、底部に向け右下り、左下りのなでを施す。底部は内・外面共に指おさえを行なう。	灰褐色	良好	良好	
		60	口径 11.8		2	体部で段をもつ。外方に屈曲した後、内脣して口縁部につづく。端部は、外面に面をもつ。底部はあげ底となる。	内面口縁部及び外面体部は横なでを施し、口縁部に強い指おさえを施す。内面底部に、刷毛目状のものが見られる。	灰褐色	良好	良好	
	C <sub>2</sub>	61	口径 15.0		2	体部は内脣し、段を持った後、更に内脣し、端部はほぼ垂直に立ち上がる。端部外側に浅い凹線をもつ。	内面及び口縁部に横なでを施す。底部及び口縁部の内外面を指でおさえている。	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	
		62	口径 13.2		2	口縁部は、内脣して端部は丸くおさまる。内面口縁部に一条の沈線をもつ。	内面と外面口縁部は横なでを施す。	灰褐色	良好	良好	
器塊	b	63	底径 4.8		2	底部にはやや外方に開く断面三角の低い高台をもつ。外面底部よりやや上がった所で段をもって、体部へとつづく。	内面、外面共になでを施す。	灰黄褐色	2mm前後の石英を含む。	良好	
		64	底径 4.8		2	体部は内脣して立ち上がる。底部にはやや外方に開く低い断面三角形の高台をつく。	内面及び外面の高台に横なでを施す。	淡褐色	5mm大の小石を含む。	やや軟	
环	s <sub>2</sub>	65	口径 12.8		2	体部はやや外反きぎみに立ち上がり口縁部もやや外反	内面、外面共に横なでを施すが、外面は、やや荒い。	(内) 赤褐色 灰褐色	3mm前後の砂粒を含む	良好	

器種	器形	土器No.	法量 (mm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
灰 器	a <sub>3</sub>	65	口径 12.8 器高 3.4	2		する。通部は丸くおさまる。体部には2段のなでをもつ。底部は平底である。	底部は未調整である。	(外) 灰褐色	む。		
	a <sub>3</sub>	66	底径 5.0	2		底部には、外方に開く断面方向の高台がつく。底部には、ヘラ描きの線刻がある。	外面の高台部分をヘラ削りする。高台部分は横なでをする。	(内) 黒色 (外) 灰褐色	良好	良好	
	b	67	底径 5.1	2		底部には断面方形で、外方へ開く貼り付け高台をもつ。高台は、外側で着地する。	内面はヘラで磨く。外面と高台外側をヘラで磨き、高台内側は、横なでを施す。	(内) 黒色 (外) 灰色	良好	良好	
黑 色 塚	a <sub>3</sub>	68	底径 4.8	2		底部には、断面方形で、外方へ開く貼り付け高台をもつ。	内・外面に、炭素を吸着さす。外面の貼り付け部はヘラで磨き、底部は横なでを行う。	黒色 (断) 褐灰色	良好	良好	高台は磨滅化している。
	b	69	口径 11.2	2		口縁部はやや外反し端部下に一条の沈線をもつ端部は丸くおさまる。	外面は横なでをし内面は黒色の炭素がはく離しているがヘラ磨きのあとがうかがわれる。	(内) 黒色 (外) 黑色 灰褐色	1~3 mmの砂粒を含む	良好	
土 器	a <sub>1</sub>	70	口径 12.0	2		体部はほぼまっすぐにのび、口縁部でやや外反する。端部下には、1条の深い沈線をもうすぐ下にも浅い沈線をもつ。	内面に格子目状のヘラ磨き、外面口縁部に斜め方向のヘラ磨きを施す。	(内) 黒色 (外) 灰褐色	3~前 後の砂 粒を含 む	良好	
		72	口径 16.0	2		体部は、内側して口縁部でやや外反する。	内面にヘラ磨きを行い、外面に横なでで指おさえを行う。	黒色 灰褐色	良好	良好	
瓦 器	塙	73	口径 11.6	2		口縁部は、やや外反して立ち上がり端部は、丸くおさまる。口縁部内面には、一条の沈線をもつ。	内面は、ヘラで磨き、外面は指圧痕をもつ。	黒色 (断) 灰色	良好	良好	
		74	口径 14.2	2		体部は内側して、口縁部は内反する	内外面共に、横なでを施す。	(内) 灰茶褐色	良好	堅緻	

器種	器形	土器No.	法量 ㎤	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
瓦質土器	体	74				端部は、上方に面をもつ。		(外) 黒色	良好	堅緻	
瓦質土器	脚	75			2	6つの面をなし、やや内寄する。面の境を更に面取りする。		(外) 黒色 (断) 灰褐色	良好	良好	

表採

器種	器形	土器No.	法量 ㎤	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
須恵器	b	76	口徑 10.2 器高 3.2			体部は内寄して、ほぼ直立に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。端部は三角形に真直ぐ立ちあがる。	内・外面は、横なで調整を行い、底部外面はヘラ削りを施す。	青灰色	1mmの砂粒を含む。	良好	
須恵器	a	77	口徑 11.9			底部は肥厚で、体部は内寄する。受部は、やや外上方にのび端部はやや尖りぎみである。立ち上がりは内上方にのび端部は直立ぎみに立つ。	内面・及び外面は横なでを行う。底部はヘラ削りの後、カキ目を施す。	青灰色	2mm大の砂粒を少々含む	良好	
瓦質土器	壺	78				体部は弓状に内寄して、口縁部は外寄して立ち上がる。	クロによる形成である。	灰黑色	1~2mmの砂粒を含む	良好	内外面に塗が付着する。

(演修)

表4 陶磁器観察表

器種	No.	七層	法量 (cm)			備考	器種	Na	土層	法量 (cm)			備考			
			口径	器高	高台高					口径	器高	高台高				
1	2層	-	-	4.2 0.7	染付。呂須はくすんだ 淡い藍色で、一部灰茶 褐色を呈する。 外面には二重の網目文、 高台には二条の繩線、 見込に菊花文を描く。 高台内に窯印を記す。 灰白色の素地に、淡い 灰青色の上絵を施す。 見込と高台下端に物切 れがみられる。 高台下端はやや内側氣 味。高台疊付と内側には 砂粒が付着。 器壁は肉厚。 古伊万里か?					5	2層	-	-	3.6 0.8	染付。淡い藍色の呂須 で外面には梅花文、高 台には二条の繩線を描 く。見込にも文様を描 く。 胎上は白色で気泡を含 んだ半透明の跡を施す。 外面には入賞あり。 高台は、外方へやや開 き氣味。下端に面取りを する。 腰部が張り出す形状で、 器壁は腰部で最も厚く、 立ち上がるにつれて薄 くなる。 伊万里系	
碗	2	2層	-	-	3.9 0.4	染付。淡い藍色の呂須 により、外面には二重 網目文、高台には二条の 繩線、内面には一重 網目文、見込には菊花 文を描く。外面の文様 には濃淡の差をつけて いる。 灰褐色の素地に淡い灰青 色の上絵を施す。 高台、内面に砂粒が付 着、高台は低く器壁は 薄い。 伊万里系	碗				6	2層	-	-	-	染付。藍色の呂須で外 面に梅花文、高台には 二条の繩線を描く。 胎土は白色で青みを帯 びた釉を施す。わずか に入賞がみられる。 腰部が張り出す形状。 伊万里系
(一) 器	3	2層	-	-	4.0 0.8	染付。藍色の呂須で外 面には河骨文。高台に は一条の繩線。 見込には文様を描く。 又口縁部内面にも文様 がみられる。 胎上は白色で、淡い青 緑色の気泡を含んだ釉 を施す。 高台下端はやや内側氣 味。腰部が張り出す形 状で、腰部の器壁は底 部よりも厚い。 伊万里系	器				7	2層	-	-	4.0 0.75	染付。淡い藍色の呂須 で、高台に二条の繩線、 外面にも文様を描く。 胎土は白色で、白濁釉 を施す。高台下端に物 切れがみられる。 高台下端に面取り、高 台の内側に砂粒が付着、 器壁は厚い。 伊万里系
(二) 器	4	2層	-	-	3.8 0.65	染付。くすんだ淡い藍 色の呂須で、外面には河骨 文、高台には一条の繩 線、口縁部内面には横 円形の連続文様を描く。 見込中央に「力」と記す	器				8	2層	-	-	3.8 1.1	染付。くすんだ淡い藍 色の呂須で、高台に二 条の繩線、体形にも文 様を描く。高台内には 窯印を記す。 胎上は白色で、青みを

器種	No.	土層	法量回			備考	器種	法量回			備考	
			口径	器高	高台高			口径	器高	高台高		
						脛びた白済和を施す。 高台下端に輪切れがみられる。 器壁は厚い。 伊万里系					脛、体部外面に文様を描く。胎土は白色で、青みを帯びた釉を施す。 高台は外方に開き気味で、下端に面取りをしている。腰部は張り出す。	
碗	9	2層	10.5	-	4.0 0.85	染付。薄い黄色の具須で、外面には自然物を抽象化した文様を、口縁部内部には三条の圓線内に留文を、高台には一条の圓線を描く。見込には、「二化年制」の年款を記すが、「制」は「製」を省略し、だと考へられる。  胎土は灰白色で、淡い灰青色の気泡を含んだ釉を施す。  腰部は張り出し、口縁は外へ反る形状のもので、器壁は、腰部から立ち上がるにつれて薄くなっている。  伊万里系	13	2層	-	-	3.8 0.8	染付。鮮やかな藍色の具須で、外面には筆先を押しつけたような文様を。高台には一条の圓線を描く。見込には、一重の円の中に略式化した松竹梅を描く。  胎土は白色で、乳白済色の気泡を含んだ釉を施す。  高台からの立ち上がりは、ゆるやかで、高台下端に面取りをする。
(一組)	10	2層	-	-	4.1 0.75	染付。藍色の具須で、外面にはよろけ線、高台には一条の圓線、口縁部内部には連続文様を描く。  胎土は灰白色で、淡い灰青色の気泡を施す。  腰部は張り出し、口縁は外方へ反る形状のもので、器壁は、腰部から立ち上がるにつれて薄くなっている。  伊万里系	14	表採	-	-	3.8 0.4	染付。藍色の具須で、外面には丸文を描き、高台には一条の圓線を見込にも文様を描く。  胎土は白色で、気泡の混った淡い青緑色の釉を施す。  高台は低く、腰部は張り出し直線的に立ち上がる。器壁は薄い。 伊万里系
(一組)	11	2層	-	-	3.9 0.45	染付。薄い黄色の具須で、高台には二条の圓線、外面には自然物を描く。見込にも文様を描く。  胎土は白色で、光沢のある青みがかった釉を施す。  高台は低く、下端に面取りがあり、腰部は器壁が最も厚くなっている。  伊万里系	15	2層	-	-	3.8 0.65	染付。くすんだ藍色の具須で外面には自然物と思われるものを、高台には二条の圓線を描く。高台内には窓印を記す。  胎土は灰白色で、薄い青緑色の釉を施す。外縁の一部と高台下端に輪切れがみられる。  高台はやや内傾し、体部は高台からゆるやかに立ち上がる。高台内には「トキン」を留める。  器壁は厚い。 初期伊万里か?
	12	2層	-	-	3.4 0.8	染付。紺色の具須で、高台内外面に一条の圓	16	2層	-	-	0.8	染付。くすんだ藍色の具須で、外面に文様、高台に一条の圓線を描く。見込にも文様あり。

器種	No.	土層	法量			備考	器種	No.	法量			備考
			口径	器高	高径 口高				口径	器高	高径 口高	
壺	17	2層	—	—	—	胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。	壺	22	2層	11.0	—	を施す。 口縁はわずかに外反する。器壁は薄い。 伊万里系
						染付。褐色の呉須で、外面上に菊花文、高台に一条の墨線を描く。見込、口縁部内面にも文様を描く。						
			0.85	—	—	胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。高台は外方に開き気味で、下端に面取りをしている。体部は高台から丸味をもちながら上方へ立ち上がる。 伊万里系						
						染付。薄い褐色の呉須で、外面上に菊花文、口縁部内面には墨線の中に直線と組み合わせた文様を描く。						
						胎土は灰白色で、青みを帯び気泡を含んだ釉を施す。口縁端はわずかに内傾する。 伊万里系						
	18	2層	10.8	—	—	染付。薄い褐色の呉須で、外面上に菊花文、口縁部内面には墨線の中に直線と組み合わせた文様を描く。	壺	23	2層	—	—	染付。薄い褐色の呉須で、外面上に不規則な文様を描く。胎土は灰白色で気泡を含んだ釉を施す。
						胎土は灰白色で、青みを帯び気泡を含んだ釉を施す。口縁端は外反する。 伊万里系						
	19	2層	—	—	—	染付。薄い褐色の呉須で、外面上には竹などの自然物、口縁部内面には、墨線で区画した中に、直線を組み合せた連続文様を描く。	壺	24	表様	—	—	染付。薄い褐色の呉須で、外面上に幾可文を組み合せた文様を描く。胎土は灰白色で、透明釉を施す。 腹部で張り出し、直線的に立ち上がる形状。
						胎土は灰白色で、気泡を含んだ半透明釉を施す。腹部で張り出し、体部は直線的に立ち上がり口縁部が外反する。						
			10.6	—	—	染付。くすんだ藍色の呉須で外面上には自然物、口縁部内面には、二条の墨線を描く。		25	2層	8.8	—	染付。くすんだ藍色の呉須で、外面上と肉太に墨線を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。 器壁は薄く、口縁端は外反する。
						胎土は灰白色で、乳濁釉を施す。 器壁は薄く、口縁端はわずかに外反している。 伊万里系						
						染付。変色の呉須で、外面上には錦、口縁部内面には連続した渦巻状の文様を描く。						
（縦）	20	2層	10.6	—	—	胎土は灰白色で、乳濁釉を施す。 器壁は薄く、口縁端は外反している。 伊万里系	壺	26	2層	11.8	—	染付。褐色の呉須で外面上には草花文を、口縁部内面には墨線で区画した中に、直線と組み合せた連続文様を描く。 胎土は白色で、半透明の白濁釉を施す。 器壁は薄く、口縁端は外反する。 伊万里系
						染付。くすんだ藍色の呉須で外面上には墨線で区画した中に、直線と組み合せた連続文様を描く。						
（縦）	21	2層	10.6	—	—	胎土は白色で、淡い青緑色の気泡を含んだ釉を施す。	壺	27	表様	—	染付。くすんだ藍色の呉須で外面上には墨線の差をつけて梅枝を描く。 胎土は灰白色で、灰色を帯びた半透明釉を施す。	
						胎土は白色で、青色を帯びた半透明釉を施す。						

器種	No.	土層	法量回			備考	器種	No.	法量回			備考	
			口径	器高	高径 台高				口径	器高	高径 台高		
壺	28	2層	—	—	—	染付。くすんだ藍色の呉須で、外面には「歳年」の文字がかれ、口縁部内面には幾線の区画の中に輪円形の連続文様を描く。 胎土は灰白色で、青みをおびた上釉を施す。 器壁は滑く、口縁は外反する。 伊万里系	壺蓋 (磁器)	33	表様	10.3	—	—	3.8 高台に二条の圓線。体部外面に文様を描く。 胎土は灰白色で、青緑色を帯び、気泡を含んだ釉を施す。
			—	—	—	染付。蓝色の呉須で、外面に草花文を、口縁部内面には圓線の区画の中に當文を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系						染付。蓝色の呉須で、外面に草花文を、口縁部内面には圓線の区画の中に當文を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系	
			—	—	—	染付。淡い褐色の呉須で、見込に文様を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ半透明釉を施す。 器壁は薄い。 高台からの立ち上がりはゆるやかで、高台下端には面取りをする。 伊万里系						染付。淡い褐色の呉須で、見込に文様を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ半透明釉を施す。 器壁は薄い。 高台からの立ち上がりはゆるやかで、高台下端には面取りをする。 伊万里系	
	29	表様	—	—	—	染付。明るい褐色の呉須で口縁部内面、外面に文様を描く。 胎土は灰白色で青みを帯びた釉を施す。 口縁端は外反する。 一部に焼ききれり。	34	表様	—	—	—	0.45	染付。鮮やかな濃い藍色の呉須で、外面に文様を描く。又口縁部に淡い茶色の鉄釉を施す。 胎土は灰白色で、灰色を帯びた釉を全面に施す。 口縁が外反する小ぶりの湯呑茶碗。高台は外方へ開き氣味である。 愛知県かみた窯産
	30	2層	11.4	—	—	染付。藍色の呉須で、外面には自然物を、口縁部内面には圓線で区画した中に直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。 伊万里系	35	表様	9.0	4.0	3.6 0.5	染付。鮮やかな濃い藍色の呉須で、外面に文様を描く。又口縁部に淡い茶色の鉄釉を施す。 胎土は灰白色で、灰色を帯びた釉を全面に施す。 口縁が外反する小ぶりの湯呑茶碗。高台は外方へ開き氣味である。 愛知県かみた窯産	
	31	2層	10.7	5.65	3.7 0.6	染付。鮮やかな褐色の呉須で、外面には肉方に梅花文を描き、高台には二条の圓線、口縁部内面には連続の文様を描く。見込にも文様を描く。 胎土は白色で、青みをおびた釉を施す。 腰部で張り出し、胴部は直線的に立ち上がる形状。器壁は高台付近が最も厚く、立ち上がるにつれて薄くなっている。 高台下端は面取りしている。 伊万里系	36	2層	8.7	3.7	3.0 0.45	染付。褐色の呉須で、豪華文を内外面に、高台には二条の圓線を、見込には渦巻文を描く。 胎土は灰白色で、青みがかった釉を施す。 高台は低く厚みがあり、疊付には砂粒が付着している。 腰部は張り出し、口縁端がわざかに外反する形状。 瀬戸系	
	32	表様	—	—	0.6	染付。藍色の呉須で、	37	2層	—	—	3.1 0.35	染付。藍色の呉須で、外面には菊花文を、見込には五弁花文を描く。 胎土は灰色で、灰色をおび気泡を含んだ半透	

器種	No.	土層	法量			備考	器種	No.	法量			備考	
			口径	器高	高台高				口径	器高	高台高		
湯呑						明の輪を施す。 高台は低く、内傾しており、高台内はやや突出気味である。形状は、腰部で斜め上方に直線的に張り出し、体部は、やや反り気味に立ち上がる。突立型の湯呑茶碗。		43	2層	—	—	—	色を帯び氣泡を含んだ釉を施す。 伊万里系
茶葉													染付。口縁が反る角皿の破片。藍色の呉須で、外側には丸を使った文様、内面には円弧を描く。 角の部分には内外面とも区割りの継線二本を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯び氣泡を含んだ釉を施す。 伊万里系。
碗	38	表様	—	—	—	染付。くすんだ藍色の呉須で外面には菊花文、口縁部内面には、直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は灰白色で、乳白陶釉を施す。 体部はやや反り気味に立ち上がる。	血	44	表様	—	—	—	染付。鉄分を含み、茶色がかかった藍色の呉須で、高台に二条の團扇見込には五弁花文を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯び氣泡を含んだ釉を施す。 伊万里系。
(器)													
皿	39	2層	—	—	—	染付。藍色の呉須で、内面には丸を使った文様、外側には細い線の文様を描く。 内外両ともに区画の縦線がみられる。角皿か、胎土は白色で、淡い青緑色の気泡を含んだ胎を施す。 伊万里系	磁	45	2層	—	—	—	染付。藍色の呉須で、濃綠の技法を用いて山水文を描く。建物を屋根のみで表現するなど簡略化している。 胎土は白色で青みを帯びた物を施す。 古伊万里？
(器)	40	2層	—	—	—	染付。外面には濃い藍色の呉須で菊を描き、口縁部内面には直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は白色で、青みを帯びた白陶釉を施す。 立ち上がるにつれて器壁は薄くなり、口縁は内側にする。 伊万里系	器	46	2層	—	—	14.0 0.7	染付。淡い藍色の呉須で、垣根状のものと、曲線を内面に。高台には二条の團扇を描く。 胎土は白色で、青緑色を帯び氣泡を含んだ胎を高台疊付で施した全面に施す。 伊万里系
(器)	41	2層	—	—	—	染付。鉄分を含み、くすんだ藍色の呉須で、内外両面に草花文を描く。 胎土は灰白色で青みを帯び、気泡を含んだ半透明釉を施す。 伊万里系		47	2層	42.6	—	—	染付。褐色の呉須で、内外両面に文様を描く。 胎土は白色、青みを帯び氣泡を含んだ胎を施す。 伊万里系
	42	2層	—	—	—	染付。薄い藍色の呉須で内外両面に文様を描く。 胎土は灰白色で、青緑		48	2層	—	—	11.4	染付。藍色の呉須で、

器種	No.	土層	法量回			備考	器種	No.	法量回			備考	
			口径	器高	高台高				口径	器高	高台高		
皿 (縦器)	49	2層	-	-	3.5	外面には唐草文、高台には二条の團扇内面には草花文を描く。 胎土は白色で、青みがかった白濁色を高台内を除いた全面に施す。 高台内の中央は凹む。 伊万里系	鉢 (縦器)	52	2層	17.0	-	-	胎土は灰白色で、気泡を含んだ透明釉を施す。 全体的に灰色。 口縁端は肥厚し、丸味をおびる。 外間にヘラ削り跡が残る。 ヘラ削りの後、曲線を7mm程の間隔を開けて刻む。
					11.5 0.3	染付。口縁部内面には明るい藍色の呉須で草花文を描き、見込には、鐵分を含み茶色をおびた藍色の呉須で草花文を描く。外面は淡い藍色の呉須で伸びやかに唐草文を描く。 高台との境目には、一条の太い團扇を描く。 胎土は白色で、青色をおび氣泡を含んだ釉を高台墨付を除いた全面に施す。 全面に細かな貰入がある。伊万里系	不明 (磁器)	53	2層	-	-	5.2 0.8	胎土は灰白色で、淡い灰色の気泡を含んだ釉を施す。 淡い藍色の呉須で團扇を描く。 上部を欠いた、蓋の蓋か?
					-	54	2層	10.2	5.75	4.6 1.0	胎土は灰白色で、茶褐色の鐵釉を高台と高台脇を省く全面に施した天目茶碗。高台は削り出しで、下端は外方へ開き気味である。又高台内にはトキンを留める。 高台より上は、内側しながら立ち上がり、口縁は外反する。口縁端は丸味をおび、口縁部直下はくびれ。美濃系。		
鉢 (輪器)	50	2層	-	-	6.2 0.75	陶器 胎土は赤褐色で、乳白濁色の気泡を含んだ釉を、高台内とその周囲を除いた部分に施す。 全面に細かな貰入がある。釉を施した部分のみ、内面には模、外面上には弧を連続した文様を藍色の呉須で描く。 高台内には墨書きが残る。 内面には二ヶ所目十痕を留める。 赤褐色の胎土は砂粒を含み、さめが荒い。 成形はヘラ削りによりなされており、外面には削り痕がそのまま残っている。	塊	55	2層	14.2	-	-	胎土は灰褐色で、黒色に茶色の斑文の混じた鐵釉を施した天目茶碗の口縁部。 口縁部直下はくびれ。口縁は外へ反る。脚部は斜め上方へ立ち上がり、口縁下でふくらむ。美濃系。
					-	56	2層	13.0	-	-	胎土は灰茶褐色で、暗茶褐色に茶色の斑文の混じた鐵釉を施した天目茶碗の口縁部。 口縁部直下はくびれ、口縁は外へ反る。脚部は斜め上方へ立ち上がり、口縁下でふくらむ。美濃系。		
鉢 (縦器)	51	2層	22.8	-	-	染付。落ち着いた板色の呉須で、外面には唐草文を、口縁部内面には波浪文を描く。 胎土は灰白色で、青緑色を帯び氣泡を含んだ釉を施す。 腰部で削り出し、口縁が大きく外反する鉢。 伊万里系	器	57	2層	-	-	4.5 1.0	天目茶碗の高台部分。 胎土は灰白色で、大粒の砂をわずかに含む。 暗茶褐色に茶色の斑文

器種	No.	土層	法量		備考	器種	No.	土層	法量		備考
			口径	器高					口径	器高	
碗					の混る鉄粒を内面に施す。 高台下端は内傾し、高台内にはトキンを留める。 美濃系	63	表様	-	-	-	胎土は灰色で、外外面に薄い灰緑色の灰釉を施す。 外面上には、つまみの跡が残っており、つまみを中心として、茶褐色の鉄釉で同心円を描いている。
陶	58	2層	11.2	-	火目茶碗の口縁部片、胎土は灰色、外外面に暗茶褐色の釉を施す。内面は乳白色に変化している。 口縁は肥厚して丸味をもび口縁直下はくびれている。肩部は曲線を描しながら立ち上がる。 美濃系	64	2層	-	-	-	片口の注水口 胎土は薄い茶色で、外外面に薄い茶褐色の灰釉を施す。 極めて細かな貫入がある。 注水口は貼り付けで、蓋受けが上に付く。
器	59	2層	-	-	3.0 0.4 見込に淡い藍色の具張で一条の縦線を描く。 胎土は灰色で、灰緑色の気泡を含んだ釉を施す。 内面、高台量付に砂粒が付着。 高台は削り出しだあるが、難な作りとなっている。	65	2層	9.6	1.6 底部 直徑 3.3 灯	平底の底部より胴部は直線的に斜め上へ立ち上がり内面には突帯をめぐらす。突帯はやや内輪氣味。 胎土は灰褐色で、くすんだ淡緑色の釉を内面と外側の口縁部附近に施す。貫入あり。 底面に糸切り痕。	
皿	60	2層	-	-	3.8 0.3 茶褐色の鉄釉で見込に草花文を描き、灰緑色の灰釉を高台とその周囲を除いた全面に施す。 細かな貫入がみられる。内面には砂粒が付着している。 胎土は灰色。 高台は削り出で、下端に面取りをする。 胎土は灰白色で、高台を除いた全面に淡緑色の灰釉を施す。細かな貫入がみられる。 高台は削り出で、中にトキンを残す。	66	2層	-	- 底部 直徑 2.8 明	平底の底部より、胴部は斜め上へ立ち上がり、内面には突帯をめぐらす。突帯はやや内輪氣味。 胎土は灰白色で、くすんだ淡緑色の釉を内面に施す。部分的に貫入が入る。 底面に糸切り痕。	
器	61	2層	-	-	3.4 0.4 胎土は黄褐色で、薄い黄緑色の灰釉を外面と内面口縁部附近に施す。細かな貫入がみられる。 口縁は肥厚して立ち上がる。口縁下には段を有し、段より下にはヘラ状の工具を押しつけた棒状の文様を施す。	67	2層	-	- 底部 直徑 -	底部の底部より、胴部は斜め上へゆるやかに立ち上がり、内面には突帯をめぐらす。 胎土は灰褐色で、灰褐色の釉を内面にのみ施す。 細かな貫入が入る。 底面に糸切り痕。	
甕	62	2層	14.5	-	- 胎土は黄褐色で、薄い黄緑色の灰釉を外面と内面口縁部附近に施す。細かな貫入がみられる。 口縁は肥厚して立ち上がる。口縁下には段を有し、段より下にはヘラ状の工具を押しつけた棒状の文様を施す。	68	2層	6.0	1.1 底部 直徑 2.2 明	上げ底の底部より、胴部は斜め上へゆるやかに立ち上がる。内面には突帯をめぐらす。 胎土は淡黄色で、くすんだ淡黄緑色の釉を内	

器種	No.	法量 (kg)			備考	器種	No.	法量 (kg)			備考		
		土層	口径	器高				土層	口径	器高			
(陶器)	69	2層	11.0	2.15	底部 直径 3.9	若干上げ底の底部より、 胴部は斜め上へ反り気味に立ち上がる。内面には突帯をめぐらす。 胎土は淡黄灰で、淡黄緑色の釉を内面のみ施す。 貢入あり。 底部に糸切り痕。	指	74	2層	—	—	2.0 2.0	胎土は淡黄褐色で、長石、石英粒を含む。 高合はほぼ垂直で、胴部は斜め上へふくらみをもちら立ち上がる。 指目は7本単位で施されている。 信楽焼
	70	2層	8.0	1.5	底部 直径 —	素焼きの小風の破片、 胎土は灰色で砂粒が混じる。底部は内側で、 体部はゆるやかに立ち上がる。 口縁は内外面とも煤が付着。又、所々に焼きぶくれがみられる。		75	2層	—	—	底部 直径 24.6	平底の底部片で、底部の直上にくびれ、ふくらみをもちら立ち上がる。 胎土は白黄色で、大粒の長石、石英粒を多量に含む。 内外面ともに砂粒が浮き出した石はその状態。 指目は8本単位で隙間なく施している。 信楽焼
(陶器)	71	2層	7.1	1.8	底部 直径 3.2	若干上げ底の底部より、 胴部は斜め上へ内側気味に立ち上がる。 胎土は茶褐色で、内面には淡赤褐色の釉を施す。 細かな貢入がある。 外縁の口縁部には胎の玉巻れ、見込には土被が残る。	(陶器)	76	2層	—	—	—	壺の頸部片、胎土は灰色で、 外面には、くすんだ緑色の釉を施す。内面は丁寧な模様で調査を施す。 常滑焼
	72	2層	39.0	—	—	胎土は白黄色で長石、 石英の粒を多く含み、 きめが粗い。口縁部は大きく外反し、胴部は肥厚して丸味をとび、 胴部に皿頭部をもつて内側の破片。内面には突帯がある。口縁端部に指頭痕が残る。 指目は6本単位で施されている。 信楽焼		77	2層	—	—	—	唐子の頸部片、 胎土は灰色で、薄い緑色の灰釉を施す。細かな貢入がある。 前後別々に押型したものを貼り合せている。
鉢	73	2層	33.5	—	—	胎土は部分的に赤みを おびる淡黄褐色で、長石、石英粒を含む。 口縁部は大きく外反し、 口縁下には二ヶ所の弱い彎曲がみられる。 指目は7本単位で施されている。 信楽焼	(陶器)	78	2層	—	—	底部 直径 8.2	胎土は灰白色であるが、 底部は赤味を帯びる。 底部を除く全面に淡緑色の灰釉を施す。 貢入がはいる。 底部は平底で、底部脇は斜めに削り出され、 胴部は垂直に立ち上がる。 底内面には土被が残る。
	不 明	(陶器)	—	—	—	—	—	—	—	4.8 0.6	胎土は淡黄褐色で、 粗く黄褐色の釉を高台を除いて施す。 高台はほぼ垂直で、 胴部は斜め上に張り出し、 体部は垂直に立ち上がる。		

器種	No.	七層	法母(回)			備考	器種	No.	法母(回)			備考	
			口径	器高	高台高				上層	口径	器高		
不明 (陶器)						る。 又、高台は削り出しで、 高台内にはトキンが残 る。 腰部直上に、一ヶ所往 き口が残っており、往 き口と相対する側には、 把手のようなものが付 いていたと思われる跡 がある。	不 明 (陶器)	80	2層	21.5	-	-	胎土は灰白色できめが 細い。口縁上面は平粗 で、端部は下方へ下が る。 くすんだ淡緑色の灰釉 を施す。貢入あり。

(渡辺 泰子)

(註) 表中の第2層は暗緑灰色微砂混り腐植土層の包含層をさすものである。

表5 瓦観察表

No.	種類	トレンド	土層	残存塊(㎝)	(厚)	色調	粘土	焼成	格子目(3mm)	焼成	四面		備考	
											(幅)	(高)	布目(1mm)	(7×7)
*1	平	2	1	10.7	15.2	1.3	1	②-1	(2)	2 b (11)	2	(7×7)		
*2	軒丸	3	1	劉		項	2	①-1	(4)					
*3	丸	3	1	16.9	11.4	2.1	6	③-3	(2)					
*4	丸	3	1	6.3	6.0	1.8	5	①-2	(3)					
5	平	3	1	10.3	12.8	2.4	7	④-1	(4)					
*6	平	3	1	8.1	6.0	2.2	5	①-3	(5)					
7	平	3	1	6.8	5.2	2.0	3	③-3	(5)					
8	平	3	1	8.2	5.5	2.9	4	②-1	(4)					
9	平	3	11	5.7	5.2	2.0	6	②-3	(3)					
10	丸	3	1	5.0	3.6	1.3	1	①-1	(5)					
11	丸	3	1	4.6	4.0	1.8	5	③-1	(4)					
12	丸	3	1	4.2	5.5	1.2	5	①-1	(4)					
13	丸	3	1	4.7	6.3	1.1	5	①-1	(5)					
*14	平	3	9	船石油	18.5	15.4	1.8	7	②-1	(4)				
*15	平	3	1	15.6	15.5	1.8	1	③-1	(4)					
16	平	3	1	6.1	4.0	1.7	10	③-2	(2)					
17	平	3	1	6.6	5.7	1.6	5	③-1	(2)					
18	平	3	1	6.3	5.8	1.5	10	③-1	(2)					
19	平	3	1	4.5	6.2	1.7	4	③-1	(4)					
20	平	3	1	5.0	6.5	1.8	5	③-1	(5)					
21	平	3	1	4.2	4.8	1.8	5	③-2	(5)					
22	平	3	1	6.3	7.0	1.6	5	③-2	(4)					
23	平	3	1	11.5	6.5	1.6	3	②-1	(4)					
24	平	3	1	4.5	8.0	1.9	5	③-2	(5)					
25	平	3	1	7.5	10.0	1.9	5	③-1	(4)					
26	平	3	1	14.0	12.0	2.0	4	④-1	(4)					
27	平	3	1	7.7	5.2	1.7	5	③-1	(5)					
28	平	3	1	8.0	6.5	1.7	3	③-1	(3)					
29	平	3	1	7.5	5.0	1.5	7	③-2	(4)					
30	平	3	1	6.5	4.7	-	5	③-1	(4)					
31	平	3	1	5.0	5.0	1.4	1	③-1	(6)					
*32	隅	平	3	16.0	12.0	1.7	10	③-1	(2)					
33	平	3	1	5.2	4.0	1.5	3	③-3	(2)					

No.	種類	トレンド	土層	現存範囲(cm)		色調	地盤	焼土	成形子目(3ea)	凸面		凹面	備考
				(底)	(側)					(3)	(3)		
34	丸	4	1	9.0	5.1	1.7	6	①-2	(3)	1a(4.5×4.5)	3	2	
25	平	4	1	6.7	6.8	1.9	7	②-2	(4)	2d	(8×9)		
丸	4	1	7.1	6.5	1.6	5	②-2	(4)	2b(9)	1(7×6)			
※37	平	4	1	10.6	11.8	1.9	7	③-1	(4)	3			
38	平	4	1	7.7	6.2	1.9	7	①-1	(4)	1a(4×3.5)			
*39	平	4	1	6.2	7.0	1.7	5	②-2	(3)	2c	(10×9)		
40	平	4	1	16.7	8.4	1.9	9	①-2	(3)	2b(10)	2		
41	平	4	1	7.3	5.2	1.7	6	②-1	(4)	2c	(9×9)		
42	平	4	1	6.5	3.5	—	5	①-1	(4)	2b	(9×7)		
43	平	4	1	8.7	10.8	2.0	7	①-1	(4)	2c(10)	(9×6)		
44	平	4	1	6.6	5.0	1.9	5	⑤-1	(3)	2d	(8×5)		
※45	平	4	1	17.6	16.3	2.3	8	①-3	(2)	2a(6)	(7×8)		
*46	平	4	1	12.3	7.2	1.7	1	③-1	(3)	2b(11)	(8×10)		
47	平	4	1	9.5	9.1	1.8	5	①-1	(4)	2a(8)	(8×8)		
*48	平	4	1	16.6	13.0	2.4	2	①-2	(4)	2a(11)	(9×11)		
49	平	4	1	4.7	2.7	—	5	①-2	(4)	2d	(7×8)		
50	平	4	1	4.8	3.9	1.2	6	①-1	(4)	2b	(10×8)		
51	平	4	1	6.3	4.2	—	7	②-1	(4)	2d	(8×9)		
52	平	4	1	4.5	4.5	—	5	①-2	(4)	2d	3		
53	平	4	1	6.7	4.0	—	5	①-3	(4)	2d	3		
54	平	4	1	8.8	7.4	2.0	5	①-3	(4)	2d	3		
55	丸	4	1	12.6	16.2	1.6	7	①-1	(4)	2b(10)	(9×8)		
*56	丸	5	1	9.0	6.0	1.4	7	①-2	(4)	3			
57	平	5	1	16.4	6.8	1.8	8	①-2	(2)	3			
*58	平	5	1	5.8	5.4	1.7	1	③-1	(3)	3			
*59	平	5	1	11.8	12.4	2.6	8	①-2	(3)	1(10×8)	(9×9)		
60	平	5	1	7.5	7.8	1.6	5	③-1	(2)	1(10×8)	(9×9)		
61	平	5	1	5.8	7.8	2.5	7	①-2	(4)	3			
62	平	5	1	7.5	9.8	2.3	7	①-2	(3)	1(10×8)	(9×9)		
63	平	5	1	12.0	11.4	2.2	3	①-1	(4)	2a(11)	3		
*64	平	5	1	10.0	7.6	2.5	3	①-3	(4)	1(8×9)	(8×9)		
65	丸	5	1	10.4	5.1	1.8	4	③-1	(3)	2c(8)	(8×9)		
*66	平	5	1	11.5	15.3	1.9	7	②-2	(4)	2a(11)	(7×7)		

No.	種類	トレンド	土層	強度機(cm)		色	調査	土焼成	格子目(3mm)	四面		備考
				(範)	(厚)					凸面	凹面	
67	平	5	1	8.4	4.5	2.2	5	①-2	(4)	2 b	1(9×8)	
*68	平	5	1	14.4	9.6	1.6	6	③-3	(3)	2 b	1(8×9)	
69	平	5	1	2.7	2.6	-	6	①-2	(3)	2 b	1(8×8)	
*70	平	5	1	13.9	23.2	2.1	10	②-2	(2)	2 b	1(11×7)	砂礫表面の堅いものである。
71	平	5	1	14.0	12.8	2.1	7	②-2	(5)	2 c	1(12)	前面の一部分に海苔痕がある。
72	平	5	1	3.9	4.4	1.7	7	①-1	(3)	2 b	3	おり、…枚作り。
*73	平	5	1	14.4	10.5	1.9	3	③-2	(4)	2 b	1(8×9)	
74	平	5	1	13.7	9.6	2.0	7	②-1	(4)	2 c	1(8×7)	
75	平	5	1	4.1	2.2	-	2	①-2	(4)	2 d	3	
76	平	5	1	8.6	4.9	1.9	7	③-2	(4)	2 c	1(6×6)	
77	平	5	1	9.9	4.3	1.7	8	②-2	(4)	2 b	1(10×10)	
78	平	5	1	12.9	9.5	2.1	2	①-2	(3)	2 b	1(7×11)	
*79	平	5	1	10.5	7.1	1.8	10	③-1	(1)	2 b	1(10×9)	
80	平	5	1	11.1	6.7	2.0	6	①-2	(4)	2 c	1(11×8)	
81	平	5	1	9.4	11.2	1.4	6	①-2	(4)	2 b	1(10)	2(7×9)
82	平	5	1	6.6	3.9	1.8	5	①-3	(4)	2 d	1(9×9)	
*83	平	5	1	20.8	18.0	1.4	8	②-3	(2)	2 b	1(10×11)	
84	平	5	1	6.1	6.0	1.5	7	①-2	(3)	2 a	1(8×8)	
85	平	5	1	5.9	4.2	-	7	①-2	(3)	2 c	1(8×9)	
86	平	5	1	10.2	9.1	1.7	2	①-2	(3)	2 c	1(7×9)	
*87	平	5	II	17.2	13.2	1.8	8	②-1	(1)	2 b	1(9×9)	
88	平	5	1	4.9	5.5	2.0	3	③-1	(4)	2 c	1(8)	
89	平	5	1	7.5	7.5	1.7	5	①-2	(4)	2 a	1(9×10)	
90	平	5	1	6.5	7.5	1.3	7	①-1	(4)	2 b	2(8×10)	
91	九	2(8×8)	6.2	4.8	1.5	2	③-2	(4)	3	3		
92	平	2(8×8)	7.0	2.4	6	①-1	(3)	3	3	3		前面に海苔痕をわざかにこのこす。
*93	平	2(8×8)	12.9	15.5	2.9	-	(3)	3	3	2		
94	平	2(8×8)	10.5	10.0	2.2	5	①-2	(2)	2 d	3		
*95	九	2(8×8)	6.3	9.0	2.5	3	①-2	(2)	2 b	2(14×13)		
*96	平	2(8×8)	21.0	20.5	1.7	5	-	(2)	2			
97	平	2(8×8)	6.2	6.2	1.9	7	③-3	(2)	-	-		

(岡本篤子)

〈凡例〉

色調

種類

焼成

調整

1 灰色	① 細砂を含む	(1) 黒、黒	a面 1 a
2 灰白色	② 相砂を含む	(2) 黑 3 黄黑色	b 修子目焼きのあとナデ
3 灰黄色	③ 粗砂 (2.0~5.0mm) を含む。	(3) やや焼 4 灰白色	2 a 焼目焼き
5 黄灰色	(4) 粗目焼き	b 燃目焼きのあとナデ	c 燃目焼きのあとケズリ
6 黄灰白色	(5) 烧	d 燃目焼き不明瞭	
7 灰灰色	1 ごくわずか	3 叩きの脈跡みられず、	
8 青灰白色	2 少量	2 ケズリ・ナデ	
9 青灰白色	3 多量	3	
10 青灰黑色			

軒  
軒平-----軒丸瓦  
丸-----軒平瓦  
丸-----丸瓦  
平-----平瓦  
平-----隅平瓦

- (1) 黒、黒  
 (2) 黑  
 (3) やや焼  
 (4) 粗目焼き  
 (5) 烧
- 1  
 2 a  
 b  
 c  
 d
- 3

修子目焼きのあとナデ  
焼目焼きのあとナデ  
燃目焼きのあとケズリ  
燃目焼き不明瞭

3  
 2  
 1  
 a  
 b  
 c  
 d

表6 土性観察表

No.	注 記	( )	は	残 存	出 土 地 点	一 種 類	色	調 査	施 工	土	焼 成	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	考 査
17	長 cm	最大 幅 cm	孔径 cm	底 厚 cm	底 質	清 潔	黑 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	C <sub>1</sub> 開場の一部が欠損。開場部は底をなす板が見えない。	C <sub>1</sub> 開場の一部が欠損。開場部は底をなす板が見えない。	
18	(2.6)	(1.1)	(0.95)	(1.59)	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	A、孔部を鋸切したものの、1/3程度、管部の長さが著しく調整不明。	A、孔部を鋸切したものの、1/3程度、管部の長さが著しく調整不明。	
19	(3.4)	1.1	0.4	2.50	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	A、開場が火照り、小穴が膨らみ開場部が子ほね管部を有する管部、1/3程度開場部は円柱に近く。	A、開場が火照り、小穴が膨らみ開場部が子ほね管部を有する管部、1/3程度開場部は円柱に近く。	
20	3.0	1.25	0.4	4.22	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	C <sub>1</sub> 烧結の一部が欠損。開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	C <sub>1</sub> 烧結の一部が欠損。開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	
21	5.9	2.1	0.8	19.70	SD-1	I	赤 褐 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	C <sub>2</sub> 開場の一部が欠損。開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	C <sub>2</sub> 開場の一部が欠損。開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	
22	(2.8)	(2.6)	(0.56)	5.88	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	D、孔部の1/3程度開場部は直角である。	D、孔部の1/3程度開場部は直角である。	
23	4.5	3.0	1.4	33.56	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	E、尖形開場部がやや直角である。開場部は直角である。	E、尖形開場部がやや直角である。開場部は直角である。	
24	(2.4)	(2.6)	0.45	14.53	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	F、孔部が鋸切されたもの、開場部は直角である。	F、孔部が鋸切されたもの、開場部は直角である。	
25	(3.65)	(2.4)	(1.8)	(9.84)	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	G、孔部が鋸切されたもの、開場部は直角である。	G、孔部が鋸切されたもの、開場部は直角である。	
26	5.2	1.9	0.7	17.96	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	H、開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	H、開場部が尖らどみの輪廓形で開場部は直角である。	
27	4.3	1.9	0.7	12.49	SD-1	I	淡 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	I、開場部の一部が直角、開場部がやや直角である。	I、開場部の一部が直角、開場部がやや直角である。	
28	(4.3)	1.3	0.7	(11.92)	SD-1	I	灰 褐 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	J、開場部が直角である。	J、開場部が直角である。	
29	4.9	1.4	0.65	7.08	SD-1	I	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	K、開場部が直角である。	K、開場部が直角である。	
30	5.05	1.4	0.6	8.61	SD-1	I	淡 黄 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	L、開場部が直角である。	L、開場部が直角である。	
31	(3.1)	(1.7)	(0.7)	(3.14)	SD-1	III	黄 褐 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	M、開場部が直角である。	M、開場部が直角である。	
32	4.1	1.6	0.7	11.72	SD-1	III	黄 灰 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	N、開場部の一部が直角である。	N、開場部の一部が直角である。	
33	4.3	1.95	0.6	10.65	SD-1	III	黄 褐 色	燒 結	燒 結	燒 結	燒 結	O、開場部が直角である。	O、開場部が直角である。	

No.	法 長 cm	量 ( ) は 残 存 出 水 施 設 量 m	孔 径 cm	通 量 m	通 量 m	色 調 色	土 施 成	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考	
34	4.15	1.4	0.8	7.74	S D-1	III	黄褐色	細い砂粒を含む	B. 滑面の一部が欠損。円柱形の中心が貫孔されたもの、端部は丸みをもつ。 B. 口端が欠損。両端が丸くすばむ円柱	滑面が著しく腐蝕され、減滅がある。	
35 (4.8)	1.6	0.75	(11.02)	S D-1	III	黄褐色	微砂を含む	A. 完形。片端が強く突出する。	C <sub>1</sub> . 完形。両端が強く突出する。	片端全体ナデ。	
36	5.85	1.9	0.8	17.50	S D-1	III	黄褐色	微砂	良好	C <sub>1</sub> . 片端が欠損。両端が丸くすばむ円柱	外周全体ナデ。
37 (4.4)	1.8	0.8	(13.28)	S D-1	III	黄褐色	砂を含む。	A. 完形。	C <sub>1</sub> . 片端が欠損。両端が丸くすばむ円柱	外周全体にかけて磨耗を認める。	
38	4.25	1.9	0.75	13.68	S D-1	III	黄褐色	微砂を含む	A. 滑面の一部が欠損。円柱形。両端は面をなす。	B. 滑面全体ナデ。両端はヘテル形。	中央部に黒斑を認める。
39	8.1	3.3	1.1	57.36	S D-1	III	赤褐色	細い砂粒を含む。	A. 完形。片端が強く突出する。	C <sub>1</sub> . 滑面の一部を欠損。両端が強く突出する。	片端に黒斑を認める。
40	2.6	0.65	0.25	0.96	S D-1	III	赤褐色	微砂	A. 完形。中央からやや膨らむ部分。	A. 完形。中央からやや膨らむ部分。	外周全体にナデ。
41	3.35	1.45	0.55	6.66	S D-1	III	黄褐色	微砂を含む	A. 完形。中央からやや膨らむ部分。	C <sub>1</sub> . 滑面の一部が欠損。両端が丸くすばむ。	滑面が著しく腐蝕され、減滅がある。

(著多貞裕)

## 第4章 古文書からみた吉住池

### 1. 江戸時代までの吉住池

吉住の溜池が、記録による史料としてあらわれてくるのは、中世末期、文亀2(1502)年の「諸封領配當之図」というものからです。ただし、この絵図は後世の写しであって、どこまでこの絵図がつくられた時の様子を正確に伝えているかはわかりません。

この絵図で吉住の池は、「菅野沼」という名称で書かれています。

吉住の池がくわしい記録として古文書にあらわれるのは、江戸時代になってからです。それは近世前期、17世紀末の元禄年間(1688~1704年のことです)。このころすでに吉住の池は、周辺諸村の用水として、また、葭や葦草のかりとり場として、人々の生活になくてはならないものでした。

そして、この時、日吉村と、溜の水を用水として利用している伊野部村・平坂村・木流村・下野村、以上の四ヶ村との間に池をめぐる争論(訴訟)が起ったことが現存する古文書によつて何えます(史料1・2)

それは、池が日吉村領か4ヶ村領かをめぐる争いでした。四ヶ村側は、池に樋3ヶ所をつくり、池の水を用水として用いています。また、堤・樋普請等も勤めているので四ヶ村領であると主張します。古文書では「四ヶ村百姓申す趣は、古来右池水三ヶ所の樋口より四ヶ村の田地用水にこれを取り、尤も堤・樋普請等も前々より相勤め、池床共に四ヶ村領の由、これを申す」となっています。

しかし、日吉村側は、池は葭地であり、池のことが日吉村の名寄帳(田畠等土地の所持ごとに、その土地の反別一面積、石高・生産高を書いたもの)に記載されており、池の分米(石高一生産高)八石で、年貢を上納し、また、葭の小物成(土地の用益またはその生産物にかかる税)として、一石五斗納めているので、池は日吉村領であると主張します。古文書では、「日吉村よりは、右場所は葭地にて高八石、并に葭小物成一石五斗宛、毎年地頭(領主)へ納むる所、天正年中の古水帳にもこれ有り、支配紛れ無きの由これを申すと述べています。

以上の判決は、池は日吉村領であることはまちがいないとし、ただし、四ヶ村の用水は従来通りこれを用い、その代償として四ヶ村から日吉村へ毎年米六石を差出すること。また、池浚・樋普請等は従来通り行い、池堤上置普請・樋伏せ替えは日吉村へことわってからすること。また、葭・葦草・芝草等は日吉村のものとすること、以上に決定されました。古文書では、「全く池床は日吉村領たるべし。然らば、四ヶ村田地用水に取り來り候段紛れ無きの間、米六石宛毎年日吉村へ之を出し、池浚え・樋普請等相勤め、唯今迄の通り、之を取り用ふべし。勿論、池堤上置普請、並びに樋伏せ替えの節は日吉村へ相断わり、有り來り通りに之を修補すべし。

且亦た、堤の草芝は日吉村牛場飼場たるべし」と述べています。

これ以後は江戸時代を通じて、大きな争論が起ったことを示す古文書は現存しません。また、明治期の古文書の内容からして、この元禄12年の裁許(判決)が、江戸時代を通じての基調となつたことが伺われます。明治7(1874)年4月13日付の上日吉村から県へ差出した「阪田地所御尋ニ付口上書」(史料3)には、次のようにあります。「元禄12年中御裁許に相成り、前書葭地水年貢として年々米六石充四ヶ村より日吉村へ相納むべくして、葭地御年貢の儀は上日吉村より上納致すべき旨仰せ渡され、則ち御裁許御裏書の御絵図面御下げるに相成、其後御裁許の通り仕来り候地所に御座候」と述べています。

## 2. 近代以降の吉住池

明治維新(御一新)により、江戸幕府による封建的な諸制度は、徐々に近代的なそれに変えられることになります。その中でも重要な土地の所有権や税制度は、明治5・6年(1872・3年)ごろから変更されはじめます。それに伴ない、吉住池をめぐる所有権や税制も封建時代のままでは間に合わなくなり、問題が起きてきます。

江戸時代においては、現在のような私的な土地の所有権は確立されておらず、百姓が耕やす田畠は、そこを支配する領主(お上・武士)も土地所有者であるし(領主的土地所有)、また、耕作する百姓も「土地所有者」である(農民的土地所有者)というように、一つの土地に二重の所有関係が併存していました。また、山林等は、御料山・御料林などといって、お上の専有地として農民には一齊手をふれさせないものもあったが、他は、入会地としてみんなが共同で所有し、共通の利益を得ていた共有地といったものでした。

しかし、明治になるとそうしたあいまいな所有関係は、近代的な資本主義的諸制度とは相入れなくなり、土地は私有地・国有地・公有地等の別が確立されていきます。また、土地についての税制度も、それまでの石高(米に換算された生産高)により課せられていた年貢(原則として生産物地代)が廃され、その土地に対して算出された地価により、その3% (後に2.5%)を地租として金納することになりました。この一連の変革が地租改正といわれるものです。

吉住地をめぐる様相も、この地租改正条例の布告(明治6年7月)により、池の所有権をどうするか、今まで日吉村がお上に納めていた年貢がどうなるか、また、四ヶ村から日吉村へ出していた用水の水年貢六石をどうするか、といったことで問題が起きます。

現存する古文書では、まず、明治6(1872)年7月10日付の滋賀県地券専務から四ヶ村へ下された御達書の写(史料4)には、池を上日吉村野帳(近世では土地の地字・名前・反別などを記した帳簿、土地台帳と考えられる)に記載させ、同様の件状を交付する。また、池に関する取扱い向きは旧慣の通りにするという文面がみられます。古文書では、「其の村養(用)水、上日吉村地元字葭地の義、今般別紙の通り、上日吉村野帳に記載致させ、同様の件状相渡すべし。尤も、右に付ての取扱い向きは旧慣の通りに候条」とあります。

しかし、「旧慣の通り」とは言うものの、この地が地租改正により無税の地ということになる

と、それに伴ない水年貢六石をどうするかということで上日吉村と四ヶ村の間で、やりとりが起ります。

明治9(1876)年1月12日付の上日吉村から滋賀県権令へ指出された願書(史料5)には、四ヶ村よりの水年貢六石は、取扱向きは従前の通りに仰せつけられたことであるのに、四ヶ村は米六石取引をしないつもりでいるが、従前の通りの扱いではないかと心に掛っているので、従前の通りにする旨を地券証にしっかりと書きかえて欲しい、と願い出ています。古文書では、「今般、地租御改正に付、旧高分米等廃され候様の趣押承奉り、就ては確証通り伊野部村・平坂村・木流村・下野村より水年貢として米六石宛、年々上日吉村へ納め来り候處、取扱向従前の通り仰せ付けられ候上は、(四ヶ村は)右六石米取引申さざる心得に存じ居り候え共、当時御下渡に相成候地券証にては、取扱い従前の姿に相成らずやと懸案仕候間、前件の通り従前の取扱い相成るべき様の地券証と御書換成し下されたく、此段御採用の程、想に願い上げ奉り候」とあります。これに対し、県からは、伊野部村外三ヶ村を呼び出し、篤と取り調べてから決定を下すという返事がありました。

そして、明治9(1876)年3月14日付の「互換証」(史料6)により、大すじの解決をみます。それによると、地租改正につき、用水池地は無税と確定し、五ヶ村の連署でもって地券証を下付されるので、永久に互いに無税とすること(水年貢の廃止)、また、藻泥・芝草等は上日吉村が刈り取ること、しかし、水利が不便の時は、藻泥を四ヶ村が掘り上げてもかまわないと、さらに、池底浚えと堤防普請等は四ヶ村が當繕すること、樋伏替えのときは上日吉村へ談判してから行うこと、以上のように決めされました。

古文書では、「今般、地租御改正に付ては、旧高を廃され、右養(用)水池地の儀は、一般無税と御確定相成り候に付、地元上日吉村養(用)水立会い、伊野部村・平坂村・木流村・下野村野帳へ連署開き申し致し、則ち右の名義を以って、地券証御下げ渡し相成り候上は、自今永世、互に無税たるべく候。然る上は藻泥芝草等は上日吉村へこれを取るべし。然りと雖ども、水利不便の節々は藻泥四ヶ村より勝手に掘り上げ申すべし。且つ、池底浚え及び堤防普請等は四ヶ村より當繕致すべく候。並びに、樋伏せ替えの節上日吉村へ談判の上、普請致すべき事」と述べています。

最後に、明治12(1879)年9月の「互換証」(史料7)では、地券証にのせる吉住池の名義のことが述べられています。明治9年の「互換証」により、吉住池の地券証には五ヶ村名義にしたいと村方では県に歎願しますが、法的にはそれは認められないことになり、村方双方で話し合いの上で、上日吉村名義にして地券証を下付されることとなりました。しかし、その他の取り決めは、明治9年3月14日の「互換証」通りだというものです。古文書では、「明治9年3月14日、双方熟議約定互換仕り候處、其の内今般下附に相成候地券面記載の義に付、<sup>ノ</sup>尋か、約定と相触れ、其目次に定約を結ぶ、左の如し、右池地の義、地元上日吉村養(用)水立会い、伊野部村・平坂村・木流村・下野村と野帳連署開き申し仕り候上は、右の名義を以て地

券証御下げ渡し相成り候と存じ奉り候處、地券面に養(用)水立会いの名義これ無く、然るときは既に約定互換等にも相触れ候事まで、双方情願仕り候處、右地券面へは養水立会いの名義、一般公法に指し間え、致底記載相成り難き旨御説明、止むをえず、双方熟義の上、地元上日吉村名義にして地券証御下附相成り、然れども養(用)水立会いの義は伊野部村・平坂村・木流村下野村に相違これ無く、其他總じて明治9年3月14日約定互換証の通り、双方熟義を遂げ確定候」と述べています。

このように、明治以降の吉住池をめぐる税制度は、本年貢・小物成という旧幕時代の生産物地代(現物による地代)の廃止、四ヶ村から日吉へ納入していた水年貢の廃止ということになりました。しかし、池で水草魚鳥を養蓄して利潤をあけるについては、それに相当する地価を算出するということが明治9年3月14日付の「互換証」につけ加えられています(史料6)

以上は、古文書(畠家文書とその写しと考えられる南きくえ家文書)からみた吉住池の変遷を簡単にたどったものです。池がそこに暮らす人々の生活に大きな恵みを与え、どの時代にあっても重要なものであることがうかがわれます。また、そうした古いできごとを知らさせてくれる古文書というものも大切なことで、きちんと保存していくことが望されます。(長谷川淑子)

### 3. 史 料

元禄五年(史料1)

江戸神崎郡建部庄伊野部村平坂村下野村木流村与同國同都日吉村蔵地池水詮除之事度々食義之上養蓄共日吉村江戸取水者四ヶ村江戸取水候段無縫相間ニ付其通落着申付候處四ヶ村五箇所之根場取迷惑之由日吉村達面令訴訟ニ付今度ニ為候使森本惣兵衛手代横川專右エ門万年長十郎手代佐藤次右エ門森二遣之見分之處四ヶ村五箇所之字ゆるが上申溜池之内伊野部下野井近在瓦屋寺三ヶ村之領有之古來五ヶ村之池ニ而用水桶三ヶ所有之無縫之由申日吉村五ハ右場所ハ段地ニ而高八石井戻小物成毫石五斗免毎年地頭江納所天正年中之古水帳ニ茂庭高有之支配無縫之由申之  
右池水四ヶ村江戸取水義極茂三ヶ所有之山つら川五之水筋ハ分明ニ相見候但先年之種者はめ板茂無之候故水不斷ニ落候而改快ク生出候虎西年前四ヶ村五新敷板ヲ仕かへ候節尺八種之雨露はめ板ヲ入候之故池ニ水溜養蓄草下生東之堤水越本田之構ニ隠成迷惑仕かへ候由申ニ付古米之種堀出させ見候處ニはめ板入候形無之候常ニ者種之雨露水ヲ出シ用水之節者土俵ヲ以雨露をふさ

き水宿候様子二相間候由申之

元禄十二年裁許写（史料2）

（表紙）

（史料3）

一右池床四ヶ村<sup>より</sup>支配仕使由申<sup>ヨリ</sup>譲無之候  
日吉村<sup>ト</sup>八霞地高之内由申<sup>ト</sup>付古帳ヲ以  
日吉領内令穿鑿處<sup>ト</sup>外ニ兩地曾<sup>モ</sup>不相見之  
上者<sup>ト</sup>石之場所候面ニ有之霞地<sup>ト</sup>與相間候但此  
古帳ハ名寄帳<sup>ト</sup>而百姓自分ニ持置候由四ヶ  
村<sup>ト</sup>中ニ付日吉村之古水帳相尋候處往古<sup>ト</sup>  
此帳面ヲ以年貢令納所外ニ水帳無之江島筋  
此類多有之由檢使之者共申候事<sup>ト</sup>前申付  
候通池ニ生候蘆草日吉村江刈取之水之義  
者四ヶ村江可取之但三つ之鹽先年之通はめ  
なしニ可仕候如申付候上ハ四ヶ村之者共  
西之根ヲ不切採様ニ可仕候若相背候者曲事  
二可申付之間向後急度可相守此旨者也

八月 日

右ハ 御公儀様へ御報申上候  
御裁配書

元禄五年壬申八月廿一日 日吉村

江州神崎郡日吉村<sup>ト</sup>与同國同都伊野部村平坂村  
木流村下野村用水池床<sup>ト</sup>詳論之事度々夷義之上  
裁許難申付日吉村依<sup>レ</sup>令悉<sup>シ</sup>此度<sup>ト</sup>為御檢使遠山  
四郎右門石原新左エ門被遣之私明<sup>ト</sup>之處四ヶ

村百姓申<sup>シ</sup>者古來右池水三ヶ所之縄口より四  
ヶ村之田地用水に取之尤堤福音諸等茂花前<sup>ト</sup>ニ  
相勸池床共に四ヶ村領之由雖申<sup>ト</sup>之不分明候日

吉村百姓申<sup>シ</sup>者右池床者兩地三町壹反四畝步  
分米八石<sup>ト</sup>名寄帳<sup>ト</sup>茂有之當村高内二面年貢  
相納此外霞小物成米<sup>ト</sup>石五斗是亦年々納米候  
由申<sup>ト</sup>之為歷然之矣全池床者可為日吉村領然者也  
四ヶ村田地用水に取來候段無粉之間米六石宛  
每年日吉村江出之池後補請示相勸唯今迄之  
通可取用之勿論池地上置普請井桶伏替之節者  
芝者日吉村牛馬飼場たるべし仍為後澆灌因之  
面加墨引判双方へ下置候条不可失失者也

一 蔡田別三町壹反四畝步  
此分米八石

今般大繩場御取調ニ而御尋ニ付左ニ奉申上  
候

外ニ米<sup>ト</sup>石五斗霞小物成  
但シ御裁許御檢因御裏書寫相添

右地之義者往古<sup>ト</sup>五霞村高五百武拾七石老斗  
六升之内ニ而霞田之頭を湖賣御半貢御上

納仕來<sup>リ</sup>候虚元禄年中同郡伊野部村平坂村  
木流村下野村四ヶ村<sup>ト</sup>多人數限地立入霞根

起し土手を築キ押領被放候より及諭論二度  
々御食儀之上元禄十二年中御裁許ニ相成前  
書霞地水年貢として年ニ米六石宛四ヶ村<sup>ト</sup>

神崎郡第六区

上日吉村

神崎郡第六区上日吉村

持主 総村中

日吉村江可相納、霞地御年貢之儀者上日吉  
村より上納可致旨被仰渡御裁許御奉書之  
御絵図御下渡ニ相成其後御裁許之通り仕来  
リ候地所ニ御座候以上

神崎郡第六区上日吉村

村總代組頭

副長 畑 金右衛門

明治七年 四月十三日

梅原善兵衛

戸長 南 慎八

前書之通りニ付奥印仕候以上

右区々長

相模水道右衛門

信濃御印

駿河 在江戸  
無加印

丹後御印  
紀伊御印

江州神崎郡

同國同都

日吉村

椎少 松田  
十四等出仕三宅

(裏表紙)

伊野部村

平坂村

木流村

下野村

庄屋

惣百姓

(表紙)

明治九年 一月十二日

(史料四)

池地之義ニ付  
御願書

第七拾七番宇吉住

神崎郡第六区

上口吉村

上口吉村

- 64 -

中鳴

氏原

日吉村江可相納、霞地御年貢之儀者上日吉  
村より上納可致旨被仰渡御裁許御奉書之  
御絵図御下渡ニ相成其後御裁許之通り仕来  
リ候地所ニ御座候以上

神崎郡第六区上日吉村

村總代組頭

副長 畑 金右衛門

明治七年 四月十三日

梅原善兵衛

戸長 南 慎八

前書之通りニ付奥印仕候以上

右区々長

相模水道右衛門

信濃御印

駿河 在江戸  
無加印

丹後御印  
紀伊御印

江州神崎郡

同國同都

日吉村

椎少 松田  
十四等出仕三宅

(裏表紙)

伊野部村

平坂村

木流村

下野村

庄屋

惣百姓

(表紙)

明治九年 一月十二日

(史料四)

池地之義ニ付  
御願書

第七拾七番宇吉住

神崎郡第六区

上口吉村

上口吉村

- 64 -

之取扱可相成様之地券証与御書換被或下度  
此段御採用之程奉想願上義以上

總代 戸長

神崎郡上日吉境內第七拾七番字吉住  
池地改正反別四町貳反八畝三步

神崎郡第六区上日吉村

明治九年

一月十二日

村惣代

南惣八

上田金兵衛

(総印) 下野村 聯合戸長市田喜兵衛

(緒印)

右平坂村木流村

本流村

絶代佐生太兵衛

總代

木流村

戸長

什未族同郡伊之部村平坂村木流村下野村  
四ヶ村養水池地二付每年米六石上日吉村江  
納米候處今般地稅改正ニ付テハ旧高ヲ被  
廢石養水池地之儀ハ一般無稅上御確定相成  
候ニ付地元日吉村養水立會伊之部村平坂村

本流村下野村野坂江連署開申致シ則右之名  
義ヲ以テ地券御下渡相成候上ハ白今水世  
瓦ニ可為無稅然ル上ハ墨泥芝草等ハ上日  
吉村江可取之雖然水利不便之節々ハ藻泥四  
ヶ村ヨリ勝手ニ塙上ケ可申且池底浚江及ヒ  
防音堵等ハ四ヶ村ヨリ當様可致候並種伏  
禁之筋上日吉村江議判之上書請可致事前件  
之通今般更ニ双方速熱議難定候上ハ自今永  
世故障毛頭無之依之互換保證如件

滋賀縣令簽手田安定殿  
前書之通ニ付奥印仕候以上

右区  
区長福永善右衛門

滋賀縣令簽手田安定殿

(史料 6)

(表紙)

(御印)

池地示談調諭ニ付上由書

明治九年  
一月十二日

(裏表紙)

(御印)

神崎郡第六区  
区長田中清左衛門

明治九年

一月十二日照出

区長深尾忠左衛門

木流村

明治九年  
三月十四日 戸長 高田藤助

下野村

同郡第五区

副戸長渡辺弥右衛門

明治九年  
三月十四日

木流村

戸長 布施源治郎

平坂村

副戸長渡辺弥右衛門

明治九年  
四月廿四日

下野村

副戸長渡辺弥右衛門

戸長 高田藤助

滋賀県権令兼手安定殿

書面互換證書中菱水池地無税之儀ハ一般之

伊野部村  
副戸長富田忠左衛門  
戸長 杉山所平

木流村  
副戸長布施重右衛門

戸長 布施源次郎

平坂村  
副戸長佐生鍋吉

戸長 田中久平

木流村  
副戸長布施重右衛門

戸長 布施源次郎

伊野部村  
副戸長富田忠左衛門

戸長 杉山所平

上日吉村  
正副戸長御中

書面之通り相違無之二付奥印候也

第六区

区長 田中清左衛門

副区長 畑 値時

第五区

区長 深尾忠左衛門

副区長田善兵衛

右池地之儀ニ付先般米各村ヨリ奉伺照候處

双方江示談可致旨被仰渡候ニ付遂熟議確定

致し前今般前書互換證差出候上八自今永世

故障毛頭無之仍而此段奉上申候也

同郷第五区

同郷第六区

上日吉村

副戸長梅原萬右衛門

戸長 水井治右衛門

取扱人

区長 深尾忠左衛門

副区長 田善兵衛

第五区

副区長 田善兵衛

区長 深尾忠左衛門

一神崎郷上日吉村境内第七拾七番字吉住池地

互換証

明治九年三月廿四日

(史料)

(表紙)

互換証

神崎郷上日吉村

ノ義ニ付明治九年三月十四日双方熱誠約定互換仕候處其内今般下附ニ相成候地券面記裁ノ義ニ付期約定ト相触レ其目此ニ定約ヲ結フ左ノ如シ

右池地ノ義地元上日吉村養水立會伊野部村平坂村木流村下野村ト野帳署開申仕候上八右ノ名義ヲ以テ地券証御下ケ渡シ相成候ト奉存

義處地券面ニ養水立會ノ名義無之然ルキハ義二約定互換等ニモ相觸レ候廉ヲ以テ双方情願仕候處右地券面ヘハ養水立會ノ名義般公法二指間致底証難相成旨御説明不得止ヲ双方

熱誠ノ上地元上日吉村名義ニシテ地券証御下附相成然レ養水立會ノ義ハ伊野部村平坂村木流村下野村ニ相送無之其他總テ明治九年三月十四日約定互換証之通双方遂熱誠ヲ確定候上ハ自今永世故障毛駆無之依而再互換證書如件

木流村

下野村  
御中

前書再互換証差出候上ハ自今永世故障毛駆無之依而此段奉上申候也

伊野部村

神若郡

上日吉村

明治十二年九月

總代兩 慶八 (印)

(捺印)

戸長畠 値時 (印)

(捺印)

神若郡

伊野部村

平坂村

## 第5章 吉住池にかかる民俗

### 水口あけ

吉住池の水口あけのまつりは、1月11日に神崎郡五個荘町大字奥集落が行っている。

朝10時頃 奥集落の役員は酒一升と大注連縄(しめなわ)を背竹の先にかざして八日市市建部下野町集落に立寄って挨拶をした後、吉住池の樋門(ひもん)の一つである奥村のゆる(別称「下のゆる」という)に行き、樋門口に大注連縄を飾り、酒一升を供えて拝む。

この大注連縄は、太さ70cm、直経3mの輪型で、当日朝に惣役員が出て作り、吉住池の水神に供えて生活用水と灌漑用水が豊かであるようにと祈る行事である。

### 井元の神のまつり

吉住池は湧水の沢である。この沢の上流に「市の湯(いちのゆ)」とも「浜野沢(はまのざわ)」とも呼んでいる湧水の沢がもう一ヵ所ある。この沢から流れ出る川を今井川といい、水利権は吉住池の下流郷である五個荘町大字奥集落・八日市市建部下野町集落・同市建部大塚町集落が持ち、三集落の生活用水と灌漑用水に使っている。この沢の水神様をまつる行事があって、これを「井元の神」のまつりと呼んでいる。

まつりは、1月11日朝9時頃、三集落の惣役員が揃い、酒一升と大注連縄(太さ約80cm・長さ約3m)を持って市の湯(浜野沢)に行き・沢の岸に酒を供え、岸に生えている木の枝に大注連縄を掛けて拝む。

昭和55年、耕地整理で市の湯は水田となったが今井川は残り、今井川岸に「井元の神」の石標を建て、今もこの行事は続いている。

また、市の湯の徳水集落である八日市市建部日吉町では、市の湯を水源とする「サザ川」の川普請を5月8日のお月ようかの日に惣組出で行っていたが、昭和55年の耕地整理以後は愛知川ダム用水の通水で廃止された。

さらに八日市市建部瓦屋寺町も四月初旬に川普請を行っていたが、これも廃止している。

日吉町と瓦屋寺町は井元の神まつりには参加していない。

### ゆるがえ普請

「ゆるがえ」とは、吉住池をさして呼ぶ集落と、吉住池にある四ヵ所の樋門(ひもん)をさして呼ぶ集落がある。

ここで「ゆるがえ普請」と呼ぶのは、樋門口の土砂ざらえと補修のほかに、取水の水量割りをする土俵を埋める作業である。

この作業は、5月5日朝8時頃、吉住池の堤に6ヵ集落民が集まり土俵15俵を作る。

六ヵ集落とは、吉住池の水利権を持つ下の郷六ヵ集落で、八日市市建部大塚・建部下野・神

崎郡五個荘町大字伊野部・平坂・木流・奥集落である。

15俵の土俵は、伊野部用水の樋門口に四俵。伊野部・平坂・木流の三集落用水の樋門口に6俵。建部大塚・建部下野の二集落用水の樋門口に三俵。奥集落用水の樋門口に2俵の水かがりによるもので、耕作面積の割合である。

この土俵埋めのほかに、明治中期頃までは、各樋門口の土砂さらえや堤の修復など行つたと伝えられる。今は伊野部公民館に六ヵ集落の役員が集合して土俵作りをしたあと樋門口に沈める行事だけになっているが、吉住池改修工事で、昔日のような漏水現象が出たら、ゆるがえ普請の復活が見られるだろうと地元民は期待している。

#### ゆるがえの杭打ち

ゆるがえの杭打ちとは、吉住池と今井川の境界に漏水防止用の松杭を打つ川普請である。

これをするのは、神崎郡五個荘町大字奥集落で、5月5日朝8時頃 惣中総出で吉住池東岸に参集。今井川の下流から上流の市の湯(別称浜野沢)にかけて歩き、吉住池と今井川の境界にそって松杭を打ち、松板を衝溝に張り、川の水が沢に漏れないようにする。また。今井川の川底の土砂さらえも行う。この行事は、昭和55年の耕地整理と昭和58年の吉住池改修工事完成によって廃止された。

#### 速恵さんのまつり

速恵さん(そえさん)とは、吉住池の東北の隅にまつられている神で、龍神さんといわれている。この場所は池の中で雑木と雑草が茂る小さな丘であり、社の建物はない。

お社は、八日市市建部日吉町集落内の郷社日吉神社本殿東側にある小社三社の中央部のお社で、これが「速恵六明神」といわれていて、7月25日にお祭をしている。

この祭は、吉住池を共有する八日市市建部日吉集落・建部田中集落・建部竹鼻集落の三集落で、朝10時頃、氏子総代・区長・副区長・若衆大頭(おおかしら)・農業実行組合長・老人会長らが参列し、神職が祝詞を奏上する。供物に鰯・玉子・野菜が供えられ、三集落の老人会員が招待されるほか、終日、日吉郷の惣中が参詣する。

速恵大明神のお姿を見た話が伝わっている。

明治初期に速恵の森近くで肥料用の草刈りをしていると、大蛇が出現。目を光らせて怒ったので、以後、毎日玉子を供えて怒りをしずめたといわれる。明治末期頃には、速恵の森に玉子を供える習慣はなくなり、日吉神社境内の速恵大明神の小社に供えるようになったが、今はこれもなくなっている。

#### 野の神のまつり

吉住池東岸に八日市市建部日吉集落の野の神の斎場がある。この野の神の斎場を別称「ダイショウウゴさん」と呼んでいる。昭和55年の耕地整理以前には、三本の大杉が生えていたが、昭和56年に「野の大神」の石標を建立した。

野の大神のまつりは、8月7日に氏子総代一人が酒一升とマクワ瓜を持って参詣するだけで

ある。周辺集落の野神まつりには、惣中の男性が参詣して子供相撲を奉納するが、この野の神まつりには、子供相撲を行った伝承はない。

#### 嫁取り橋の伝説

昔、信州のさる大名のお姫様が、伊賀のさる大名の若君様に嫁入りする道中、吉住池にさしかかった。お姫様が輿の中から池の畔りを見ると、一頭の牛が水辺で池の水を飲んでいる姿が見えた。お姫様は、にわかにのどの乾きを訴え、輿から降りて、吉住池の水を飲もうと石橋の上から身を乗り出すと、お姫様の体が池の中に吸い込まれて水中に没してしまった。側に居た女従者が手をさしのべて助けようとしたら、女従者も池の中に沈んでしまった。しばらくして黒雲天空を覆い、雷光雷鳴激しくなったかと思うと、お姫様の姿も、女従者の姿も大蛇に変り天へと舞い上った。

この事件があつて以来、嫁入り道中には吉住池をさけて通るようになったとき。

(昭和24年春 建部日吉 故畠九右衛門より取材の話)

#### 吉住池の漁法

吉住池には「どんじょふみ」と呼ぶ珍らしい漁法がある。

どんじょふみ漁法とは、大きな竹籠(かご)を水中に沈め、足で魚を竹籠の中に追い込んで揚い(すくい)上げて捕獲するもので、近郊では見られない吉住池独特の漁法である。

「どんじょふみ」と呼んでいる竹籠は、長楕円形の舟型で、長さ1間半、幅半間・深さ6尺漆塗りの竹籠で、口の所に二本の取手棒があって、この取手棒を握って籠を水中から揚い上げて魚をとる方法の漁具である。

この漁法は昭和40年代まで行っていたが、吉住池へ八日市市街地の汚水が多く入り、ヘドロの沈積が深まったので、どんじょふみ漁法は自然となくなつた。

このほかに「カイドリ」漁法がある。土石で水を囲み、囲みの中の水を汲み出して魚をとる方法。「ノド取り」という漁法もある。「ノド」という割り竹を編んで筒状の籠を作り、一方の口を閉じ、一方の口を漏斗状(じょうご)にした漁具を水中に沈め、ノドに入った魚を取る漁法である。

さらに「カキ」という漁法。投網。四手網。さで網。竿釣りなどの漁法もあるが、これらの漁法の時は、箱舟「たらい舟」に乗つて行った。

吉住池に生息する魚類は、コイ・フナ・ヒワラ(ハイ)・アマゴ・ゼゼラモロコ・タモロコ・ホンモロコ・ボテジャコ・ナマズ・ウナギ・ドジョウ・アカゲ・オイカワ・アユモドキ・ハリヨ・メダカ・モツゴ・タイワンドジョウ・カネヒラ・アブラボテ・ボテ(シロヒレタビラ)・カマツカ・ムギツク(ムギモロコ)・ヨシノボリ・ドンコ・スナヤツメウナギなどの淡水魚である。

吉住池でとれる魚は、味よくて骨が軟かいといわれている。また、周辺集落では家の前の小川にイケスを設けてあり、捕獲した鯉・フナが飼われて必要に応じて食卓に供したほか、吉住

池の普請や川普請には、これらの魚をとて直会の酒の肴にしていたと語られる。

今は、吉住池の湧水現象がなくなり、水も枯渇したため、魚は住んでなく、地元民は、吉住池の復活を持ち望んでいる。  
(三露俊男)

聴取り者（敬称略）

神崎郡五個荘町大字伊野部 582番地 北川伝右衛門 大正6年5月8日生

八日市市建部日吉町 676番地 寺井秀治郎 明治41年5月16日生

寺井やえ 明治42年7月29日生

八日市市建部下野町 241番地 高木長兵衛 大正2年3月31日生

参考文献

八日市郷土文化研究会発刊 蒲生野1号・17号・18号の拙稿「郷土の民俗」

## 第6章 結び

## —吉住池に関する一試考—

## 1. 吉住池の立地

吉住池の立地に関する、特筆すべきことがからは、他かでもなく愛知川の左岸にあって、しかも箕作山山塊の東麓に築造されていることである。実は、このことが、吉住池の形成や発展、あるいは利用、活用、さらにはこの池の衰退に関することまで、すべての面において規定的な要因となっていることである。

吉住池は、愛知川から距たること直線距離にしておよそ 1.6km、箕作山とはその山麓で接していて、山裾自体が池の岸辺の一部になっている。

吉住池の形成、発展、衰退は、一に愛知川の形成する扇状地の発達とかかわり、二に箕作山山塊に規定してきたといえる。そして第三に池そのものの有用性、活用性を規定してきた要



挿図11 湖東平野の等高線（『八日市市史卷1』に依る）

因は、この吉住池がこの水系の最上部を占めることである。すなわち、この池のすぐ南に接して、愛知川と併行に広がる低位段丘が、吉住水系の上限を限っていることである。吉住池は、この水系の最上部を占め、しかも最大の貯水量を誇るものであったといえる。

愛知川の作る扇状地の発達を微細に観ると（挿図11）、その等高線は、愛知川を中心に扇形の弧状をなすが、まさしくこの高等線が愛知川と交叉する個所では、等高線は若干上流方向にそのラインを垂めている。この現象は、愛知川が一旦形成した扇状地を、侵蝕はじめた証左であり、かつての愛知川は近江八幡市域へ直に流路を取っていたことが判明している。このように、弧状に広がる等高線は、吉住池の位置する標高125mラインでは、箕作山の南に延びる一支部・延命寺山とクロスしていることに注目される。

すなわち、等高線の描く曲線は、標高120mラインが箕作山に直交し、地形となじんでいるのと大きく異なり、この標高125mラインは山麓部に大きなポケットを形成していることである。

愛知川が箕作山の南に流路を取っていた時、箕作山の北東麓はこの山に遮られて、愛知川の土砂の流入もなく、埋め残しの地域となっていた。さらに、愛知川が箕作山の北東部を流れる現在においても、その扇状地化はこの山麓にまで及ばなかった。

この山麓部には、河川の運搬する堆積物が全くみられず、低湿地としての窪みが残されたのである。

このような地形の形状とあわせて注意すべきことは、さらに、この扇状地が、愛知川の伏流水をこの地点で大いに湧出させたことにあったといえる。

以上のようにして、自然に生れた、清水を滾々と湧せた低湿地が、それ以降（厳密には水をも労働対象とする弥生時代以降）、入手による変改を経て今日に残された姿こそ吉住池そのものであったといえる。

吉住池は、本来上記の意味合いからみて、現吉住池よりはるかに広域であったと思われる。すなわち、現吉住池と浜野沢（広義には上沢、下沢、向沢など建部瓦屋寺町地先をすべて含んで考えたい）を合せた、箕作山山麓の長大な低湿地をすべて吉住池あるいは「ゆるがえの溜」時には「浜野沢」等々と呼称されていた時代があったに相違ない。

特に浜野沢なる呼称は、「淡海温故録」瓦屋寺の項によると、「其麓（箕作山山麓の意）の池は瓦の土を掘り出したる跡なり」という。又浜野沢ともいはず」とあることから、そのように呼称された感は強い。すなわち、もとは扇状地の湧水点がこの窪みの東傾斜面に点々と広がり、「沢」と呼ばれるものにふさわしい状況を示していたものと思われる。

この沢の規模は、その地形の形状から推して、北は五個荘町の境となる小字北山の後光の峰と呼ばれる丘陵の最先端（箕作山から延びる丘陵支脈のうち、東に延びる丘陵先端、鼻と呼ばれる）から、南は延命寺山丘陵先端（箕作山から南に延びる丘陵の鼻）の松尾神社参道まで、その距離およそ1.3kmで、その幅は約250m前後であったと推定される。

## 2. 浜野沢の年代

滋賀県下で最も古い明治26年の仮製2万分の1地形図によると、松尾神社の参道右手には、参道から距たること数十mにして、湧水池1ヶ所がうかがえる（現存しない）。そして、さらにここより北方へ300m程距てて、やはり細長く延びた湧水池が250m程続いてみうけられる。

この湧水池から流れ出た水路は一条の河川（この河川は何々川との名称がなく、上流を上沢、中流を向沢、下流を下沢と沢の名前で呼称している）となって吉住池に注いでいる（吉住池が涸れだしてからは、この河川は伊野部井に流れ込んでいる）。

また、は場整備前、後には、もう一条の湧水を集めた河川が、吉住池の南を抜けて大塚に経る用水路・今井川がみうけられる。



挿図12 吉住池周辺地図(明治26年仮製2万分の1)

今井川は、その名のとおり比較的新しい用排水路として掘削されたもので、それ以前は上沢、向沢、下沢の地名を結ぶ一条の流れが先行して存在したものといえよう。

この二つの段階を、前者を a、後者を b 段階として整理すると、この二段階の基本的な相違は大きい。

a 段階に比定する今井川の設置は、上沢、向沢、下沢の低湿地を本格的に乾田化することにあり、あわせて吉住池の恩恵に浴さない大塚方面への引水を図ったものであるといえる。

このことは、吉住池と不明瞭なかたちで不可分の形にあった狹義の「浜野沢」を、吉住池そのものと分離する意図があったといえる。

すなわち、吉住池を現在の規模として固定化を図るとともに、その水源についても、吉住池内の湧水点を確保、維持することに方向付けされたものと推定される。

b 段階以前の様相は、は場整備施行に伴う、発掘調査こそ実施されなかったが（地元関係者等からその要請が指摘され、遺物の発見も伝えられていたにもかかわらず）、地元、大谷巖氏の詳細な観察や多量の遺物採集が図られたことによって貴重な資料が確保された。

特に今井川の改良は、大幅な地下掘削を伴い、地表下 1.8m 付近から多量の須恵器、土師器、木器等が出土するに及んだ。また、この部分の地層は高植土層（スクモ層）からなり、広い意味での旧河川の川底とはいえ b 段階以前の実態を良く示すものであった（この段階を c 段階としておきたい）。

以上の如く、吉住池上方の低湿地の変遷は、大きくは c 段階 - d 段階 - a 段階 - o 段階（現在）の 5 段階に区分することが出来る。

### 3. 吉住池の規模と年代

#### a. 第 1 次調査の所見

吉住池は、その大部分が、建部日吉町日吉に属し、前記の上沢、下沢等の低湿地は、建部瓦屋寺町に属していた。

それのみか、この池の本質にかかる重要な点は、当地が建部日吉町に所在しながらも、その管理者が下流域にあたる五個莊町伊野部の区長にあることである。

滋賀県農林部の備える「ため池台帳」には、この池の受益面積が 90ha、堤高 2.5m、堤長 75m、貯水量 37,800m<sup>3</sup> とあり、築造時期は徳川中期と登載されている。

今回の吉住池の発掘調査は、その全域に及ぶものではなく、特に、瓦屋寺町の各沢を縫って流れる河川（沢）の流路と池とのかかわりを示す流入口個所は、流出（取水）個所とともに未調査に終った。

第 1 次調査は、吉住池の南半から東寄りにかけて発掘調査を行った。調査の成果は、本書本文中に記載のとおりであるが、注目すべきその特質は、池のベースがすべて砂と砂礫層からなり、愛知川のもたらした堆積物であったことである。

第2点は、標高119.30mが池床東寄りのベース高であり、西へ傾斜していた。そして、さらに注目すべきことは、池床の起伏が著しく、しかも、月にみられるクレータの如き円形の窪みが所々に散見され、ここが湧水地点であることが推察された。そして、これらの湧水土塙（湧水を招くために人工的に掘削された穴を土塙という意味でこの用語をしばらく使用する）は各湧水土塙と連携し下流へと流路をとっている（湧水土塙を連携させはじめたのは、湧水量が減少はじめてからのことか）状態を示していた。

湧水土塙の基本的な事柄は、吉住池内のどこにでも穿たれたものでないことである。その位置・分布には大きな傾向が伺われる。

すなわち、いずれもが池の南東に偏り、西側には全くみうけられないことである。このことは重要なことであり、その理由は、扇状地先端の湧水点が池の東寄りにみうけられること、池の西寄りは、瓦屋寺方面からの用水に対する下流への流路の機能をもたせていたからといえよう。

この湧水土塙の観察から得られた第2点は、その形状に2種類がみうけられることである。1つは、略正円形を呈するものであり、他の1つは不正長方形を示すものである。

しかも、この両者の分布にも偏りがあり、土塙（SK-I～VI）は適宜集合しながら溝で結合し、1条の溝となって下流に導かれる（水位の低い時のみ）構造となっている。しかし、不正長方形のものは、池の南端よりやや北東部に集合し、両者の形の違いには時間的なものもあったのではないかと思われる。

すなわち、以上をまとめてみると、a段階、現在（湧水土塙より湧水が出なくなった時期から、この湧水土塙を浚渫で除去した時期）、b段階、湧水土塙を池床の東寄りに設けたが、いずれも不正長方形や長楕円形を呈するもので、湧水土塙と流路が良好な形で結せず、低みを縫って下流に流れでている形状をとっている。

b段階、円形の湧水土塙が設けられ、各土塙が一条の水路にうまく結合して、下流に導かれている形態をとる。

c段階、上沢、下沢、向沢等から湧出した水が、この吉住池に流入していた時期で、第1次調査において溝状遺構が検出された段階。以上4つの段階が推定された。

c段階は、池床（愛知川扇状地の砂礫層）を自然掘削して流れる時期であるが、ひるがえって考えるに、単なる排水を目的とした人工溝の可能性も考えられなくもない。なぜなら、このような扇状地面に自然流路が流れ込む必然性はより少なく、むしろ東寄りの山の裾部低みを流れとする方がより自然である。しかし、この山裾部が狭隘な場合には、水は滞水し、池床を削るように自然水路が形成される場合がないでもないという推測が成り立つかもしれない。

なお、このc段階の溝は、その伴出遺物からみて、7世紀前半代・飛鳥時代に想定することができる。

また、b段階とした円形湧水土塙は、その内部から出土した土師器より江戸時代に瀕るもの

であることが判明している。

c段階にとって最も重要なことは、この自然流路（あるいは若干入手の加わった人工排水路）溝（SD-2）の時期に吉住池が形成されていたか否かである。このことに関しては、この溝に伴う良好な遺物や溝内の堆積土の状態がその様相を暗示しているといえる。

特に、溝内出土の一括遺物に関しては、その土器群の一括性そのものにまず注意されるが、良質な土器器碗は、在地性の色彩も薄く、中央に関連する祭祀を暗示させるものであった。

また、溝内の堆積については、その内部に暗灰黒色粘質土が充満しており、いわばスクモ・泥土が堆積しているといえる。このことは、この溝がこの土器群の示す飛鳥時代かその後にはもはや流路としては機能せず、しかもスクモの形成される冠水の状態にあったことが推定される。このことは吉住池の築造にとってきわめて重要な所見である。すなわち、飛鳥時代なし、それ以降のある時期に池の形成をみたことになり、それ以前には潮り難いことを暗示したといえる（但し、第1次調査区に及ばない小規模な池がすでに北部に築造されていたかどうかについてはこの溝自体の評価から導き出すことは出来ない）。

#### b. 第2、3次調査区

第2、3次調査区での吉住池は、第1次調査区のそれとは大きく様相を異にしていた。まず、調査前の地形の状況では、湧水土塙と推定されるものが四ヶ所認められたが、これらはいずれもが第1次調査区のa段階とした不定形・長方形、橢円形のものであった。しかも、表土除去後、これらのいずれもが、池底に明瞭な形状をとどめることなく、消失したことからみて、湧水土塙としての明瞭さを欠いていたといえる（しかし、機能は充分果たしていたことが古老の話から推測される）。この地形図に示された状況をa段階とし、後漢後の現在の姿をo段階としておきたい。

この吉住池にとって、最も注目すべき画期は、b段階である。この段階は、池底下に頭大から拳大の河原石を敷きつめた段階といえる。そして、次のc段階は、その下層數十cmに敷かれた（敷かれたとした方がよいかもしれない状況が傾斜面・築堤部分に認められた）河原石の層である。この敷石もまた、この池にとって大きな画期であったといえる。

さらに、河原石層下層の溝（SD-1）の形成もまた、この池の歴史として重要なものであった。この段階をc段階としておきたい。

これらの各画期のなかで、b段階の年代は、敷石（II）上の遺物から想定しなければならないが、まず、層位関係にもとづき、敷石下層の年代比定により上限を求めてみた。すなわち、溝（SD-2）からは平安時代の良好な遺物の出土があり、また、鎌倉時代に下るものも含まれることから、それ以降と推定した。

しかし、敷石（II）上の江戸時代の出土遺物からみて、下層がそれ以前とすれば、敷石（II）の年代もこの頃に近く、室町時代末葉ないしは戦国時代末葉前後頃と予想することができる。

c段階の石敷は、第1トレンチの東壁で部分的にみうけられたものであってその年代の決め手を欠くが、この石敷上面から和同開珍の出土があり、注目された。

d段階は、溝(S D - 1)の年代比定によるが、溝自体の肩口・四周が再三再削平される可能性のあることからみて(第1トレンチの溝(S D - 1)は明らかに上部の削平を受けている)、石敷との直接的関係は考え難いものであった。

また、第1トレンチにかかる溝(S D - 1)では、縄文式土器や古式土器師の出土をみると、このことをもって単純にこの時期に開掘されたものと考えることは出来ない。ただ、溝の最下層の第Ⅳ層出土遺物をみてみると、いずれも古式土器師とそれ以前のものばかりであって、新しいものの混入がないことが注意された(四周に一杯あるにもかかわらず)。このことからみれば、湧水地点が、早い時点で、恐らく古墳時代前期頃に一度開掘された可能性が残されたといえよう。

また、この箇所のII層では二点の良好な白鳳時代に溝る土師器をみると、より新しいものと混在している。しかし、この暗文をもつ土師器碗が、他地域から搬入された良質なものだけにこの溝の年代を暗示しているかもしれない。

なお、他に良好な遺物として、第2トレンチのI層から出土した一括遺物がある。

平安時代中期の土師器であるが、これもまた良質な胎土をもつ土器群として出土している。しかし、溝の底までは、II、III層と約50cmの堆積があって、この一括遺物を溝の下限とするならば、溝の開掘年代はさらに遡らせてよいことになる。

c段階を平安時代中葉以前、場合によっては和銅開珍を下限(この場合は奈良時代に想定出来る)としてよいかもしれない。

ところが、さらに、第3トレンチの北壁では、白鳳時代の軒丸瓦や平瓦が溝(S D - 2)に対応する個所で検出されており、このことも溝の下限を推定する重要な目安といえよう。

d段階—古墳時代前期、c段階—白鳳時代—平安時代、b段階—室町・戦国時代、a段階—昭和50年代、o段階—後漢後、という諸段階を経たといえる。

これら諸段階、諸面期のなかで、問題は、何時からこの池の形成がはじまるのか、その痕跡はどこに見い出せるのかである。何をもって池の形成とするのかが重要な点になると思われる。

特に、溝の内、外において、有機質土層、スクモ層、腐植土層と呼ばれるものや、ヘドロ状の泥土の堆積は、流れの停滞・池底化を予想させるが、それも溜池化のなかの水位低下を思われるものもある。

なお、池底部で、あわせて溝底となる各部位は、第2トレンチで標高約117.7m、第8-2トレンチで同約117.6m、第3トレンチで同約117.5mを測っており、約100m間で約20cmの勾配をもっていることになる。

そして、第2トレンチでは溝内上層(I層)は、黒褐色有機質土層で、その下のII層は有機混りの砂疊層である。すなわち、このトレンチのI層は、平安時代中葉の良好な土師器を出した

土層であるが、その有機質土の堆積は、その水位の上昇、下降を伴う池底部がすでに形成されていたことを想わせるし、下層の砂礫層に有機質が混ることはこの層が池底部にあったことを物語っているといえる。

同様なことは、第3トレーナーについても指摘できる。そのI層は、黒褐色有機質土層で、厚みが1mも認められ、しかもその下層には白鳳期の軒丸瓦が含まれていた。この瓦の堆積時期からこの流路の滞水が開始されており、池としての機能がそなわっていった一証拠といえよう。

#### 4. 吉住池成立年代考証

第1次調査では、溝(SD-2)が飛鳥時代まで通り、その後、溝底に腐植土が堆積を示し、吉住池の池としての貯水が始まった可能性をみた。では、この溝(SD-2)の年代は、何時におけるべきなのであろうか。溝(SD-2)の溝内出土須恵器群を概観すると、杯蓋の口径が10~11cmと小さく、蓋部はヘラ削りが残されている。杯身も口径は9~12cmと小さいが、やはり底部にヘラ削りが残存している。蓋を固定するかえりの立上りもきわめて小さいが、受け部より上方へ3~6mm突出している。

これらの様相は、遅くとも7世紀の第1四半期におくことができる。他方、同伴の土師器碗は、これまた口径が14~16cmと大きく、器高も4.3~5.5cmと深く、器壁も重厚である。内面に暗文を巡し、外面はケズリや指圧痕をとどめるものもある。須恵器、土師器とともに年代に矛盾なく、この頃、600年代の前葉頃(推古女帝、聖德太子の頃)にこの滝水地帯が田養水として改めて注目された一大二期のあったことを推測させるといえる。

他方、第2、3次調査分については、溝(SD-1)から検出された軒丸瓦が、この地区的貯水化現象を示す年代比定の一論拠になりうるといえる。この種軒丸瓦と対になる平瓦は、格子目の叩きがつき、その実年代については、奈良時代におく研究者もあるが、近江の格子目叩きをもつ瓦(平安時代のものを除いて)の多くが710年・平城京遷都前に焼成されたものとの推定に立っている。その根拠は、平瓦に格子目叩きと繩目叩きを併用した時期が、近江では(大和ではまだ様相が異なるが)、いまだ杯蓋の内面のかえりをわずかに残す時期に相当することである。

このことから格子目叩きから繩目叩きへの完全な交替は、杯蓋の内面のかえりが消失した頃で、ひかえめにみても700年頃前後と推定される(実際はもう少し古く考えてはいるが)。

このような推定がある程度許されるならば、軒丸瓦を伴った溝(SD-1)は710年以前に掘削されたものであり、この溝が引続いて貯水化現象を示すことから、やはりここでもこの池としての貯水化は白鳳期にあったのではないかと推定される。

#### 5. 吉住池の造営

8世紀前後には、箕作山の東麓に滝水地帯の形成をみたが、その造営はいとも簡単なもので

あったに違いない。

なぜなら、先に触れたように、池の底は、その北辺で標高 117.5mを測り、中世のそれでも 118.5mであった。ところが、当初述べた如く、この池は、扇状地の埋め戻しとして、もともと低湿地であったことより、池の四隅が池底よりも最初から高かったのである。

すなわち、池の四周や 1 辺に大規模な堤防を築くまでもなく、扇状地状の済みが、池辺の岸を自然に形成していたといえる。ちなみに、先に述べた池底高と北側の高みとを比較してみると、大塚井や大井の外側平地の標高がおよそ 120m 前後あって、その比高差 2.5m を数えることになる。

池の形成は、北山・後光の丘陵先端を流下する久野部井を堰止めて、東から迫る扇状地との間の窪みに堤防を築くことのみで充分であったといえる。その堤防も十数m もあれば当初は充分な機能を持たし得たものと思われる。

このような恵まれた自然的地形をもちえたゆえに、この吉住池が早くに、容易に形成されたとみてよからう。

しかし、この吉住池形成の当初より大井、大塚井が存在したか否かは、今回の調査では検討出来なかった（池底に両井の痕跡がみうけられなかったことと、井そのものが県道下にあるのみか、現在も使用されているものであって、その底を掘削することは不可能である）。また、現在の両井の底部高は溝（SD-1）の底部よりはるかに高かった。

造池において、渠提とともに最も重要な作業は余水・洪水吐口と取水施設の構造である。

ここ吉住池では、現状から鳥居型引抜式の取水施設や、堤防の高低差から（低いところから）洪水を流し出す・吐口は見い出せなかった。恐らく吐口は、現在の伊野部井とみてよからう。

現況の伊野部井の構造は、堤防を堤頂部から池底まで幅およそ 1.50 m において隙縫を設け、この個所を取水口兼吐口としていることである。他方、大井と大塚井についても、ともに単なる吐口の形状となって取水口の用途も兼ねていた。

## 6. 取水施設再考

一般に池にみられる取水施設は、池底下に設けられ、樋管で堤外に導水されている。この取水方法は、造池史上の画期とされ、この技術開発こそ池を池たらしめたものとして高い評価が加えられている。すなわち、吐水口からのあふれる余水は、いざ養田水としての利用に供する時には用いることが不可能で、しかも、貯水された水を池底部まで利用し尽すには、この鳥居型引抜式取水施設が最大のものとされてきたのである。

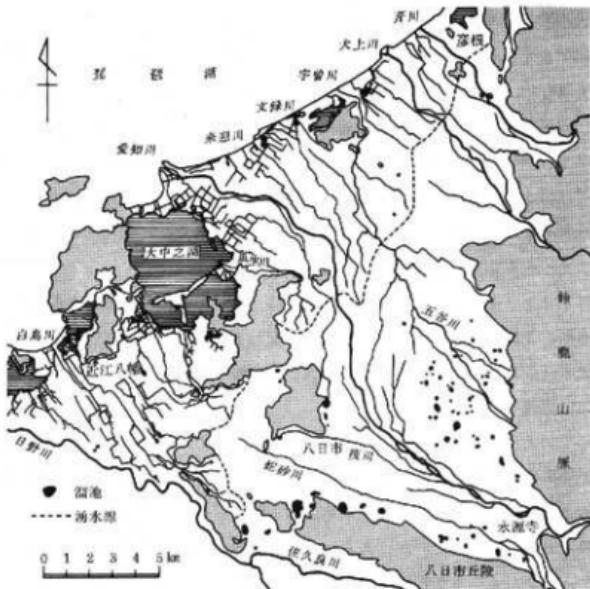
しかし、いま、この単純な伊野部井の構造をみる時、池底から堤外に樋管を設ける必要もないこの構造こそ、より原始的ではなかつたかと考えられる。

すなわち、堤の切れ目に土嚢を何枚も重ね、その余水は土嚢の最上段からオーバーフローしており、養水として使用するときはこの土嚢を一つ一つはずすことによって池水は池底部まで流

れることになる。しかもこの場合には流れ出る養水は、上層の暖いものから流れでることになり、鳥居型引抜式の場合よりより田養水としてふさわしかったと思われる。特に吉住池では、冷たい湧水がその水源であるため、水温を高めるための遊水池としても大きな役割を果たはずである。

ただ、このような吉住池の構造がより原始的であるからといって、古代まで開ってこのような構造であったことが明らかにされたわけではない。おそらく、鳥居型引抜式と「水閘」型式（吉住池の場合）は早くから共存し、池の立地や規模、築造技術者等によって各構造に差異が生じていたと思われる。特に「水閘」型式の場合には堤が大きくなればなるほどオーバフローする水の落差は大きくなり、堤の基部に与える被害は大きいものが予測されたであろうし、また、この「水閘」部への水圧が大きく感じられ、現にこの部分の堤が他に比して弱にならざるを得なかつたであろう。水圧を大きく受ける堤において、鳥居型引抜式取水口の出現は大きな機能を果たしたわけである。

なお、吉住池の最近については、地元史家大谷巖氏によると、石柱で設けた「水閘」部分の前には猿で作った土壠を積み重ね貯水したとのことで、下流へ水を流す時にはこの土壠をはずしていったという。また、オーバフローした水が落下する部分には「なめり石」が据えてあり、



挿図13 湖東平野の水系図(『八日市市史卷1』に依る)

地盤がえぐれないように配慮されている。なおまた、「水閘」部石柱の上部横石は、水準線をも示しており、土蔵をこれ以上上に重ねると瓦屋寺や日吉側（上流）の田地が冠水しあらむので、横石の上から水が余水として流れ落ちていたとのことである。

鳥居型引抜式取水口が後世、水閘式に変更されるとは考えにくことから（逆はあっても）吉住池は古代からこの型式で取水、余水の取扱いをしていたものと予想できないであろうか。

## 7. 吉住池水系の概観

吉住池の水系に関する最も興味ある事実は、その所在地が建部日吉町に属するにもかかわらず、下流の伊野部区長が管理者となっていることである。水が低きへ低きへとしか流れない以上、日吉町にとってこの池は無用の長物ともいえる。ただし、このような行政区画は比較的新しく、過去においては地域区分も異なっていたにちがいない。

なお、付言しておきたいことは、池の価値は、下流に流れる水以外にも存在することである。池は養魚場や漁場ともなるし、防災上の利用に供する場合もある。また、池内や堤防上の植生が池の所有者に何がしかの利益をもたらす場合もあるといえる。

吉住池の水系は、ごく大雑把にいえば、箕作山の東麓、五個荘町伊野部、木流を経て、和田山の西側、織山との境を抜けて、能登川町に至っている。この間琵琶湖に注ぐまでおよそ12kmは田養水や伏流水となりながら流下している。

しかし、銘記しておかなければならぬことは、愛知川左岸の全域を吉住池の水流がすべて潤したわけではない。1つは愛知川から引水された用水が、愛知川左岸沿いの田養水となっている。また、標高105mラインは、この愛知川扇状地のつくる伏流水の湧水線として知られており、このラインから下流では伏流水を集めた用水の起点が各所に水源池として存在している。

五個荘町では織山の懷である宮莊、金堂、七里の集落付近がそのラインにあたっている。しかし、この湧水もまた、吉住池の流水・伏流水と無縁ではなく、この105mラインからはじまる小河川はまさしく吉住池と不可分のものであったといえよう。

標高105mラインに起点をもつ五個荘町の流水は、やがて織山の山麓裾部を迂回し、能登川町伊庭に至るが、下流においては吉住池の水流と交わることはなかったといえる。

吉住池の流水は、能登川町内に至ってもなお、吉住池に源を発した貴重な田養水として認識されつけたに相違ない。

古代についていえば、本文中でも瓦の項で若干触れられているように、吉住池下流の白鳳寺院址中、五個荘町金堂、能登川町法堂寺の両者において、吉住池出土と同一文様の軒丸瓦の出土をみていることである。遠隔でも同一水系にある以上、同一の水源を共有するという強い意識が、寺院建立者に働いていたのか、あるいは、吉住池の小堂建立の契機も下流の支配者層と無縁ではなかったとみるべきか興味がもたれるところである。

特にこの箕作山東麓の瓦屋寺町には白鳳時代の瓦窯址が数基存在するにもかかわらず、この

瓦屋寺瓦窯で焼成した瓦を用いることなく、吉住池の一角（北端）に小堂を建立していることに注目されるのである（瓦屋寺瓦窯では、将来ともこの吉住池出土と同一文様の軒丸瓦が出土しないとは断言しがたいが、すでに出土した平瓦や丸瓦においても瓦屋寺瓦窯のそれとは若干異質なようにも思われる）。

#### 8. むすびにかえて

吉住池の調査は、一部を除いてほぼ池床の全域を観察することができたが、伊野部井に近い、池床の北端寄りで、多量とはいえないまでもコンテナ3箱分に相当する瓦片が検出された。この出土状況からみるかぎり、この池の一角が隣接地に小堂が建立されていた可能性は大きい。池と寺院との関連は新しい今後の課題といえる。また、このような造池がどのような人々の力によって果されたのか、それによって生れた田地はどのように扱われたのか究明しなければならない問題は多いが、すでに紙数も尽きた。

池の改修やその消滅は今日至るところでみうけられるが、その調査例は本当に少ない。池に対する理解が低いことに起因しているといえる。しかし、本例が示すように、大小を問わず池や沼を水系のなかで記録化する必要性は今をおいて再び行うことは不可能といえよう。

（丸山竜平）

# 図 版



吉住池全景（東から）



吉住池全景（南東から）



吉住池第2・3次調査前（北から）



吉住池第2・3次調査前 上方は第1次調査区の工事完了後（東から）



吉住池第1次調査後近景（南から）



吉住池第1次調査後近景（北から）



吉住池全景（南から）



吉住池全景（西から）



第1トレンチ水路2南部分（南から）



第1トレンチ水路2南部分（北から）



第7トレンチ水路2（南から）



第7トレンチ水路2（南から）



第8トレンチ（北から）



第8トレンチ（南から）



湧水土塙II（西から）



湧水土塙II（西から）



湧水土塙II（北から）



湧水土塙II（東から）



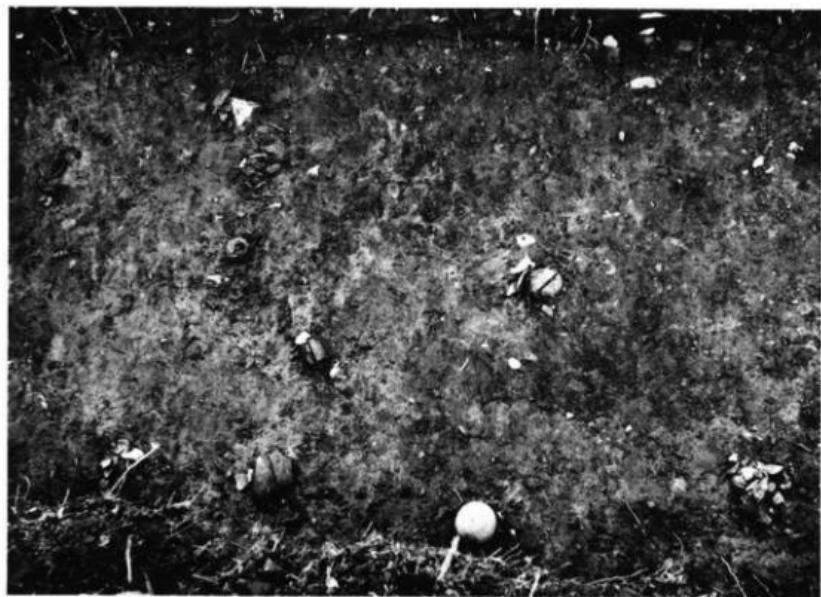
湧水土塙 I (西から)



湧水土塙 I (南から)



第4 トレンチ池床起伏状況（南から）



水路2 遺物出土状況（南から）



完掘後全景（西から）



完掘後近景（北から）



完掘後近景（南から）



完掘後近景（南東から）



敷石遺構全景（南から）



敷石遺構近景（南から）



散石遺構近景（北から）



散石遺構近景（南から）



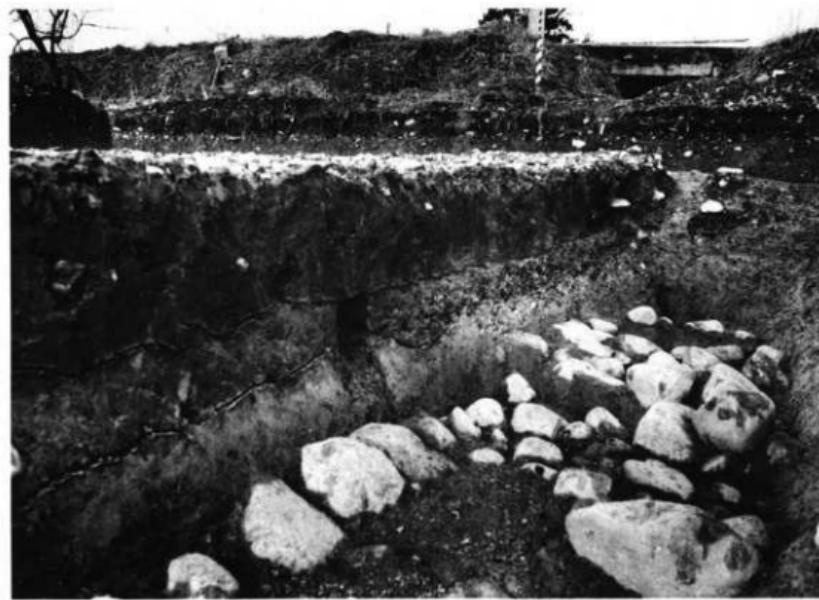
第1トレンチSD-1(南から)



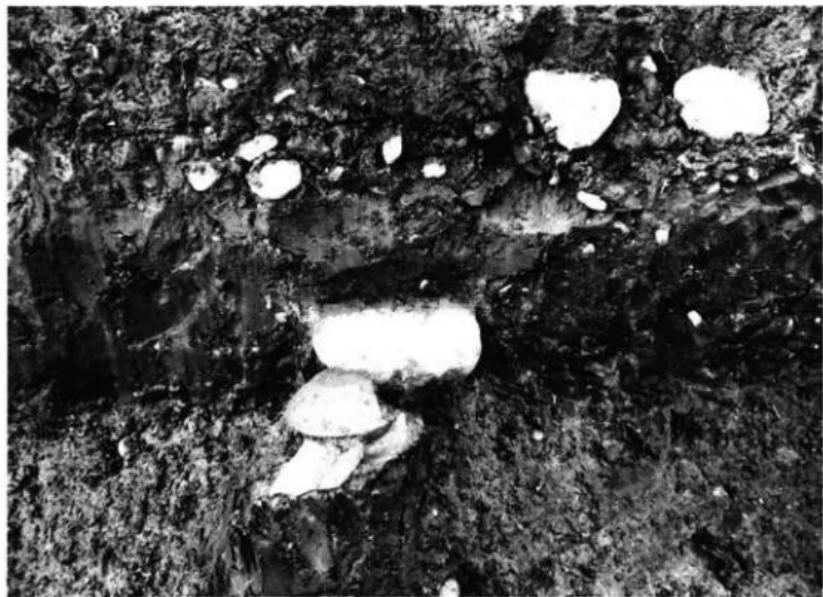
第1トレンチSD-1(北から)



第2トレンチSD-1(南東から)



第2トレンチSD-1(南西から)



第2トレンチSD-1遺物出土状況（南から）



第2トレンチSD-1遺物出土状況（南東から）



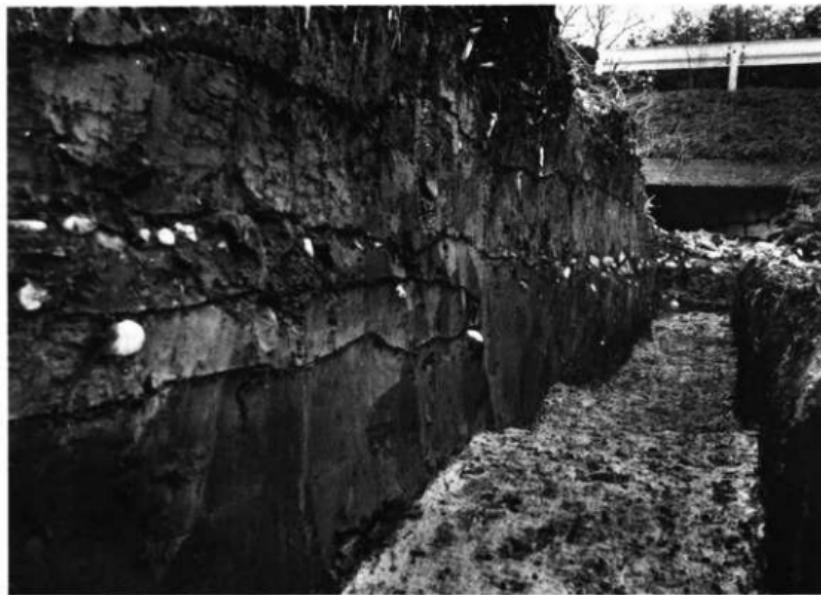
第3トレンチ（東から）



第3トレンチ（西から）



第3トレンチ（東から）



第3トレンチ大井（西から）



第3トレンチ大井（西から）



第3トレンチ軒丸瓦出土状況（南東から）



第4トレンチ石垣（南から）



第4トレンチ石垣、敷石遺構（北から）



第4 トレンチ石垣（南西から）



第4 トレンチ石垣断面状況（南東から）



第5 トレンチ弁天塚（東から）



第5 トレンチ弁天塚（西から）



第5-1 トレンチ（東から）



第5-1 トレンチ（西から）



第5-1トレンチ（東から）



第5-1トレンチ（西から）



第5-1 トレンチ断面状況（西から）



第5-1 トレンチ断面状況・弁天塚（北から）



第5-2トレンチ（西から）



第5-2トレンチ（東から）



第5-2 トレンチ断面状況（西から）



第5-2 トレンチ断面状況（東から）



第6 トレンチ石垣、敷石遺構（西から）



第6 トレンチ敷石遺構（東から）



第7トレンチSD-2(西から)



第7トレンチSD-2(南から)



第7トレンチSD-2(北西から)



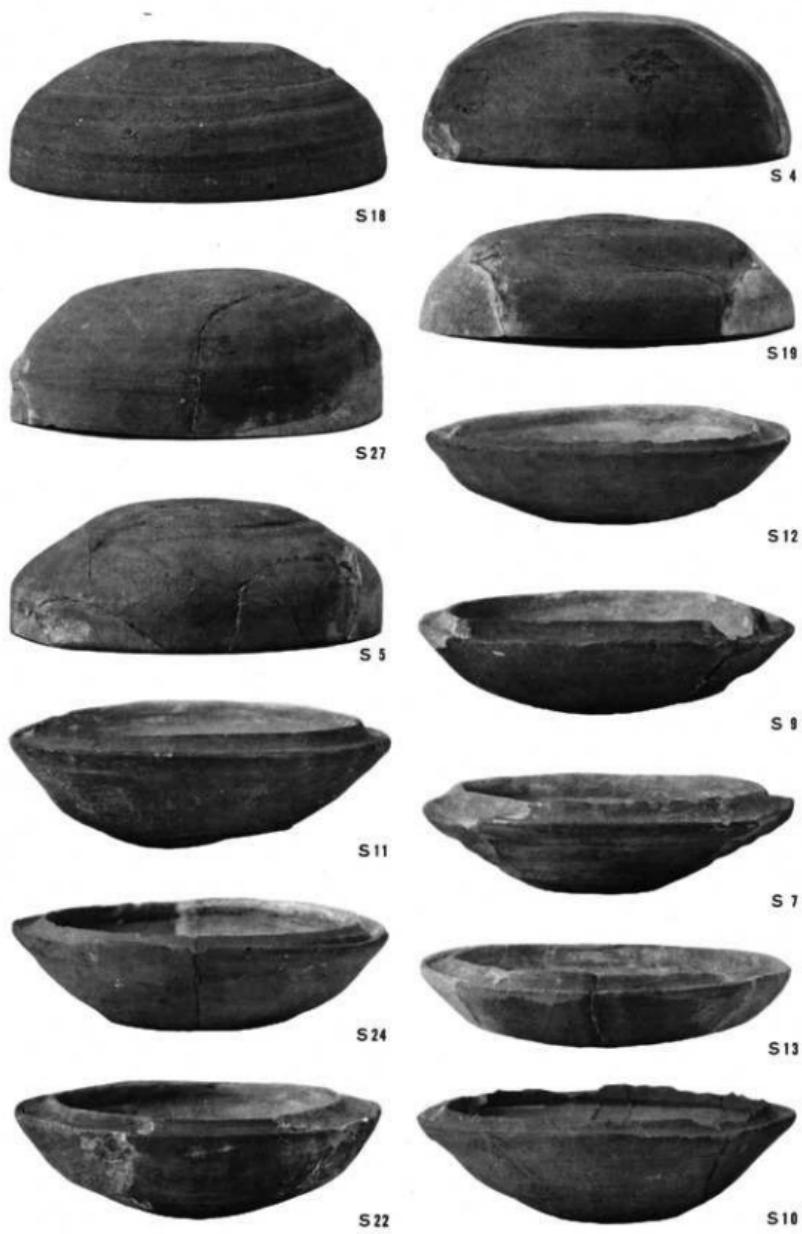
第7トレンチSD-2(南西から)



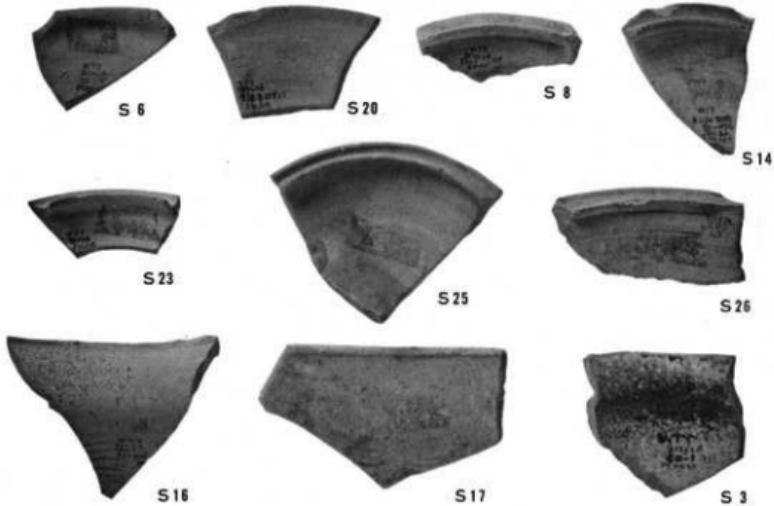
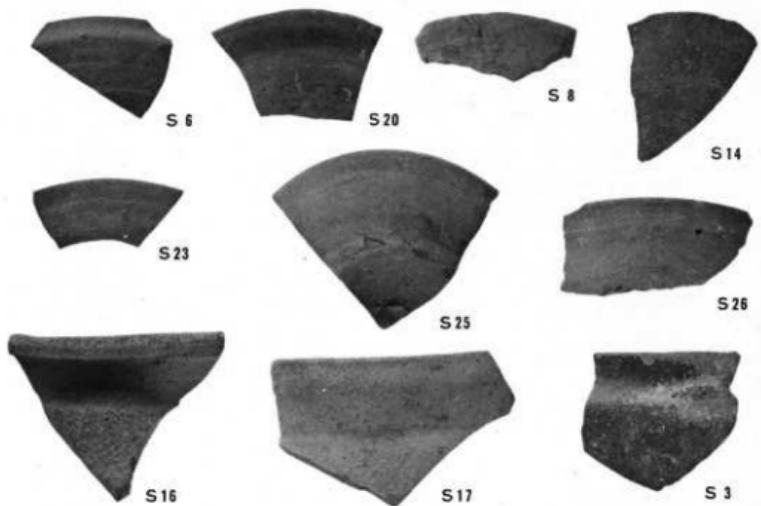
第8トレンチ（北から）



第8トレンチ（南から）



図版三五 遺物 第一次調査





S 21



S 2



S 15



S 1



H 2



H 6

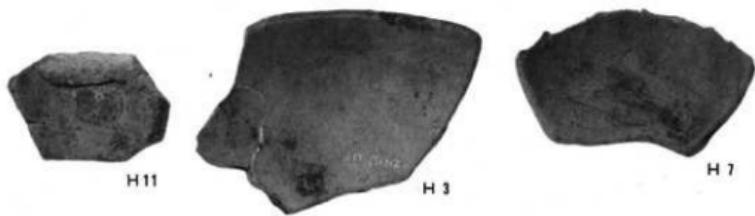
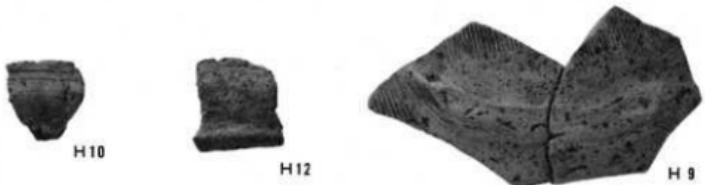


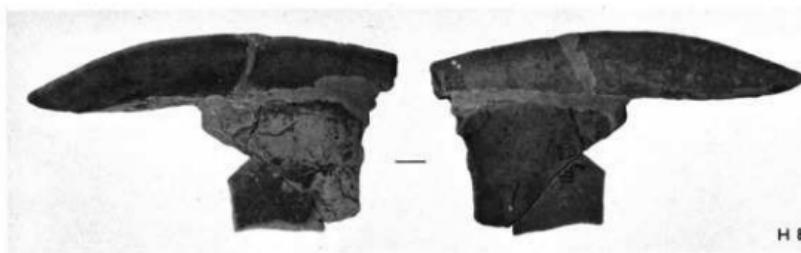
H 5



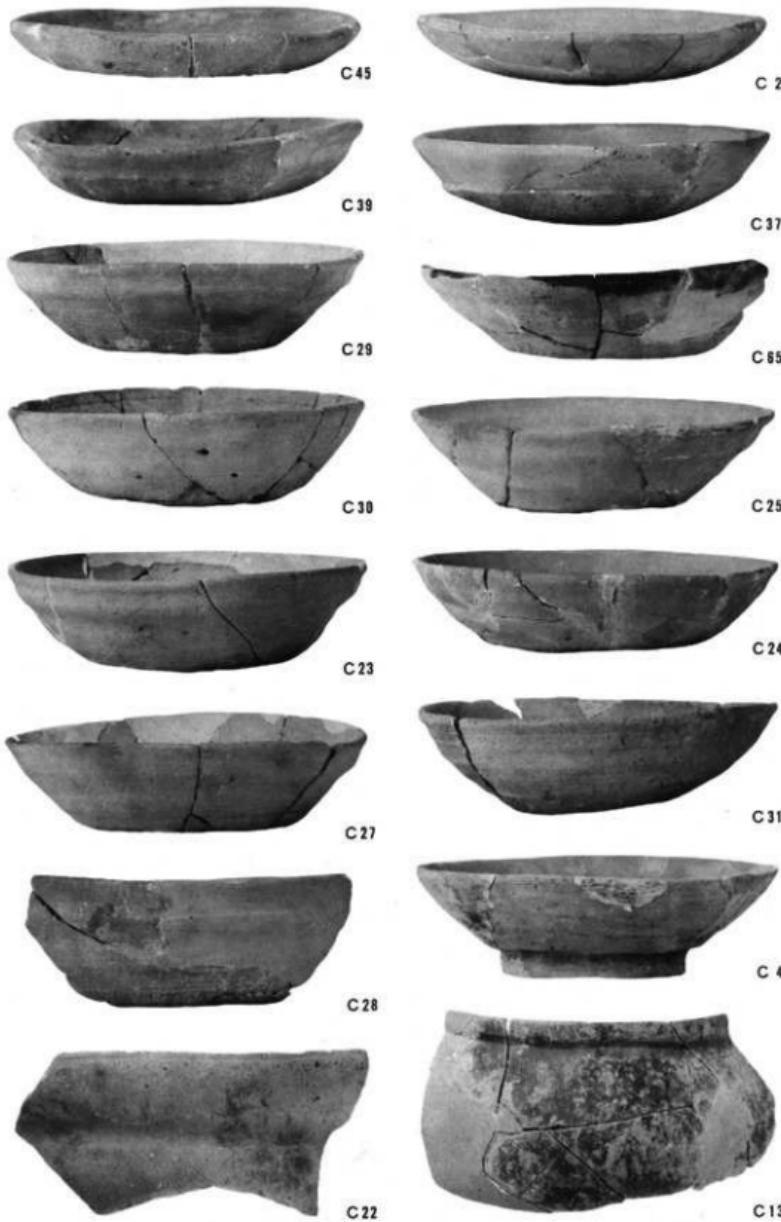
H 16

圖版三七 遺物 第一次調查





図版三九 遺物 第二・三次調査







A 20



A 21



A 19



C 16



C 17



C 18



A 20



A 21



A 19



C 16

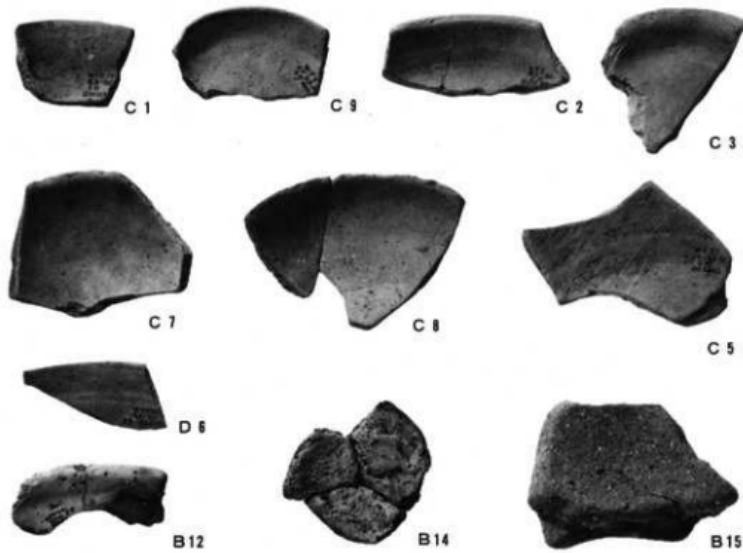
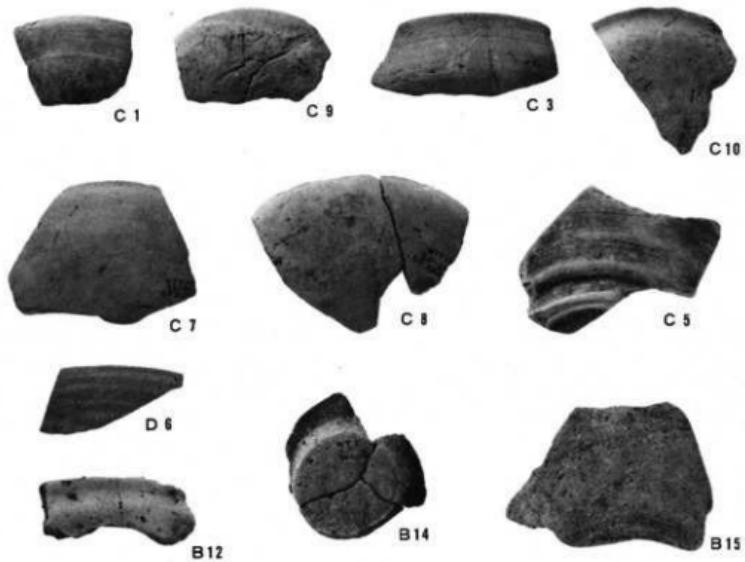


C 17

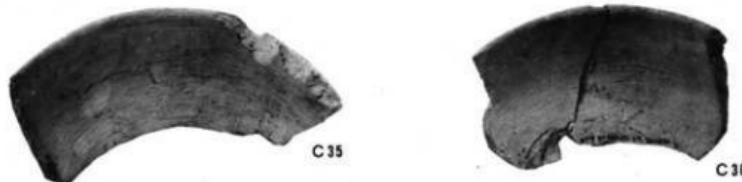
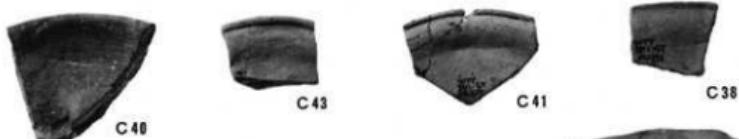
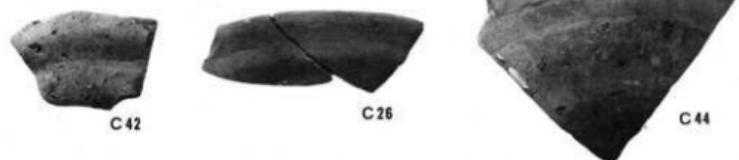
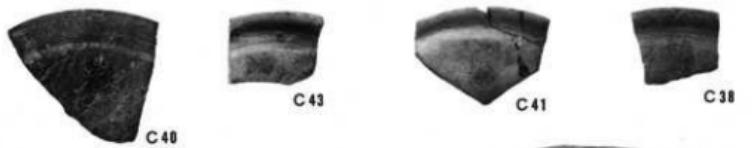


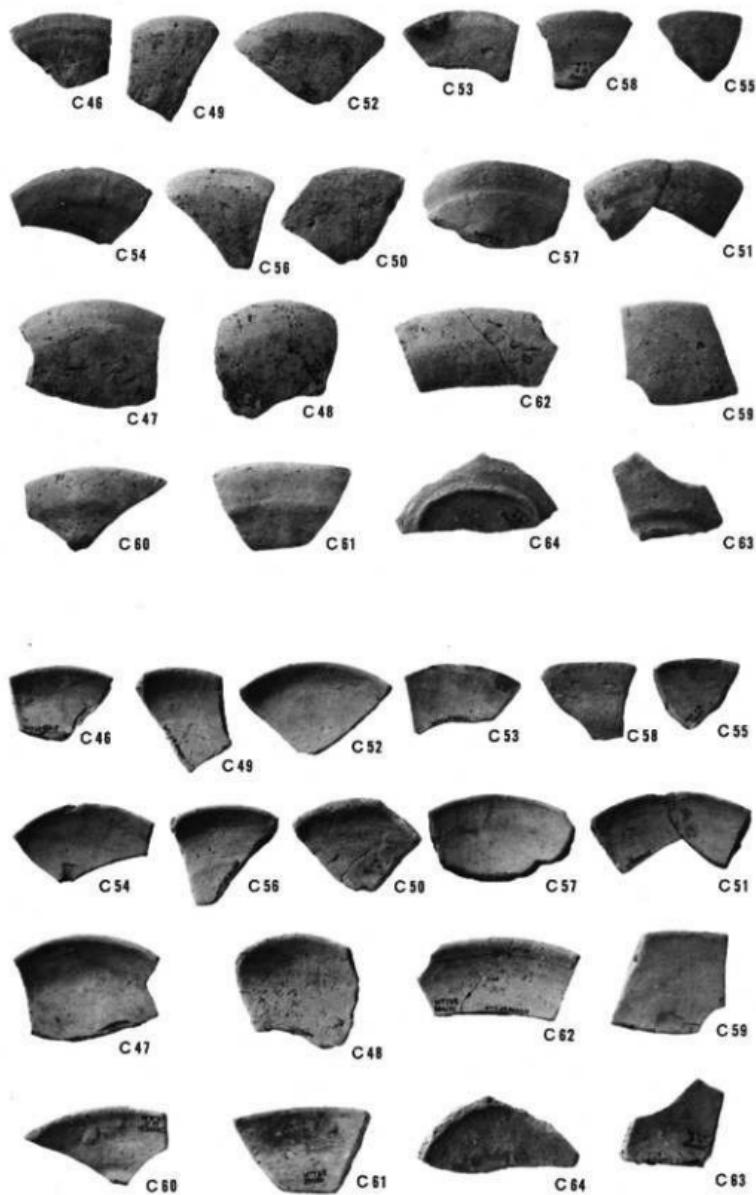
C 18

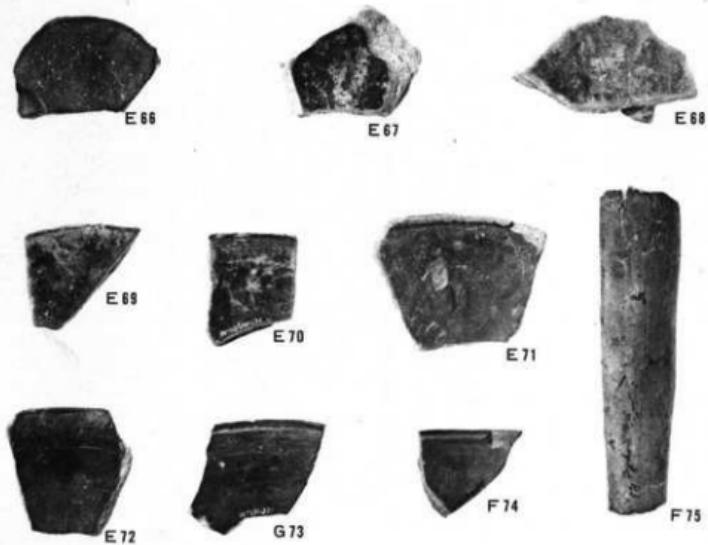
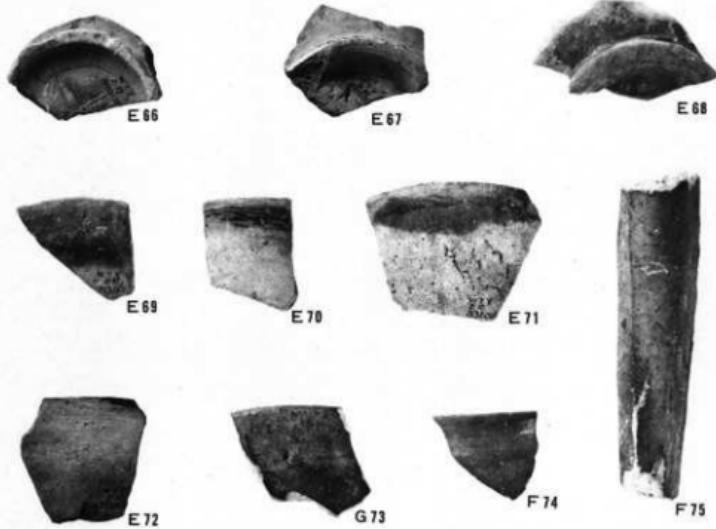
図版四二 造物 第一・三次調査



図版四三 遺物 第一・三次調査









T 2



T 3



T 5



T 6



T 7



T 8



T 2



T 3



T 5



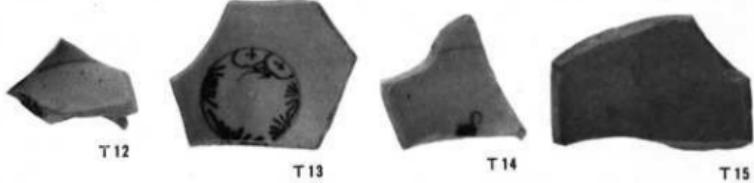
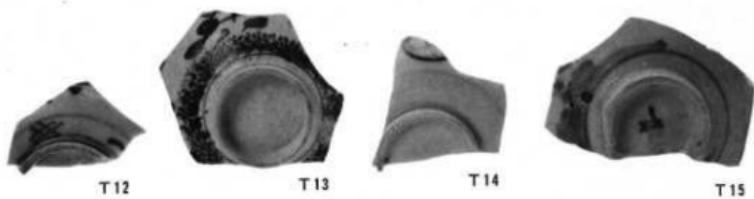
T 6

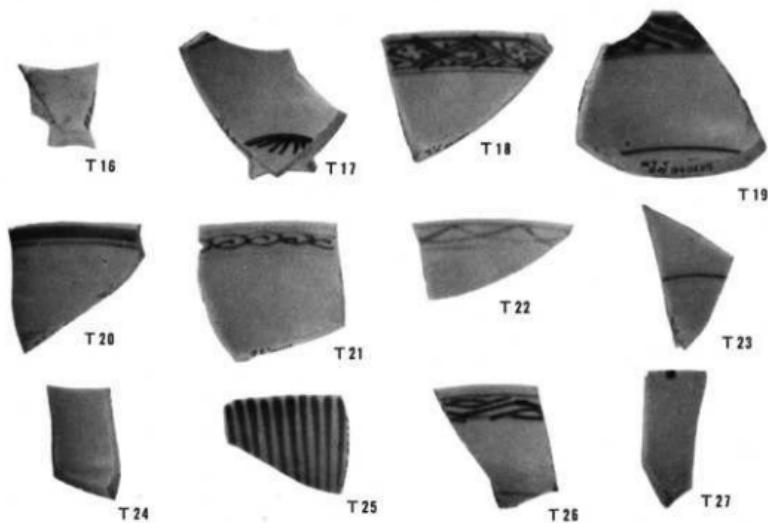
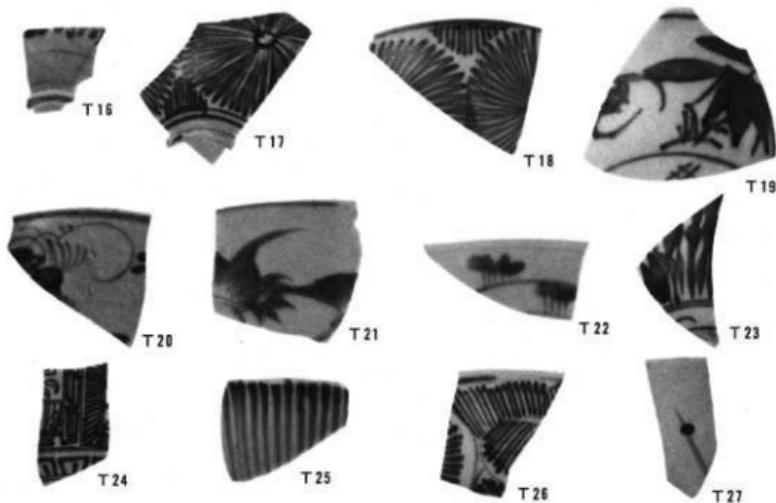


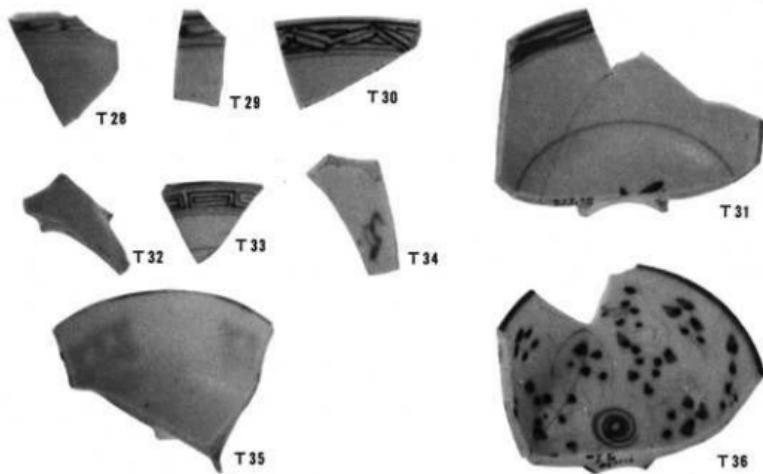
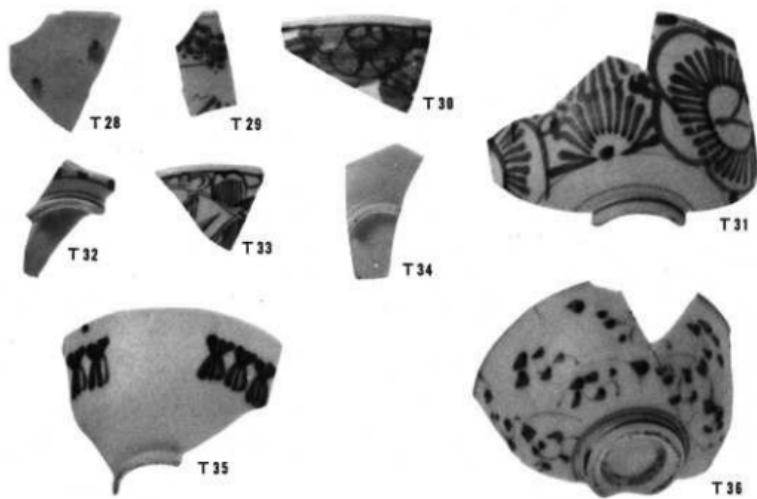
T 7

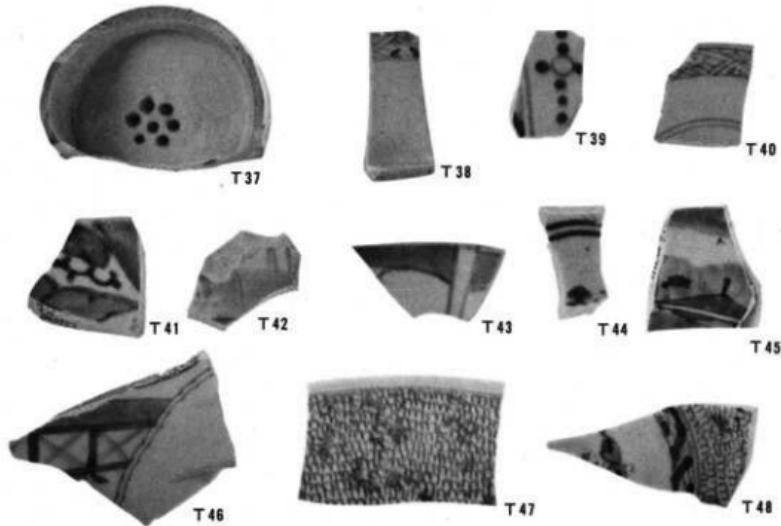
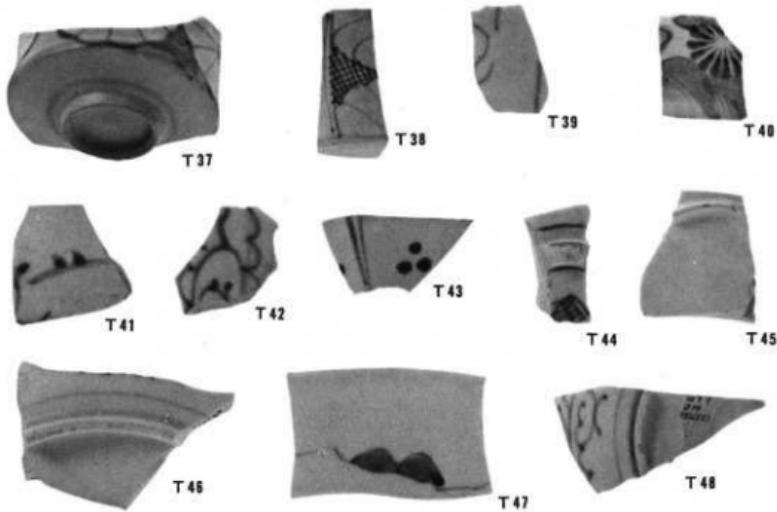


T 8

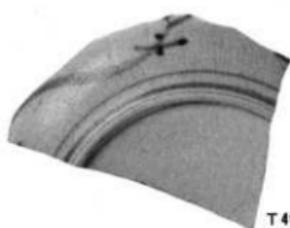








圖版五一 遺物 第一・三次調查



T 49



T 50



T 52



T 51



T 53



T 49



T 50



T 51

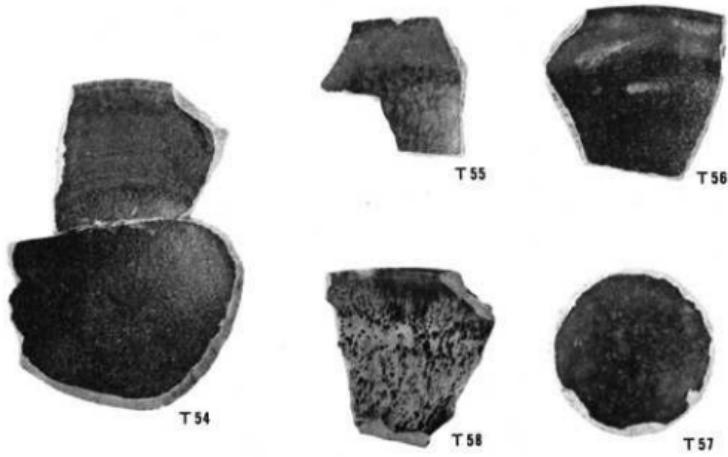
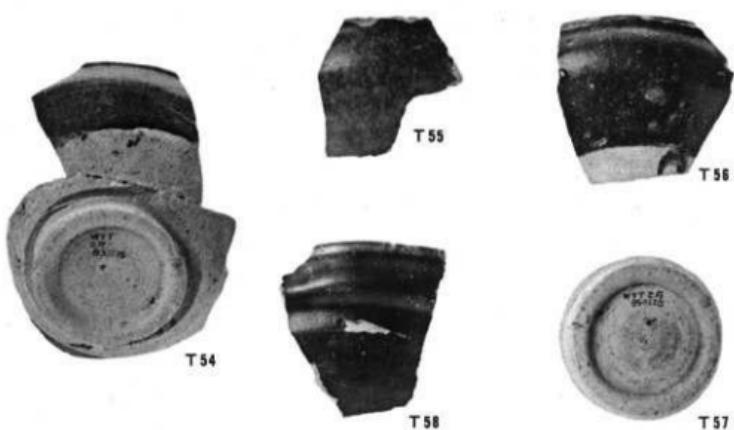


T 52

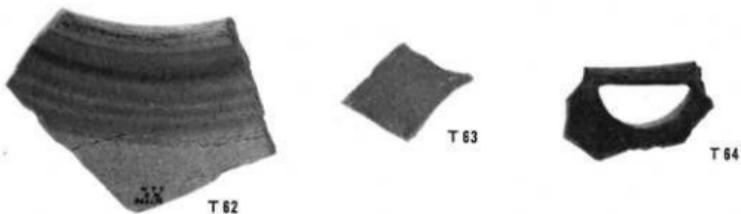
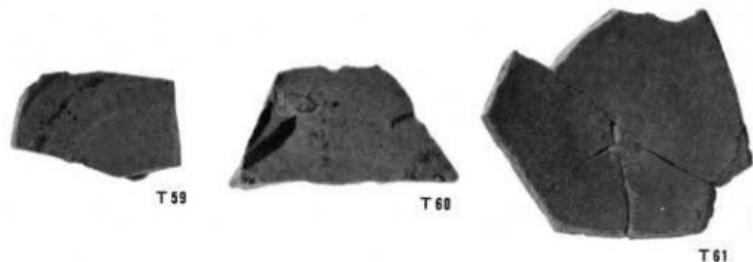
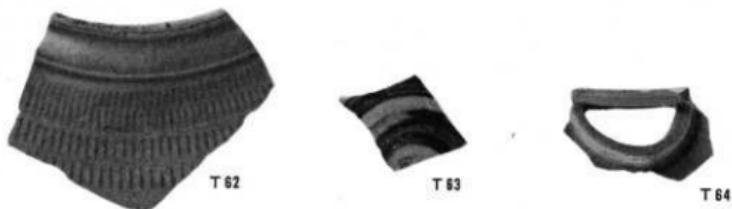
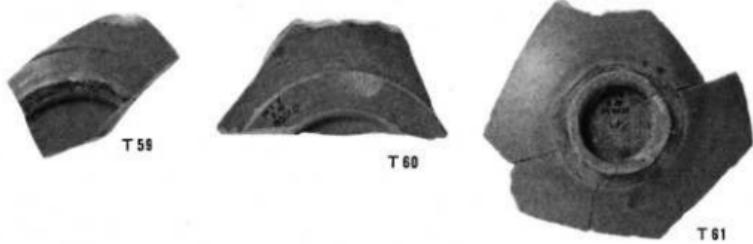


T 53

圖版五二 遺物 第一·三次調查



圖版五三 遺物 第二・三次調査





T 65



T 66



T 67



T 68



T 69



T 70



T 71



T 65



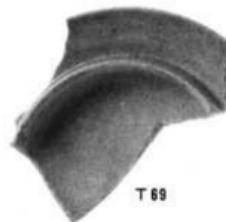
T 66



T 67



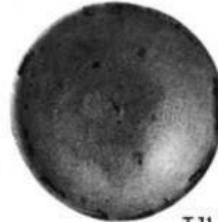
T 68



T 69



T 70



T 71

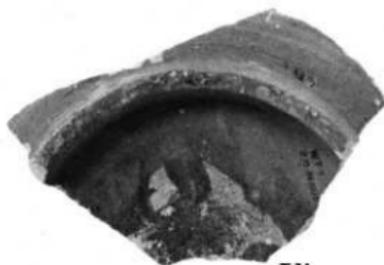
圖版五五 遺物 第二・三次調查



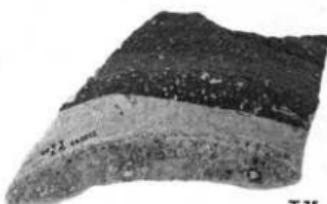
T 72



T 73



T 74



T 75



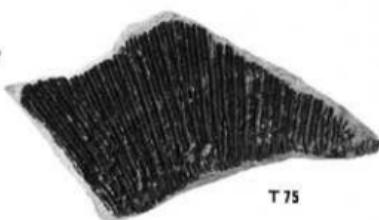
T 72



T 73



T 74



T 75



T 76



T 78



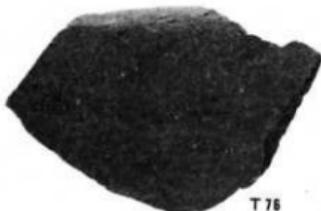
T 79



T 80



T 77



T 76



T 78



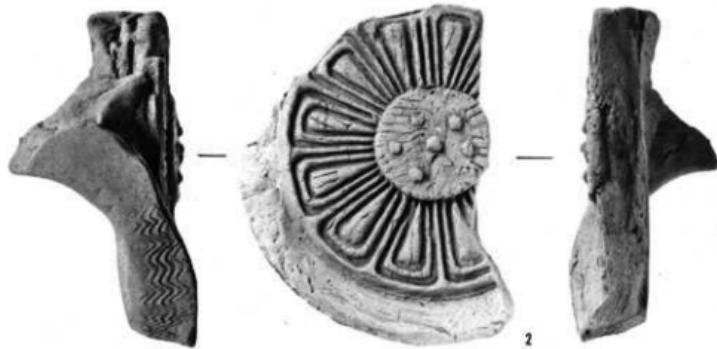
T 79



T 80



T 77

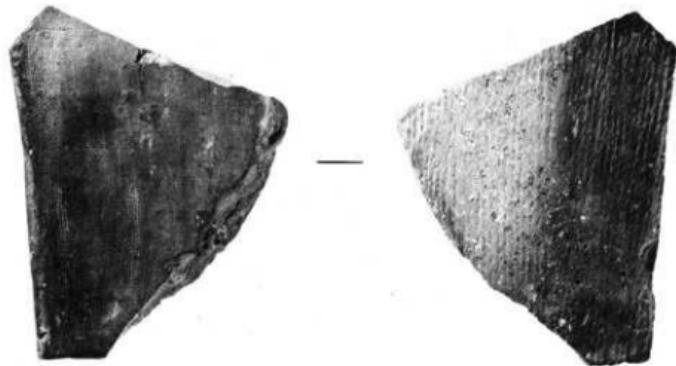


2



57

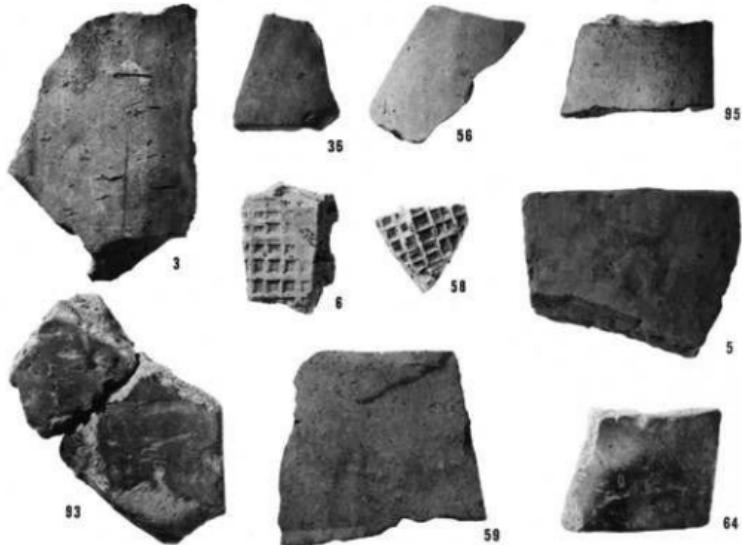
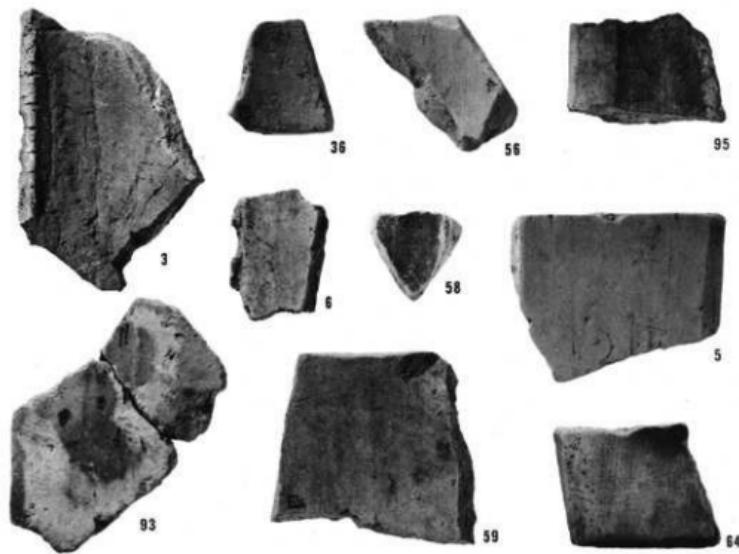
2



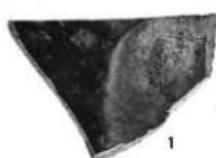
32

2 軒丸瓦、57軒平瓦、32隅平瓦

圖版五八 遺物 第二・三次調查



図版五九 遺物 第二・三次調査



1



15



45



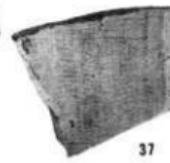
14



46



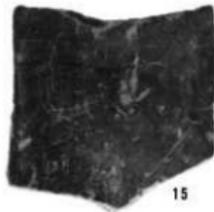
48



37



1



15



45



14



46



48



37

圖版六〇 遺物 第二・三次調查



70



83



68



66



73



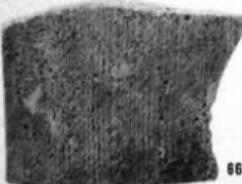
70



83



68



66



73

圖版六一 遺物 第二・三次調查



79



96



87



79



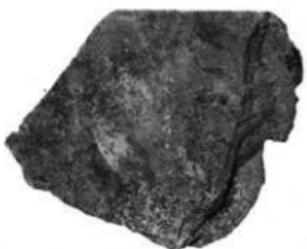
87



96

圖版六二 遺物 第一、二次調查





1



1



2



3



2

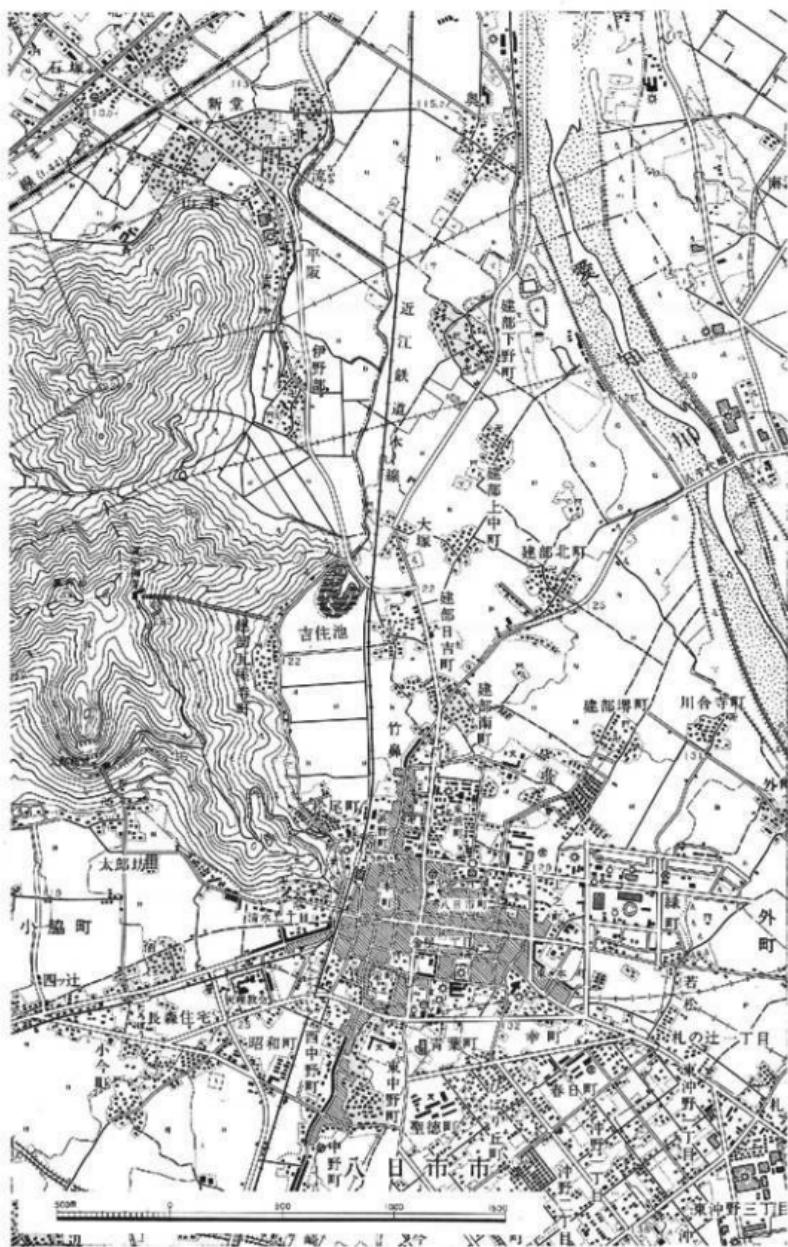


3

図版六四 位置図



図版六五 位置図

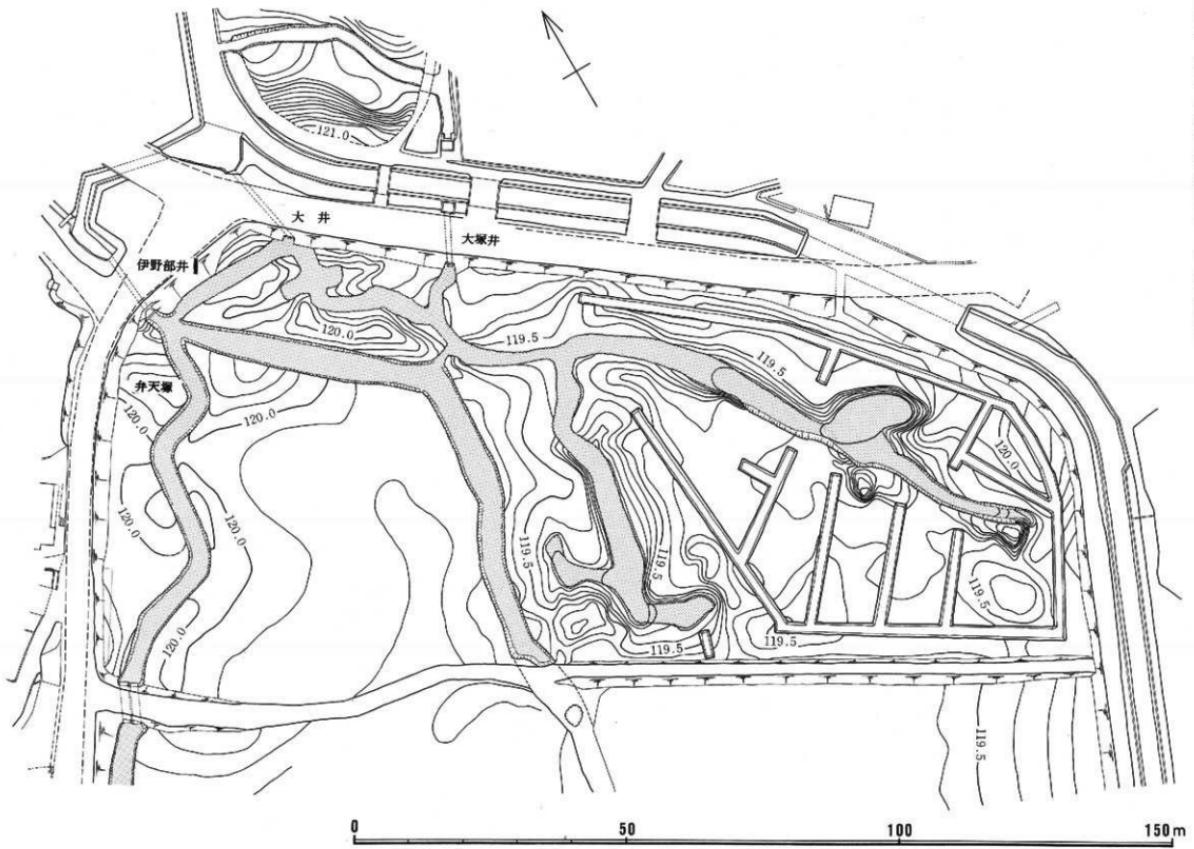


図版六六 第一次調査前地形図・トレンチ配置図



第1次調査前地形図・トレンチ配置図

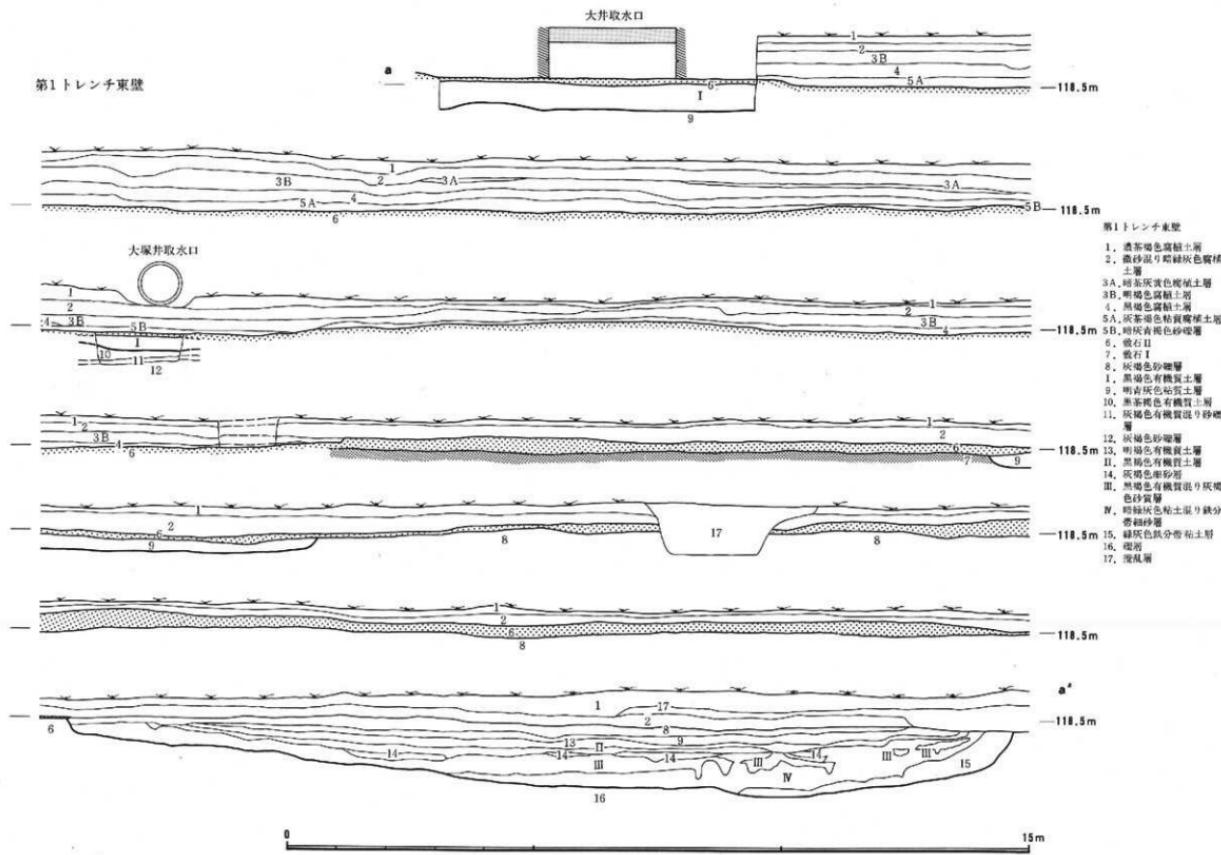
図版六七 第二・三次調査前地形図・トレンチ配置図

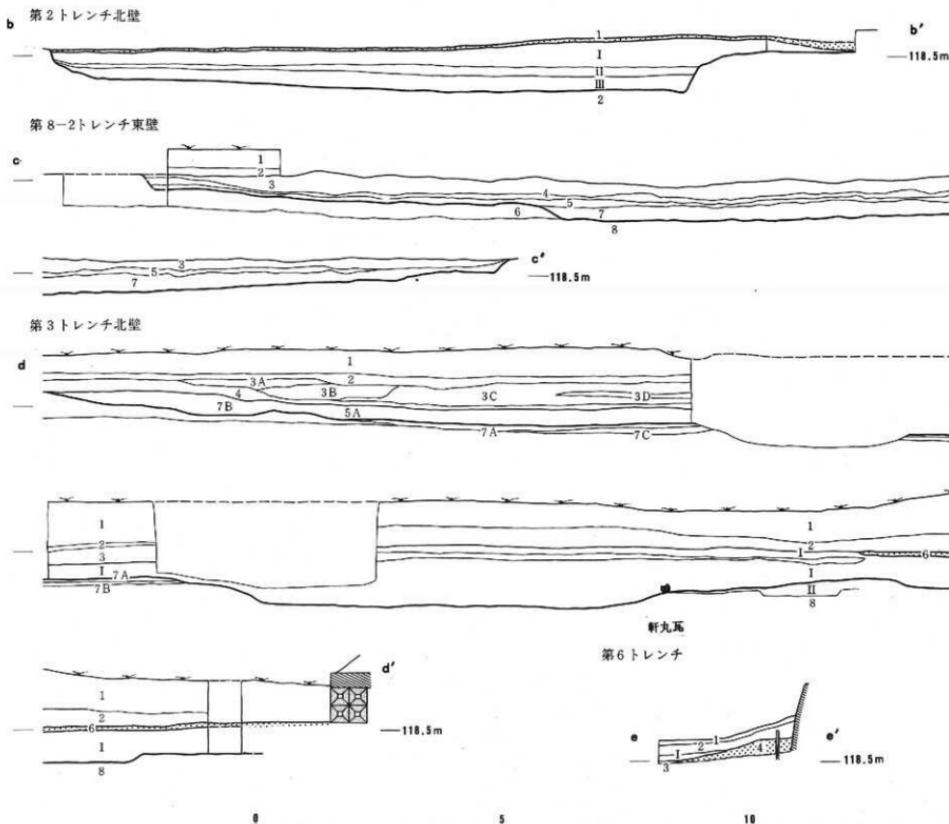


第2、3次調査前地形図・トレンチ配置図



第2、3次調査後地形図・トレンチ配置図・遺構図





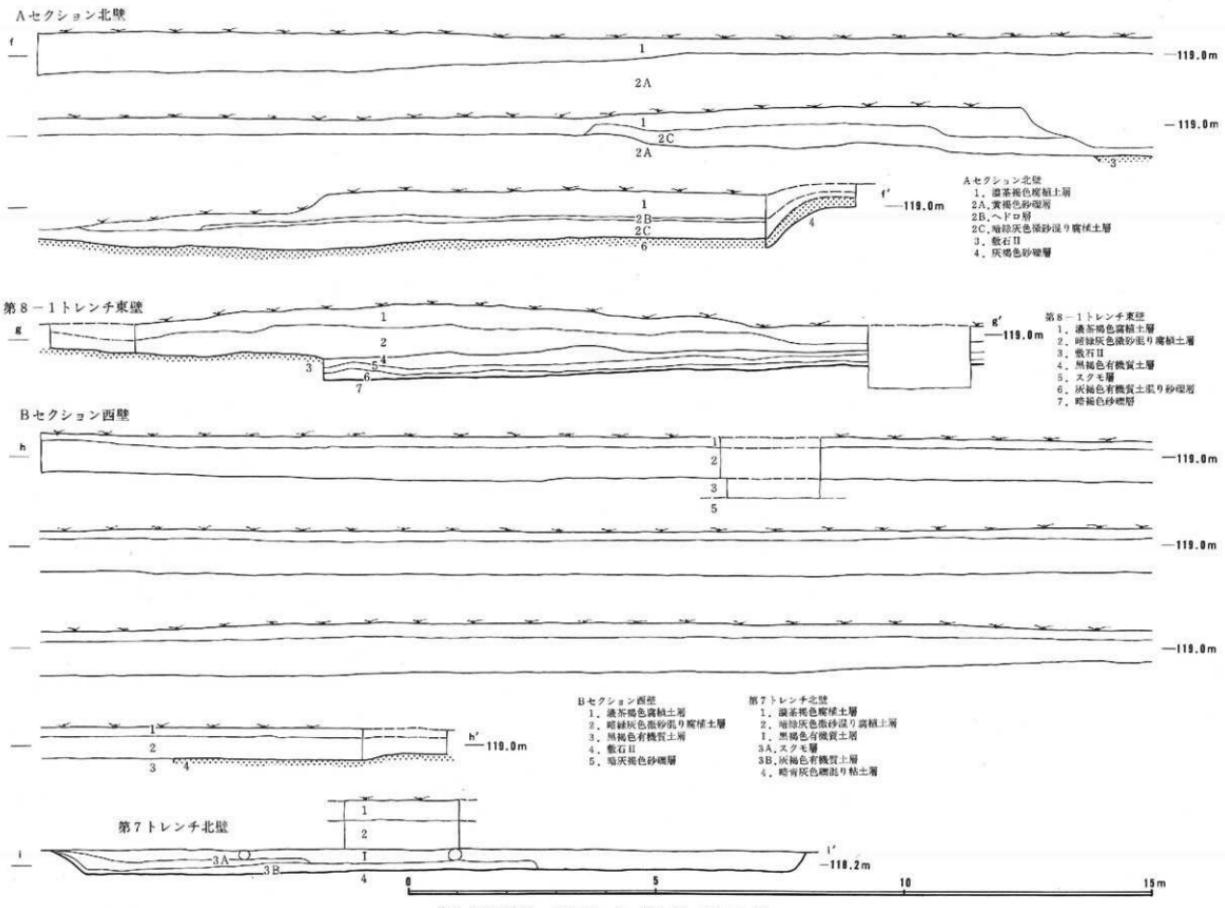
第2トレンチ  
I. 教石Ⅱ  
I. 黒褐色有機質土層  
II. 灰褐色有機質混り砂礫層  
III. 雲青褐色砂礫層  
2. 灰褐色砂礫層

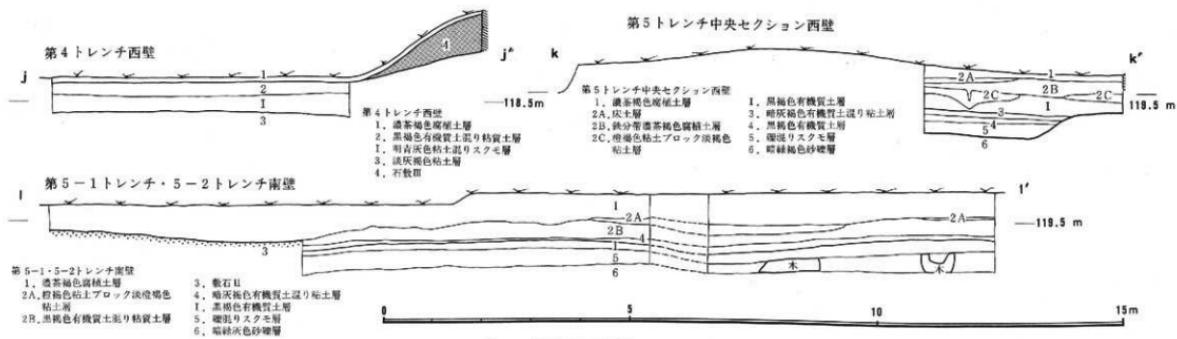
第3-2トレンチ東壁  
1. 露青褐色泥炭土層  
2. 布綠褐色散砂混り粘土層  
3. 黑褐色有機質土層  
4. スタノ層  
5. 灰褐色有機質混り砂礫層  
6. 時褐色砂礫層  
7. 雲青褐色粘土層  
8. 布綠褐色粗砂層

第3トレンチ北壁  
1. 露茶褐色腐植土層  
2. 布綠褐色腐植土層  
3A. 黄褐色粗砂層  
3B. 黄褐色有機質土層  
4. 灰褐色有機質土混り粘土層  
5. 教石Ⅱ  
6. 灰色粘土層  
7A. 灰褐色粗砂層  
7B. 灰褐色泥炭土層  
7C. 灰褐色粗砂層  
I. 黑褐色有機質土層  
II. 灰褐色有機質土層  
III. 雲青褐色砂礫層  
IV. 灰綠褐色砂礫層

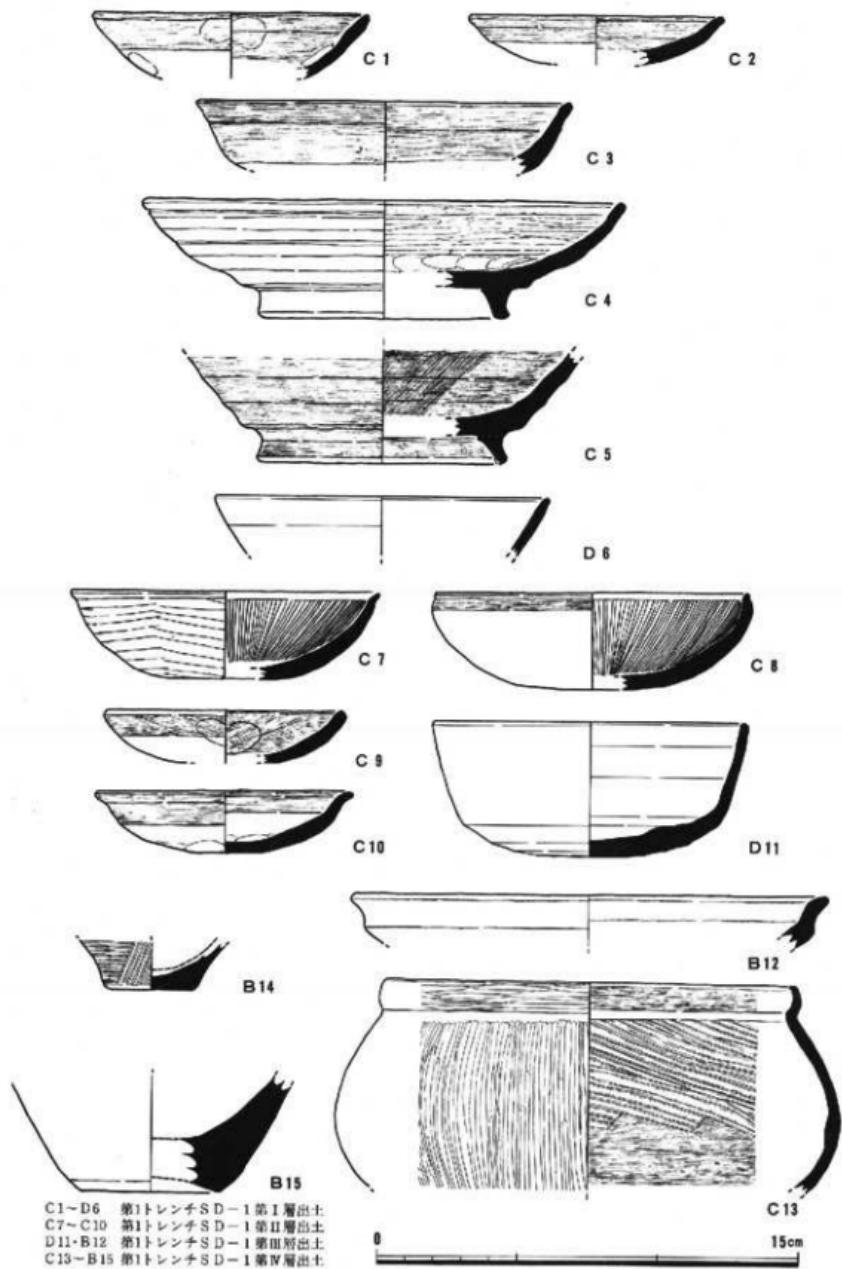
第6トレンチ北壁  
1. 露茶褐色腐植土層  
2. 布綠褐色散砂混り粘土層  
3. 黑褐色有機質土層  
4. 教石Ⅱ

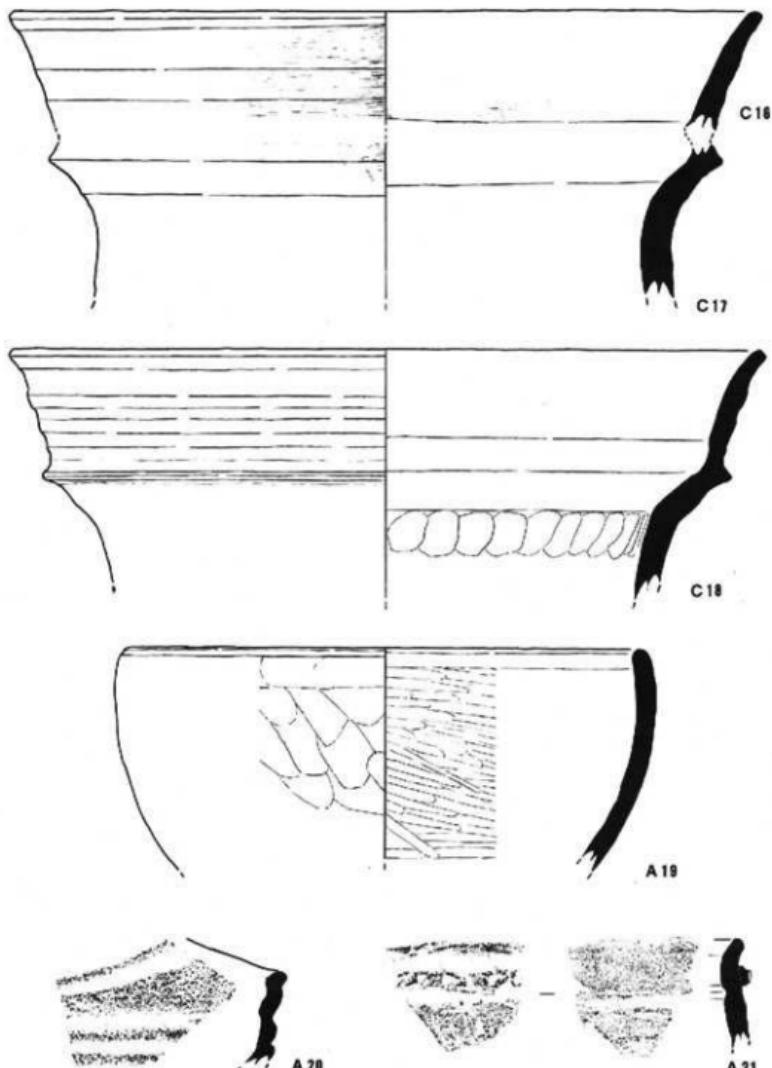
第2、3次調査断面図（第2、3、8-2トレンチ）





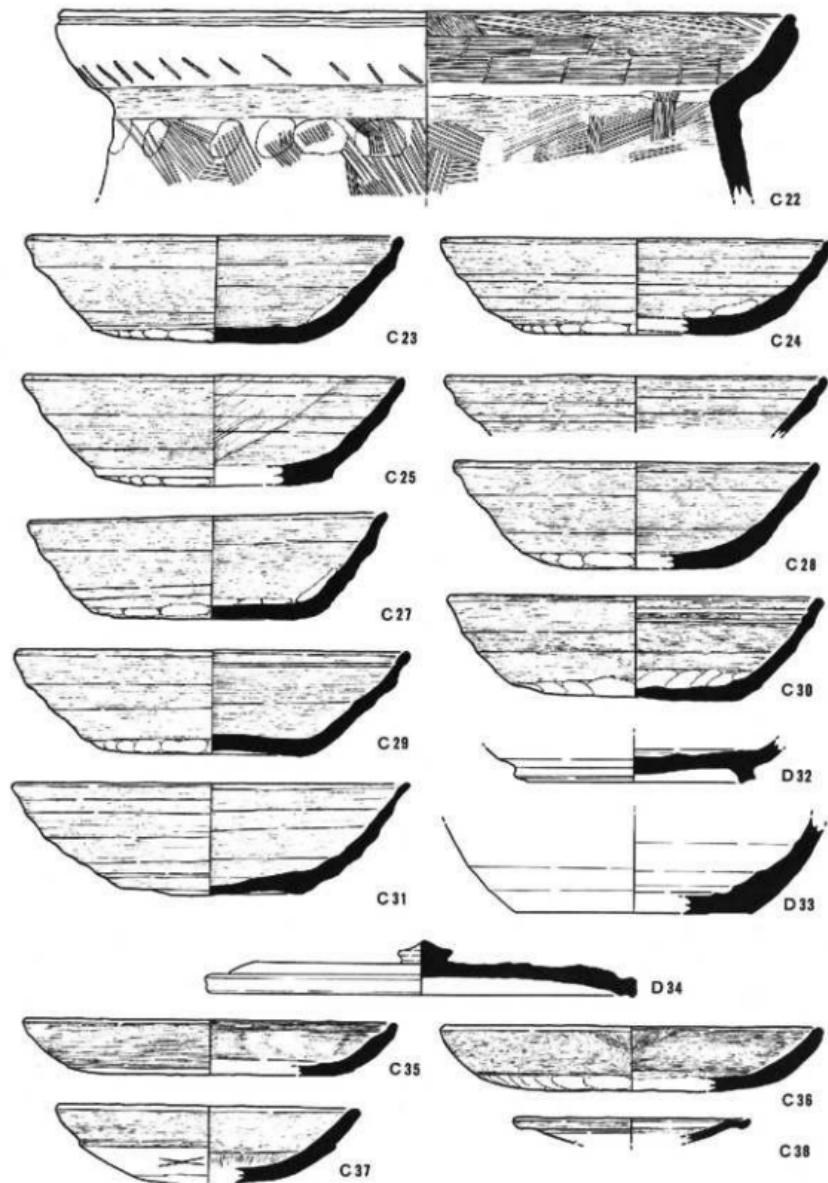
図版七三 第二・三次調査 弥生式土器、土師器、須恵器





C16~A21 第1トレンチSD-1第1層出土

0 15cm

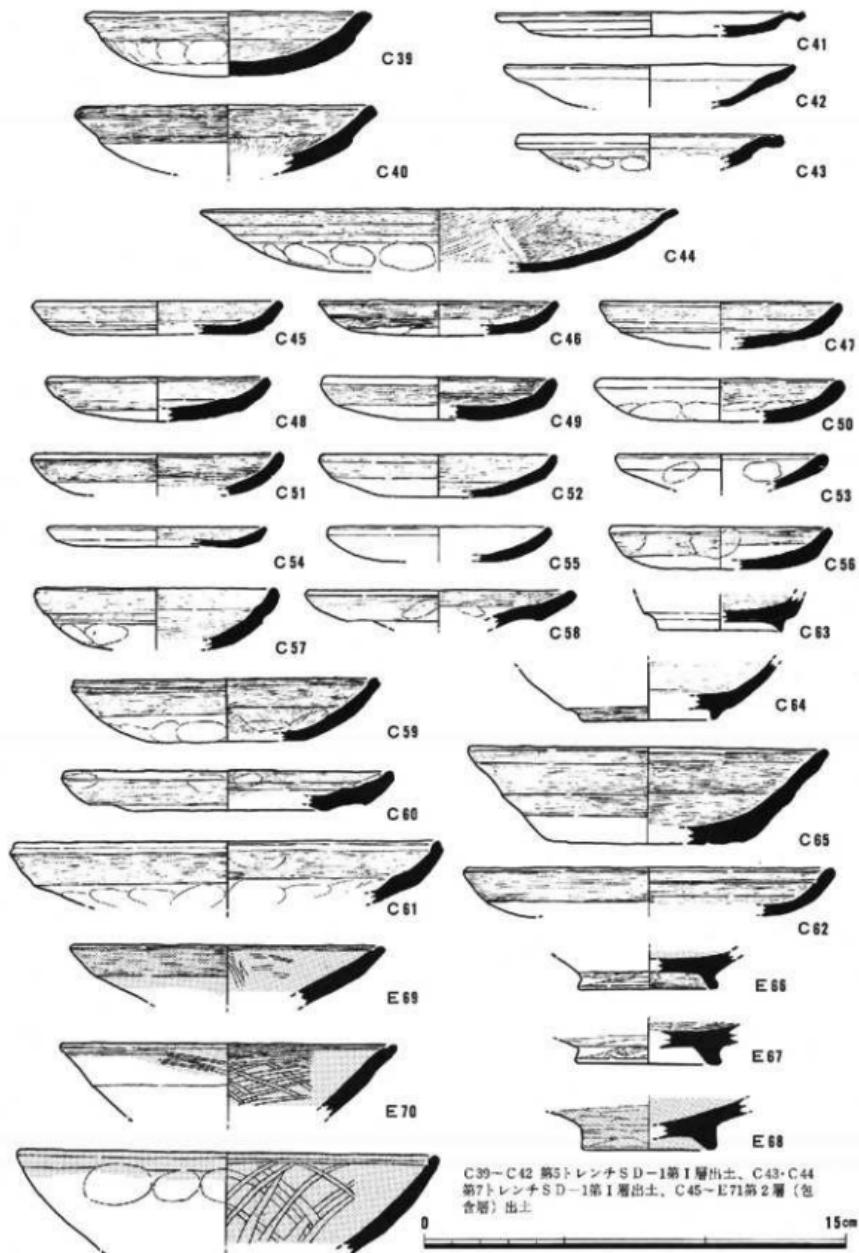


C22-D33 第2トレンチ SD-1 第I層出土

D34 第2トレンチ SD-1 第II層出土

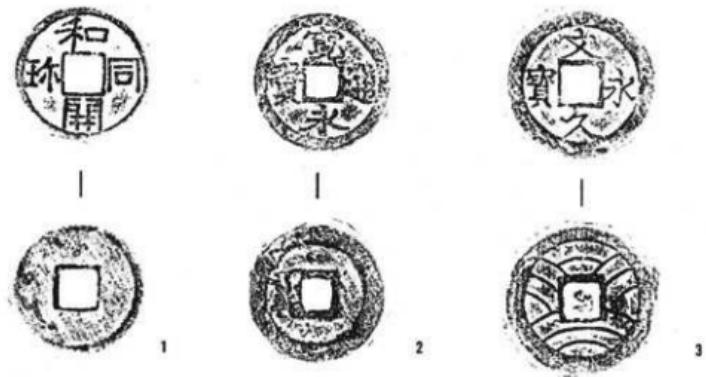
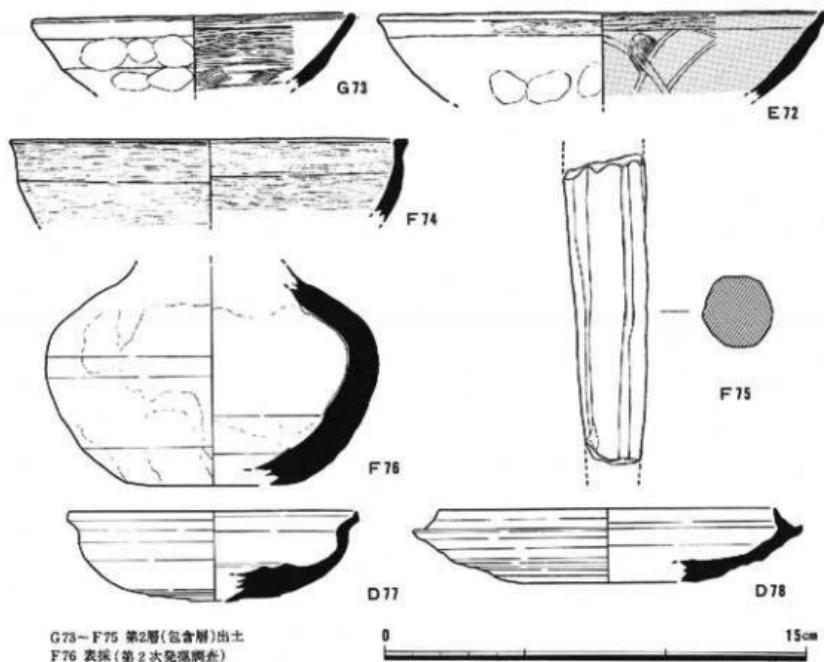
C35-C36 第3トレンチ SD-1 第I層出土

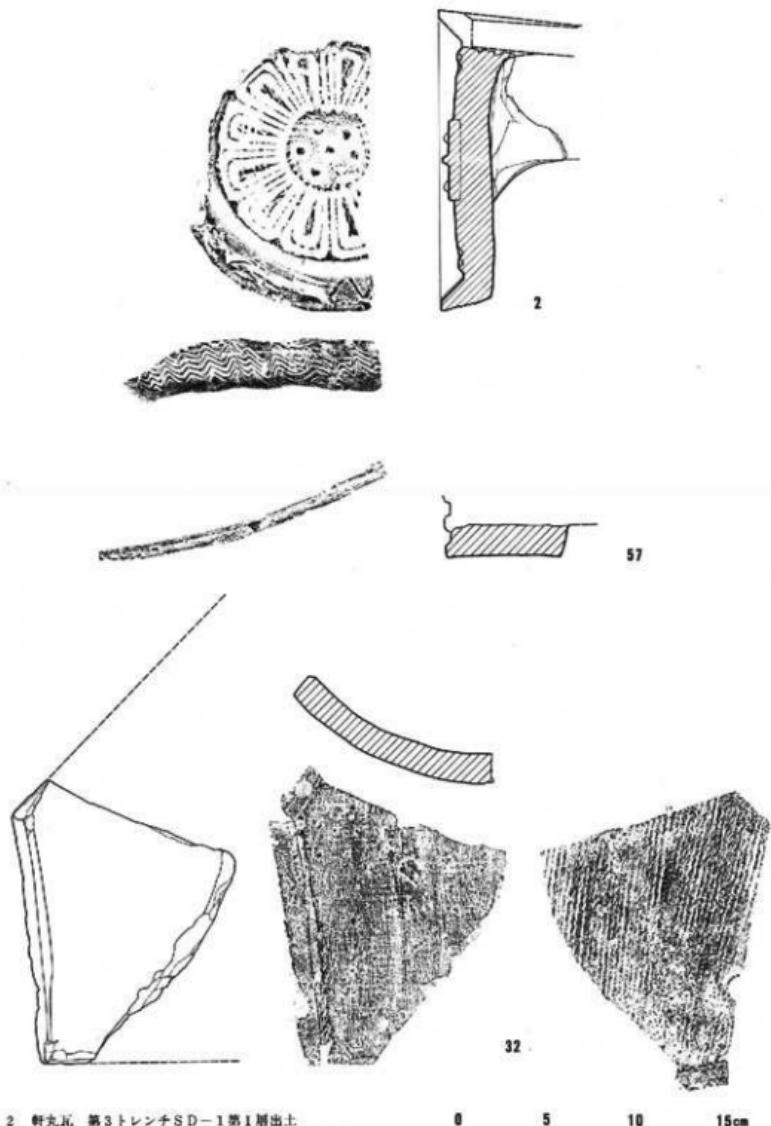
C37-38 第4トレンチ SD-1 第I層出土



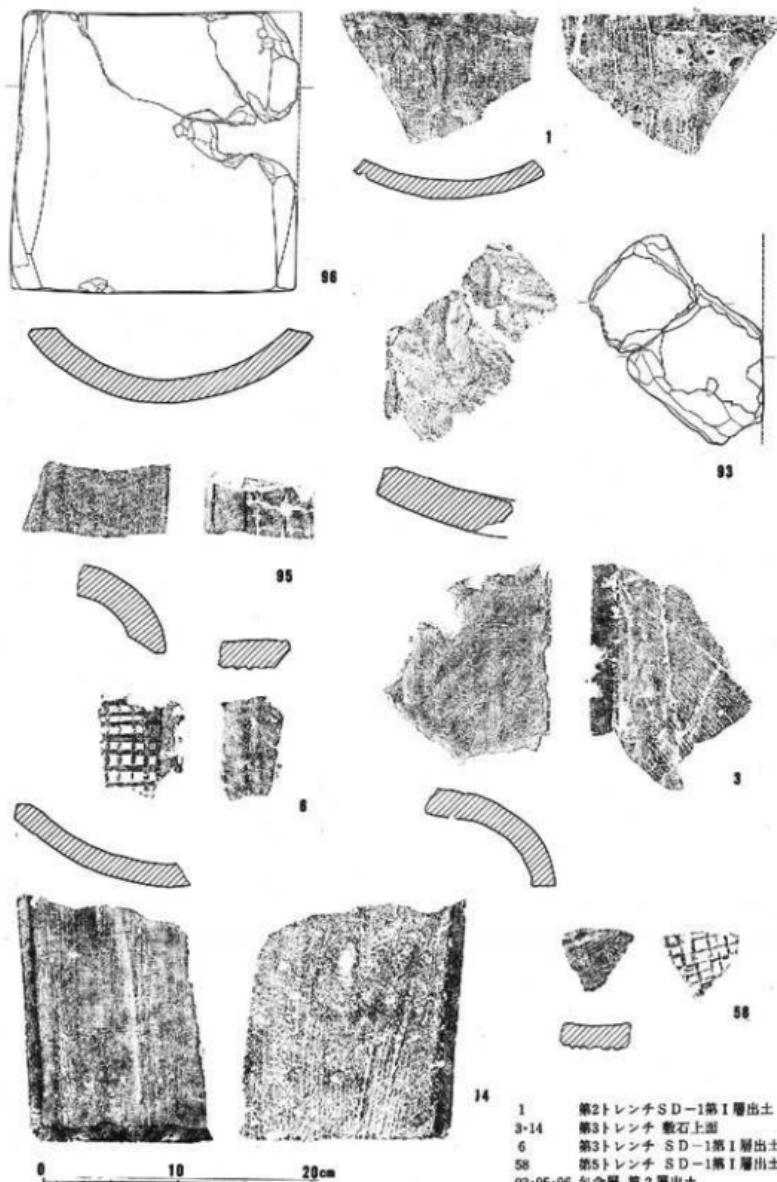
C39～C42 第5トレンチSD-1第I層出土、C43・C44  
第7トレンチSD-1第I層出土。C45～E71第2層(包  
含層)出土

15cm

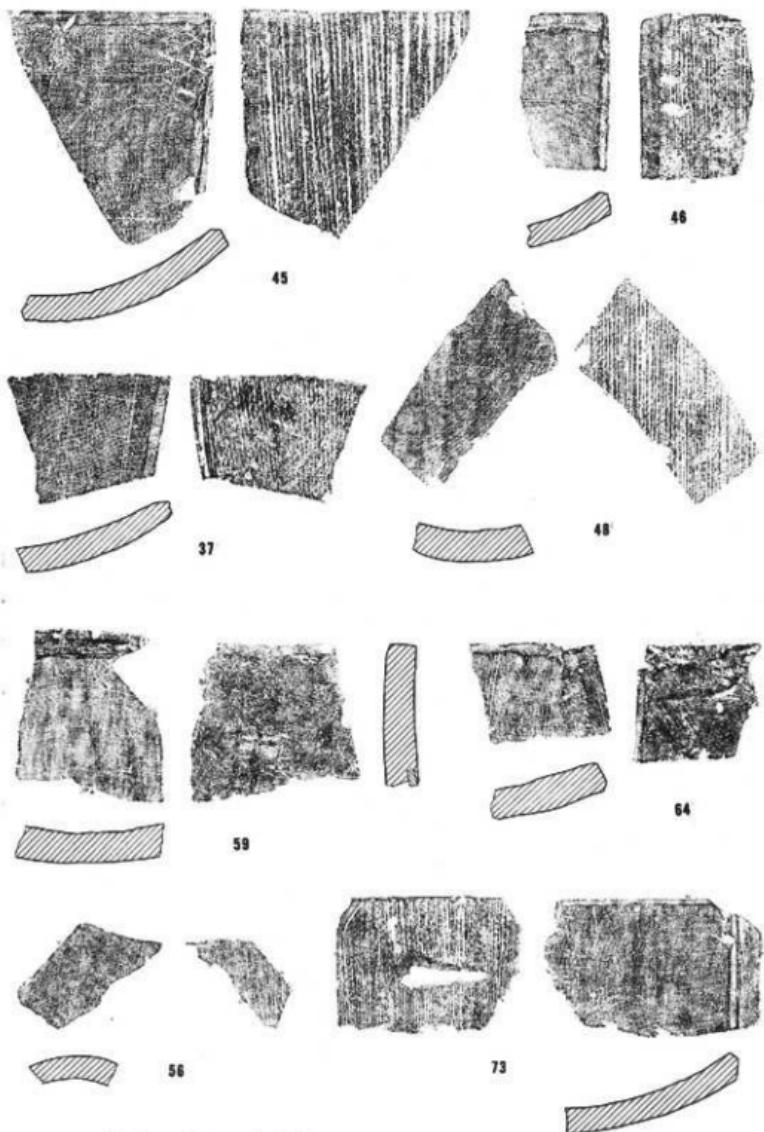




2 軒丸瓦 第3トレンチSD-1第1層出土  
57 軒平瓦 第5トレンチSD-1第1層出土  
32 隅平瓦 第3トレンチSD-1第1層出土

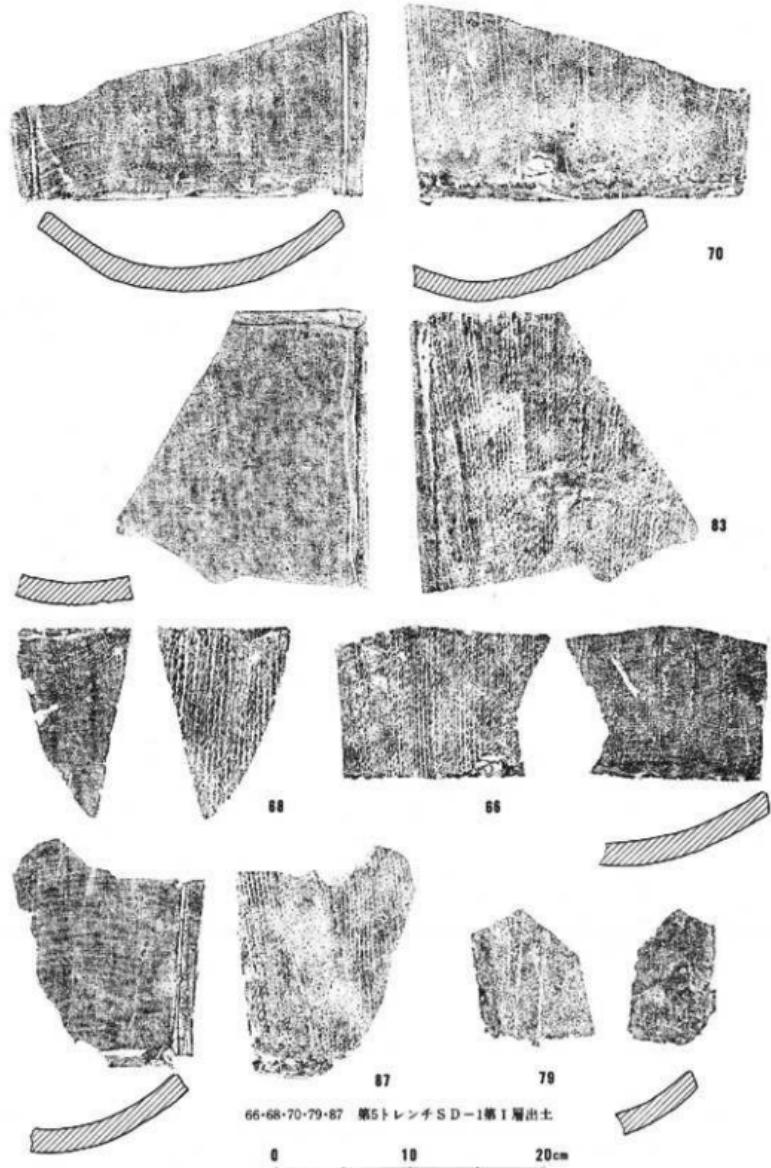


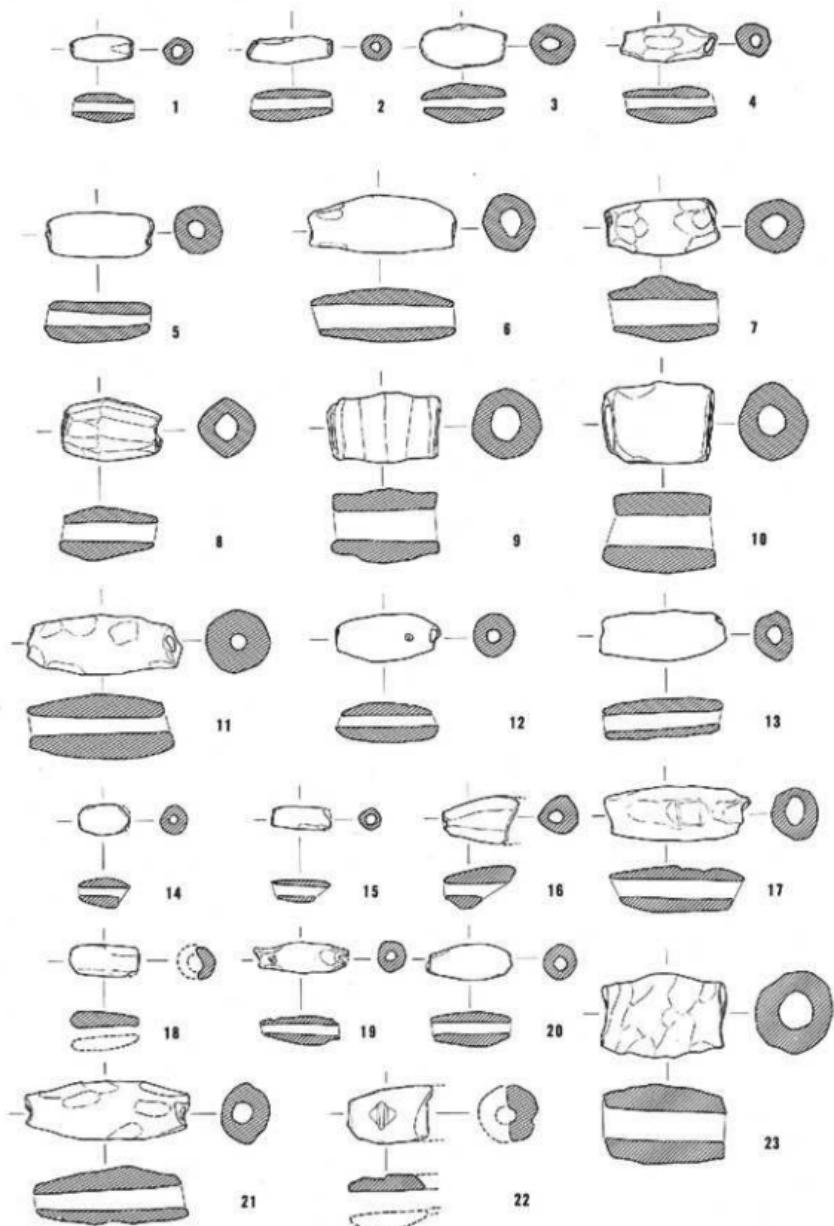
1 第2トレンチ SD-1第1層出土  
3-14 第3トレンチ 敷石上面  
6 第3トレンチ SD-1第1層出土  
58 第5トレンチ SD-1第1層出土  
93-95-96 包含層 第2層出土



37-45-46-48 第4トレンチSD-1第1層出土  
56-59-64-73 第5トレンチSD-1第1層出土

0 10 20cm



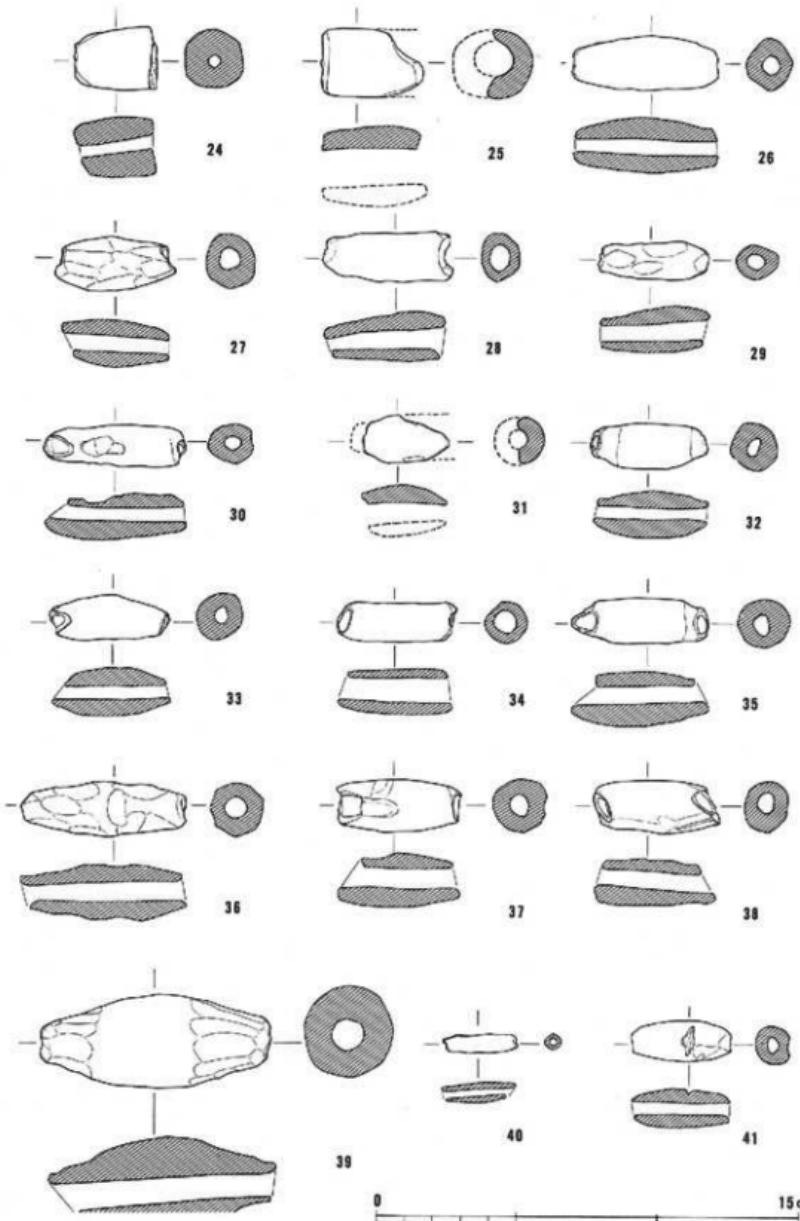


1~8 表掲(1984年発掘調査)

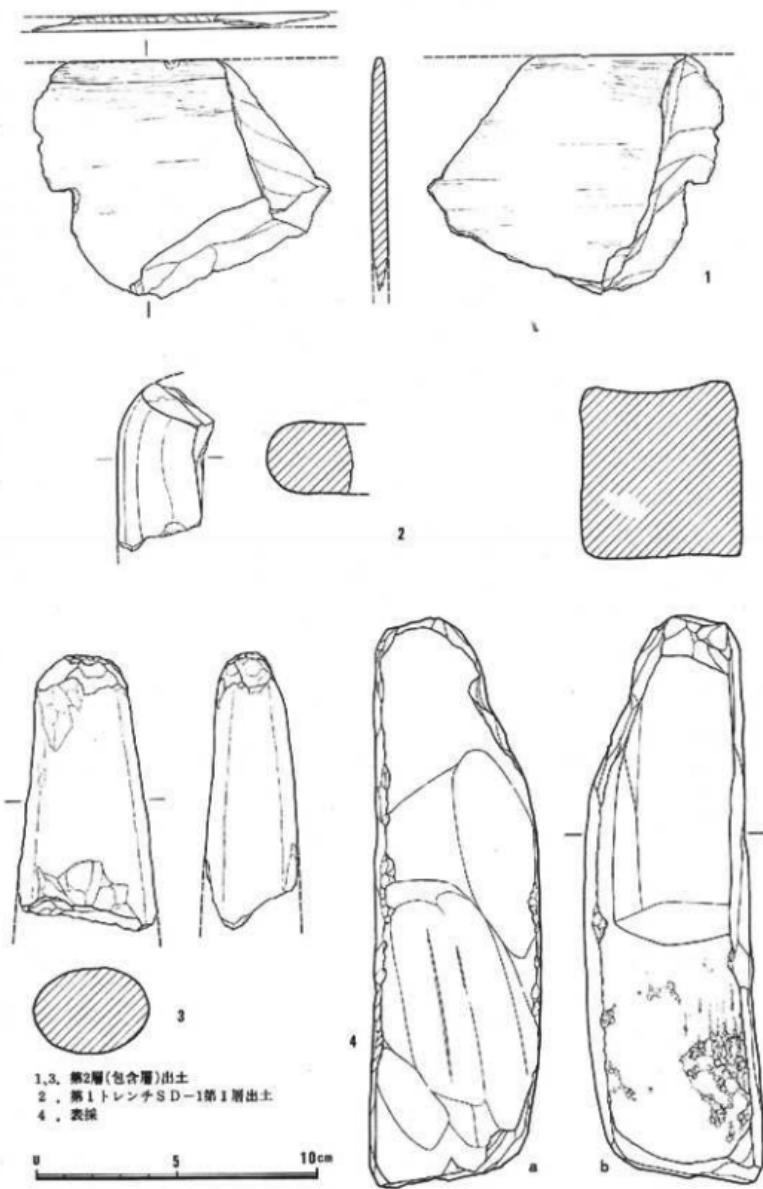
9~13 第2層(包含層)出土

14~23 第1トレンチSD-1第1層出土

0 15cm



24~31 第1トレンチSD-1第I層出土  
31~41 第1トレンチSD-1第III層出土



---

日吉・吉住池遺跡発掘調査報告

1984年9月

編集 滋賀県教育委員会

八日市市教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

(財)滋賀県文化財保護協会

印刷 株式会社 中村太古舎

---